目次

下町風俗資料館　森本俊正……1
忘れられぬ「リオ」　神原拓生……5
やきとりの夢　井上二三男……9
天明七年　三戸岡道夫……13
男運　柴田富佐子……16
「うん」　岸田幸雄……20
鉄舟の行方　山口健二……24
母ひで　大和禎人……28
ハイラル挽歌（一）　金子正義……33
表紙・カット　岸田幸雄

下町風俗資料館

森本俊正

武蔵野の面影を残す雑木林のはずれに、その家はあった。広くはないが庭がある。四角い感じの二階家であった。メモをとり出し、もう一度確めると、扉のわきのチャイムを押した。中から間のびのした、はあい、という声がすると扉がわずか押しあけられ、

「どなたですか」

と老婦人が顔半分のぞかせた。私は初めて訪ねるので警戒されるのは覚悟していた。名前と住所だけの名刺を差し出し、

「大岡忠造さんはご在宅ですか」とたずねた。

婦人は名刺を遠くかざして、長い間眺めてから私を見た。警戒は解いていない。当然だと思った。

「主人は先日入院しました。宅の主人になにかご用ですか」

「いえ、特別な用事で伺ったのではないのですが……、そうですか、入院なさっている。ご病気は」

「脳溢血で倒れました。私はいま着替えをもっ

て病院へ戻らなければなりませんので、失礼したいのですが」

警戒の色はまだ濃く、できたら直ぐ眼の前から消えてほしいと願っている。

「もしや、こちらのご主人は昔、下谷の方にお住いではなかったでしょうか」

「はい、さ、そうでございます」

「そしてご商売が　かじやさんだった」

「はい、よくご存知で」

「その頃近くの長屋に住んでいて、お世話になった者なんですが」

「はあ、さようで」

ことばが下町調になった。

やはり間違いなかった。私は予感が的中したことに、ほっとし、今日はこのまま引揚げてもいいと思った。大岡忠造が幼年時代のガキ大将だったことが判明し、私の頭の中に数知れない思い出の断片が一度にどっと去来し、それを整理し、自分を落着かせたかった。しかし、口から出たことばは自分でも意外であった。

「奥さま、これから病院にお出掛けでしたらお供させていただけないでしょうか」

「えっ、でも、行っても面会なんかできませんよ」

夫人の表情に、けわしいかげりが走り、今にも扉を閉じんばかりだった

「道々、お話させていただくだけで結構です。門の前で待たせていただきます」

私は夫人にいま来訪までのいきさつを聞いてもらわないと今夜きっと後悔するだろうと思ったので自らを勇気づけ、いってみた。

夫人は不快さをはっきり表情にあらわしたが黙って顔をひっこめた。

五分後大きな紙袋をさげて姿を表わした。私は病院までの同行を許可されたのかなあという想いで夫人をみた。彼女は私を見ずに、

「どうぞ、歩いて十分位です」

冬の空は晴れていたが、北風が冷たかった。

「昔の主人のお知り合いとかですが」

「はあ、もう四十年も会っておりません、これまでの消息も全く存じあげておりません」

「あら、それが今頃、なぜ」

「大岡さんは最近、上野池の端の下町風俗資料館というところへお出掛けでしたね」

「はい大変感激して帰り、今度は私を連れてもう一度行ってみたいといっておりました」

「私も先日そこを参観しました。そこで、大岡さんのお名前と年令、住所を発見したのです。二階の展示場に、長い木のテーブルとベンチがおいてありまして、その上に感想文集というのが三冊おいてありました。来場者はそれぞれ、その時の感想など自由に書いていけというわけです。私は自分では書くつもりはありませんでしたが、参観者がどんな感想をもつのだろうとパラパラッと頁をくっておりました。遠くの人もたくさん来てるようでした」

「その文集に主人が何か書いていた」

「そうです。大岡忠造さんの名前と年令を見つけたとき、もしやと思いました。胸の動悸が静まるのを待って感想文を読んでみました。忠造

さんはこう書いていました。

私は下谷の長屋に仕事場をもつ、かじやの倅でした。当時の長屋のいかけやがそっくり再現されているのに胸をしめつけられる想いでした。小さなフイゴや道具類と茶の間の前をしばし離れることができませんでした。おやじの仕事場の隅で何時間でもじっと座ってみていた幼ともだちをなつかしく想い出します。

「仕事場に座りこんでいたのは私なんです」

夫人の指さす前方に病院の建物がみえてきた。あの白い建物のどこかの部屋に大岡忠造が、からだを休めている。

「忠造さんによろしく」

「はい、幸い意識が戻りましたら伝えます。さぞびっくりして、なつかしがるでしょう」

病院の門前で、では、といって、玄関へ消える夫人の後姿を見送った。

数日後、見舞いの電話をかけてみた。夫人の声で、昨夜、亡くなりましたという小さな声が受話器を通して伝わってきた。

忘れられぬ「リオ」

神原拓生

いつもすぐ近くまで、タクシーで乗りつけるそして、私は同僚の吉村と「リオ」へ。

駅前から離れた国道沿いの路地を二、三十米奥に入るのだが、数軒の飲食店らしい明りが向かいあっているしか、不思議と記憶にない。

「リオ」。表は、ありふれた青地に黄文字の看板。店の中は、ほの明るい溶暗。胸あたりの高さのバーの向うに、「リオ」のママは働いている。数列のテーブルとボックスが並ぶだけの細長いスナック。入口に近い壁には、カラオケテープの棚。

適度に酔ってはいても、私は歌わない。吉村はうたうのが好きだ。もっぱら私は話をする。それも口数は少ない。

ママの名は明子。いつもカウンターの向うにいて、めったにこちらには来ない。この前の時は、にぶい青地にえんじの花模様が入った和服をぴしっと着けていた。細身で、気持の動きも繊細らしい。

私は、はじめから妙にこのママ明子に胸がときめく。私はもう旬日もなく五十才。四十台までに遊びつくし、バー、キャバレーの類にはすでに執心はない。いまや時間と金のムダ遣いぐらいにしか思えないし、今どきになってあやしく胸がときめくなど、あるはずもない。

「さて、チミーちゃん、うたってくれるかい」

「いいわよ。何がいいのかなあ」

ママを入れてうた姫三人。ひとりはバーの中。吉村の横にくっついていたチミー、この青森の下北が故郷だという十六、七才にみえる少女が、バネで押されたように立った。

この女は向かいあっていると、黒目が下におりて、白い部分が目立つ、竹久夢二描く女のような顔立ち、表情なのだ。

チミーがマイクをとって、カラオケで歌いはじめる。そして吉村が立って歌う。二人でデュエットをやる。私はこの店に来ると、水割りを飲み、店の雰囲気に乗っているにすぎない。

だが、今夜は、先程から、めずらしく私の横にママが来ている。あでやかなママの和服姿が私は好き。だが、今は違う。チョッキにネクタイ、ジーパンのカウボーイまがいのイキな姿だ。これも仲々よく似合う。私はいつも彼女の一挙手一表情を見逃がさず、しかし、ほとんどは気付かない振りをして、しゃべり、飲み、時々立ち上って、二人のうた姫と交互に踊った。

しかし、今はママがすぐわきに来ている。

「ねえ、K（桂）さんてば：」よばれて私は彼女の顔を正面からまじまじと見つめる。飲む酒

が本当にうまいのだ。「ああ、いい夜だねえ」

すごい美人ではないが、決して不美人ではない。眼や口もと鼻すじのあたりに、育ちのよさといった気品がある。それは彼女の顔の重要な魅力的部分だ。動作にきりっとした節目がある。三度目に来たとき、女たちの間で仕事のことが話題になった。

「どんなお仕事をしていらっしゃるの」「商社マン？」「いや、ケチな下請け会社だよ」「嘘でしょ」「さあね」――「お近く？」「いや、近くもそう遠くもない」

吉村は私の部課で、もう三十年も同じ少年係をやっている。彼女たちが、私たちの本職を知ったら、どんな顔をするだろうか。

「踊りましょう」とママ。「ああ、朝までには

まだ間がある」「二人で旅先にいるような気分ね」夜明けまでいたのでは、私は勤務にさしつかえる。だが、これからも私はこうして、ここに来るのだろうか。

「君は魅惑的だ。一緒に踊っていると、全く楽しい気分だよ」「ほんとですか、光栄ですわ」

私たちは微笑を交わし、踊っては飲み、そして、ママの歌をきいた。歌う姿は、ひたすら一途で、きりっとしたりりしさがあった。

ふしぎな魅力だった。踊りながら、私の人生の凝縮がいまここにあるような気がしていた。そして、走馬灯のようにかつての女たちが現われては消えた。郷里の宮崎市で十年も続いた恋人M・Mと踊っているような錯覚をおぼえた。ママに悪いという気はなかった。M・Mには肉

親、身よりが無かつた。ママも孤独な身で何か似ているような気がする。そして、横顔や動きを眺め、身近かで話していると、もう一人、あの荻窪で数年間つきあったH・Y子のイメージがダブリあってくる。陽気でシャレた気位高い女、そして私を夢中にさせた女。私は八、九分結婚の相手にと思いながら、私が心で逃げの姿勢をとり、決意を示さぬままで、結局はうまくいかなかった。

「ママさん、お互い、このまま、いつまでも変らぬ姿でいたいね」

「それはできぬことよ」

「いや、お互いに時間が止ってくれればいい」

年をとらず、若々しく、いつも情熱的でありたいね」

私は、いつか彼女が「妻の座がほしいわ」としみじみつぶやいていたのを思い出した。

足がもつれ、何かの具合で、彼女がソファの上に倒れ、私は折り重なって、彼女の微妙にかたい身体の上で、しばらくおき上れずにいた。

こうして私は、ママと何度も、身体がぶつかり、お互いに胸がときめきあうのが、息づかいや表情や眼の色からわかった。

このママの仕事は、こんな風に毎夜の客と、いつも危険な、危険な関係にある毎日なんだと、痛いほどにわかるのだ。

そして、私の中にすみはじめた、大事な人は、M・MやH・Y子のときと同じように、眼に見えぬ薄紙一枚ほどのへだてなのに、それでも私は、ママをホテルやモーテルなどには決して

誘うことはないだろうことが、これまでの自分の生き方であった事を、つくづくと思い知らされるのであった。

やきとりの夢

井上二三男

「十五年後の今日、ぼくは、昼寝をしながら、やきとりを食べる夢を見ているな」

これは、小学校の卒業記念文集の課題ー十年・十五年後のぼくたち、わたしたちーに私の長男が書いた「ぼくの十五年後」である。

女の子の多くは、お嫁さん、保母さんか、先

生を夢み、男の子の将来は、医師であり、科学者である。そのような中で、これは、また何とズボラな惚けたことかと呆れ、長男に質したところ、彼の答えは、次のようであつた。

「これから、十年、十五年とたつて、公害がひどくなって、地球には鳥も住めなくなる。人間も食糧がなくなって、空腹でごろごろしている。昼寝するよりしようがない。腹がへっているから、やきとりの夢を見る」

何ということかと呆れながら、私は長男のいう将来が必ずしも絵空事ではないのではないかという不安が胸をしめるのを覚えた。そういわれてみると、科学者を夢みる子供は、「…そして、世の中から公害をなくす研究をしている。」とつけ足している。

今から十年余も前のこと、一時「未来学」という言葉が出回り始めたことがあった。それが、どのような学問であるか、または、どのような事柄を意味しているものか知らないが、未来という語から何か人類にとって明るい将来に係るものという印象で私はうけとめていた。しかし、その言葉はその後は聞くことがなくなってしまった。

長男の十五年後ではないが、人類の未来、地球の未来を考えると、どうも明るい材料より、不安な暗い材料が出て来るように思えてならない。未来学が消えてしまった原因がそこにあるのではないかと思い当るのである。

現在の人間の豊かな生活を支える大きな柱は工業化によるものである。急激な経済成長によって、後進諸国も工業化の路を急いでいる。

人間は科学の成果を人間にとって都合のよいように取り入れてきた。人間にとって不都合なもの、快くないものごとは科学の力でそれを除去し、または押えてきた。それが自然現象であったとしても、科学によってそれを征服してきた。人間にとって最も大きい福音といえる医薬の進歩も科学による自然への挑戦の結果ではないだろうか。最近の科学は生命の神秘にさえ迫っている。神を恐れぬ挑戦は福音たり得るのだろうか。現在いわれている公害の多くは、人間が作り出しているものではないだろうか。自働車の排気ガス、食品添加物の類、水の汚濁、騒音、等々。

最近、地球資源の有限がいわれるようになった。石油は今や地球上を支配する工業的資源である。有限の資源をめぐっての国際間の緊張は絶えることがない。

その資源を消費する人間の数がまた大問題である。現在の地球上の人口は七十年で倍になるという。過去一万年かけてふやしてきたのと同じ数が最近では三十年でふえるという。

殆どの地方自治体の首長はその自治体の発展、飛躍を示すものとして人口の増を挙げるのだけれど、大都市周辺では、人口の爆発的増加によつて、学校、し尿処理、飲用水の供給等の生活施設の確保、急増に追われ、人口増が大問題になっている自治体もあると聞いている。中国では深刻な人口の抑制のため、結婚年令の引き上げ、一子制度等の施策をとっている。日本も

土地と食糧から考えると、既に適正人口規模をはるかに超ているようである。

人間が公害を作り出し、人間は資源を消費することから考えると、人口問題こそは「生めよ、殖えよ、地に満てよ」という神の御言のままでよいのかと思わざるを得ない。

人間の存在自体が、一つの自然現象であると思うが、自然の中で、自然とかかわりながら生きる現代人にとつて、科学は自然征服の道具なのであろうか。

科学と自然の調和を考えることは、私たちにとつて、後世の子孫に、どのような地球を残せるかという大きな命題ではないであろうか。

あれから十年、長男は今春大学を卒業して、高校の生物の教師となる。やきとりの夢は、ゆめであつてほしい。

※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※

作家のことば 1

森村誠一

文学というものは読者作者共に個人性の強いものである。読者の好みや人生観によって作品の評価が分れるのは止むを得ない。万人を満足させる作品はあり得ない。おのれの人生に照らして共感できる文学がその人にとって真の文学であり、共感できない作品は、そこでどんなに人間の真実が追究されていても、所詮それは無縁の文学であり退屈な作品なのである。「面白い」も「つまらない」も個人の印象にすぎず、しかもその面白さにも千差万別の種類がある。

絶対の評価尺度のない文学を個人の印象で評価し、位置づけようとすること自体が大それた試みなのである。

天明七年

三戸岡道夫

「もつといい知恵はないか」

和三郎はさつきから、しきりに考えていた。考えながら頭を振るので、髷も左右にゆれる。それが見る角度によつて和三郎をいなせに見せるのだが、この種の仕事にたずさわっている者独得の、暗く、陰惨で、意志の強い顔は、そうした男の甘さを拒絶していた。

「おい、てめえたちも、手ばかり動かしていねえで、すこしは考えな」

和三郎はいつになく、いらいらしている。

部屋の中には、紙や版木、筆墨などが散らばり、男たちが、書いたり、刷つたり、版木を彫つたりしていた。

役人の子はにぎにぎをよく覚え

紙にはそんな文句が書いてある。今をときめく田沼意次を諷刺したざれ歌である。その田沼政権を、いま松平定信が狙っている。

時代は田沼時代から松平時代へと移ろうとしていた。腐敗政治から清廉政治へ。いや、和三郎に言わしめれば「移ろうとしている」のでは

なくて「移そうとしている」のが正しい。それが和三郎の仕事だからである。

松平定信が政権奪取を決意したとき、和三郎はひそかに呼ばれて相談を受けた。田沼時代が自然に終つて、自然に移つてくるのを、漫然と待つているわけにはいかない。政権は奪取するものなのだ。だが奪い取るには大義名分が必要となる。新しいイメージだ。

清廉政治という新しいレッテルを定信のために考え出したのは、和三郎である。人々は賄賂政治に飽き、打ちつづく飢饉による生活苦にあえいでいた。“清廉政治”。アピールしない筈はない。そして幸い松平定信にはそれを受けつける肌ざわりがあった。

こうして和三郎の仕事というのは、江戸市中に田沼のイメージを失墜させ、かわりに松平のイメージを浸透させていく、その仕掛けの請負いなのであつた。現代風に言つてみれば、地下でマスコミをあやつる秘密広告代理店のような存在である。目的のためには、有ること無いこと噂を流し、町にビラを貼り、闇のかわら版を作つてまき散らし、人々を煽動し、時によつては人も殺す。田沼意次に腐敗政治家というイメージを完全に定着させた和三郎の功績は大きいといつてよかつた。

ところが反対に和三郎の手下の一人が、事もあろうに昨夜殺されたのである。和三郎が珍らしくいらいらしている理由がこの辺にあつた。

昨夜おそく、例によつて田沼屋敷の塀ゃ民家に貼紙をさせていたところを斬られたのである

犯人はわからない。だが和三郎は田沼の一派の仕わざとにらんでいた。田沼も和三郎たちのうさん臭い動きに気づきはじめたのである。和三郎は濃い眉をひそめた。用心のために二人一組で仕事をさせていた。その片方を黒装束に身を固めた集団が襲い、なぶり殺しのように斬りきざむと、あっという間に闇に姿を消してしまつたという。それを見ていたもう一人は恐怖で手も足も出ず、物蔭からただ見ていただけで逃げ帰つてきた。

和三郎は唇をかんだ。

だが下手に仇を討とうと暗殺集団に立ちむかっていつたら、逆にこっちの存在が世間に浮かびあがって藪蛇になる。ここは我慢をしなければならないところだ。残念だが死体も放置しておかざるをえないだろう。

「葬いもできないのか」

和三郎は再び唇をかんだ。

「この仇はきっととってやる」

それにはもっと田沼を手痛い目にあわせて、早く政権の座から追い落す以外に道はない。今までのような生ぬるいことでは駄目だ。

「もっといい知恵はないか」

ふっと顔をあげた和三郎の眼に一枚の絵がとびこんできた。天明凶飢見聞図。餓死者に飢えた野犬が群がっている。

「これだ！」

和三郎の身体に興奮の血が逆流してきた。

浅間山の大噴火、うちつづく大飢饉や豪雨、大洪水で米の値段は上り、人々は生活の不安に

おののいている。
「よし、このネタなら絶対まちがいない」
そう発想が浮かぶと、和三郎は凄味のあるうすら笑いをし、頭は悪魔のように生き生きと回転しだしたのである。
……
大飢饉、大水害というような天変地異は、不徳の政治家への天のこらしめであるという民衆の怨嗟に押流されるようにして、さしもの田沼意次も天明六年に失脚した。つづいて、江戸町民が米を求めて米屋、豪商を襲って暴動化した、いわゆる江戸の大打ちこわしのあと、待望の松平定信老中就任が実現したのは、その翌年天明七年のことであつた。

男運

柴田富佐子

車窓を流れる景色にも見倦きて、私が窓から身を離すと、それを待っていたように隣りの姉が話しかけて来た。
「こないだのお菓子、おいしかった？」
「え？」
「ほら、京都の」

「ああ」
京都、奈良をゆっくり回って来ると、診療所を五日も閉めて、姉が関西へ旅立ったのは夏の終り頃であった。母と回る約束がしてあったが、果せない中に昨年母は急逝してしまった。女学校の修学旅行以来、憬れながら行けなかった寺々を訪れて、母の冥福を祈つて来たいと言っていた。その時の土産物を、貰いに行った娘が網棚に忘れて来てしまい、駅へ問合せたりもしたが、とうとう戻らなかった。
「あのお人形、いいでしょう？高かったのよ」
無くしてしまったとは言えず、当り障りのない返事をするのに私は苦労した。
五十を過ぎてから、とみに肉づきのよくなった姉は、その弾力のある体を私の方へずらし、
「写真もって来たわ」
と手にした写真の束を差出した。見覚えのある寺々の庭園や建物を背景に、姉一人が立っている写真を繰った。五日分だけに数は多かった
「随分洋服もってったのね」
と言う私に、姉は含み笑いをしながら、もう一つの別の束を取出して言った。
「あたしの彼氏」
そら来たーという思いが、咄嗟に私を捉えた母が亡くなってから、何故か姉が私に男の事を打明けたがっているのではないかという漠然とした予感があった。はっきり言って、私は姉の口から男の事を聞きたくはなかった。それでこれまで姉と二人きりになるのを避けて来た。母の一周忌を前に、二人で母の実家へ行ってみよ

うという誘いを受けた時も、私は自分の予感が春の身仕度を済まし、いまにも地面を突破って姿を現わそうとしている気配に身を硬くした。

「〇〇子が一度おばあちゃんの田舎が見たいと言ってたから、連れてっていいかしら」

予防線に娘を連れていく事を思いついて、私は承諾したのだが、急な娘の都合で二人きりになってしまった。

小柄なまるっこい姉とは対照的に背の高い痩せた男は、六十に近い年令に見えた。ここ十年来、この男の出現で母と姉との平和な生活は破られた。涙まじりの訴えの電話を、母から幾度受けた事か。かなり流行っている診療所を一人で切り回している遣りての姉も、男運は悪かった。最後に結びついた男には妻子があった。母が嫌ったのはその事だった。家を出た私に、母はそうあからさまに男の事を話しはしなかったので、私は詳しい事は知らない。しかし、最後まで母を苦しめていたその男の存在に、私が良からぬ感情を持っているのは当然だし、主婦である私は、どちらかと言えば姉の立場よりも、男の妻の立場を先に考えてしまう。

何とか言って貰いたくて、私の顔にそれとなく目を向けている姉の気持は解っていながら、私には言う言葉が見つからなかった。黙って次々と差出される写真に目を落していた。これまで母と私の間にひっそりと身を隠していた男が、突然陽の当る場所へ踊り出て、その目鼻立ちから足の長さまでさらけ出している事の重みが、私の喉元を握りしめてしまったようだ。我慢

しきれなくなったように、姉は男の職業や、生い立ちや、奇妙な癖や、やさしさや器用さなどを話し出した。話さずにはいられないといった勢いであったが、私はかたくなに同じ姿勢を続けていた。姉の饒舌は電車が「佐倉」に停車し前の席に人が座るまで続いた。

「疲れたわ」

写真の束を姉の膝に返し、私は頭を窓に押しつけるようにして目をつぶった。

二十才そこそこで家を出た私と違い、五十を越えるまで生活を共にした母を失って、この人は寂しいのだろうと思った。その寂しさの反動で、ますます男にのめりこみはしまいか。母がいなくなって、男はだれに気兼ねもなく姉の部屋に出入り出来る。居つく事だって出来る。私の考えはそこで、また黒い影だけの男の妻に突き当った。

薄目をあけて姉を見ると、姉もまた後ろに頭に押しつけて目をつぶっていた。垂んだ頬の膚に年相応の汚点がいくつか沈んでいる。姉の女がこの汚点の中に早く沈みこんでくれればいいのに― 私は祈るような気持で、薄い茶色の汚点を見続けた。

北浦の河原はセイタカアワダチ草のけばけばしい色で塗りつぶされていた。

作家のことば　2

新田次郎

同人誌に載るような作品だから、欠点は多いだろう。しかしいいところだって、多少はある。良いところを見ずに、徹底的にやっつけてしまうという合評会のあり方にはかなり強い抵抗感を持っていた。

「うん」

岸田幸雄

（日に少くとも一回は学校内を回ること）、これはこの中学校の校長としての私の日課だ。

ある晴れた日、校庭を回っていると、校舎寄りのベンチに「体育」を見学の生徒五、六人がふざけ合っている。近寄って、一人一人に名前と見学の理由を問うと、みな待っていましたとばかり利巧な答が返って来る。最後にやや離れて、うつ向いたみすぼらしい生徒が残った。

「田中です、どうもすいません」

とだけ答える。この生徒には余程の事情があるらしい。それ以上深く聞くのをやめて、私はその場を立ち去った。

だが、この最後の生徒には強い印象を刻みつけられた。私は早速担任の遠藤先生に聞いてみた。そしていろいろなことがわかった。

もともと心臓と腎臓が悪く「体育」は禁じられていること、両親は共稼ぎで工場に行っており、生活は相当苦しいらしいが、毎月の諸会費は一回も滞ったことがないこと、そして何より驚いたことは、二年生になる時の進級会議で成

績がオール1で大きな問題になったあの田中幸一であったことだ。この生徒だったら、知能が低くすぎて特殊学級にも入れず小学校から上って来たのだ。自分の名さえろくに書けず、どの授業も完全なお客さん、しかも一日も学校を休まない。放課後の掃除は人一倍熱心にやっているあの生徒だ。

私は遠藤先生と相談の結果、私もこのお客さんの相手を週一回一時間だけ勤めることに決めた。

定められた日、それらしい人影が校長室の入口にちらつく。

「田中君だろう」

「うん」

この「うん」にはこっちが恐れ入った。私に対して「はい」ではなく「うん」と答えるのは前にも後にもこの生徒がただ一人。私と向き合って腰をかけると、ニコニコしながらまともに私の顔を見ている。前回と比べてこの明るさ元気さは一体どうしたことだろう。遠藤先生が私のことを余程うまく話してくれたに違いない。二人の会話がどんなことになるかという心配は一ペンに吹き飛んでいた。

「頭の毛が伸びたなあ」

「うん、オレ頭の毛あんまり刈らないようにしてるんだ、おれが刈るとすぐみんなが“タコ”“タコ”ってはやすんだ」

といった調子でなだらかに会話は進む。一時間はすぐ経った。帰りしなには出口のところで洗面を使い、汚れた手をよく洗っていくようにい

いつけた。あとで見ると洗面は手拭とともに見事に汚れていた。

二回目からは「ちわあー（今日は）」と言って入って来た。この調子、この調子。なりも前より少しばかりきれいになっている。

私たちの会話は回を重ねるにつれて、ますます盛り上っていった。話していて彼はいかにも楽しそうだ。私自身もまた大人と話しているよりよっぽど楽しい。それにしてもこの天衣無縫とも言うべき純心は一体どこから来るものだろうか。しかもここには統一のとれた平安さえある。

私は彼と会いながら、いつも大好きな聖書の一節、

“そのときイエスは声をあげて言われた、

「天地の主なる父よ。あなたをほめたたえます これらの事を知恵のある者や賢い者に隠して 幼な子にあらわしてくださいました」

マタイによる福音書一一・二五”

を思い浮べていた。私は彼と会う日がいつも待たれてならなかった。

彼と会話を楽しみながら、私としても彼の生涯を考えないわけではなかった。せめて平仮名だけでも憶えさせたい。これまでどの先生がやっても駄目だったこのことに、会話の合間を縫って日数をかけて挑戦することにした。彼も一生懸命やった。だがこれは結果としては失敗だった。あ行からか行に進むところでどうにもならない壁につき当った。

そうしたある日、私たちはくたくたに疲れて一

休みすることにした。開け放った窓からは花壇の匂いが風に乗って入って来た。小鳥の声もする。それらが私にこう囁いた。

（あなたの考えでこの子を苦しめてはいけないこの子にはこの子の道がある。）

その日限り私たちは平仮名の勉強はやめ、もとの会話だけに戻った。彼はいよいよ調子をあげて行った。ある時、彼は私にこう洩らした

「オレ卒業したら、父さんの工場へ行くんだ。社長さんがオレの卒業を待っているんだ」

ああそうだったのか。私なんかが心配することはないのだ。

卒業式の日、私は壇上から生徒一人一人に声をかけながら証書を手渡した。私の前に現われた幸一君は顔も手も、身なりまで特別にきれいだった。

「工場でがんばれよ」

「うん」

その元気な声がたまたま私の前に置いてあったマイクに乗って会場に流れた。参列者に哄笑が湧いた。

その「うん」以来私は一度も彼に会っていない。しかし、今でも彼は私の心の中に生きている。

作家のことば　**3**　　源氏鶏太

私の小説には、私だけのムードが漂うている筈だと思っている。私は、小説を書いていて、この私だけのムードが出ていると感じたときには、その小説は、成功したと思っている。安心して、先を書いて行くことが出来る。

鉄舟の行方

山口健二

師走も大晦日の夜八時、さすがおしつまる気配、町もようやく観念して暗く静まってゆく。松飾、注連なわを売っていた町内のかしらも屋台をこわし、たき火を消した。商店も大方よろい戸をおろし、寺町の坊主たちは本堂のスス払いをおえて、やれやれと腰さすり、水っぱなすすって、ついでにクシャミを二つ三つした。風がどこからなく出てきて、捨てられたビラや紙袋を時々低くすくいあげ、冷たく乾いた砂ばしらを街灯の腰のあたりまで立てた。十分位間をおいて駅の改札をはき出され、えり立てて暗闇に消えてゆく人影がいつか途絶えた時、三才程の女の子をくたびれた夏の背広の背中にくくりつけた五十男がひとり街灯の下に浮び出た。足の親指先が二つともぬけた古足袋に突掛けた冷飯草履をひたひたと音をたてて、吉田高太郎は、背丈は低いが、胸張って乞食坂を登ってくる。乞食坂という名は今は亡びた。坂の途中、ぬっと立った大行寺山門下に「御殿坂」と立札が立っている。乞食が御殿になった経緯は書いていない。彼はその立札の下あたりで涙とはな水を一緒にすすり上げた。まだ四、五才の頃、宮中お差回しと称する馬車が突如彼の家の前に横づけされ、ぴんと髭を張ったフロックコート姿の男が、帛紗をかけた品物をうやうやしく目の高さに俸げ、足どり静々家の中へ入って来た時、近所の長屋のおかみさんたちの驚き立ちさわいだことが破れた活動写真のとなって思い出される。祖母歌子臨終の夕方もこんな年の暮れのことであった。この祖母は宮内少輔山岡鉄舟高歩の長女である。今日、彼は鉄舟開基の全生庵山門わきの長屋に、女房子供の四人、坊主には内緒で二階をまた貸しもするやりくりのその日暮し、これは御殿と乞食ほどの違いである。今朝も女房は米がなく、正月の餅にかこつけ、米野菜の工面に、まだ乳のいる男の子を背負って埼玉の実家へ行った筈。そして彼の方は長女を背中にくくりつけ、川崎の東芝工場の釜たきに行った帰りである。

「おれは独りになっても釜の火をおとさん」

吉田高太郎は今日の出来事の切れぎれを思い出すのだ。「伊々という人物、一体何者だろう、釜の火落して会社をつぶせと云う。おれは学校出ないから天皇制だの、資本家だの一向わからんが、あの人たちの云うこたあどうもきたないぞ」

彼は女房が連れて行った男の子が「いまに鉄舟のようになってくれるんだ」と突き上げてくる気持の高ぶりにぶるり身ぶるいして、一軒だけうす暗く店をあけている酒屋の軒に立った。

懐中コップ酒少々飲む程の金はある。酒、味噌、醤油などこきまざって土間に染みこんだ匂いが鼻をつく。放蕩のあげく、よいよいになった父親に五銭が程にぎらされ焼酎買いに行った頃の酒屋の匂いである。軒下はさすが風をさえぎられ、四五人の立ち飲み客と、人けはあったが、煙草の煙の中に、何やらサッと殺気のようなものが立ちこめていた。

「地元が何んだちゆうんや、くそ！みなかかってこう、わいはなあ……」背の高い四角い顎、剃りあとの青々とした男が関西訛で凄んだ。

相手は会社員風、厚での外套を着こんだ三十男、頬をひきつらせて、たった今入ってきた吉田高太郎の方へ後退った。

「やめて下さいよ、お客さん何とかして……」薬鑵から熱い酒をコップに注ぎながらおかみさんが吉田高太郎にささやいた。生憎、主人は問屋筋の招待の「初日詣」で出たあとで、店は女手一人らしい。吉田高太郎の目には関西訛が、今朝、工場の広場で演説をしていた執行委員長と称する男に似て見えた。次の瞬間、外套男が紙くずのように高太郎の足許に蹲った。関西訛の拳が外套男の鼻柱にぐしゃりと音を立てたのである。高太郎のひと息にあけたコップの酒の熱い匂いがツーンと脳天に染みて、おかみさんの金切声もろとも、高太郎の耳に益満休之助とたった二騎、東海道を大総督宮ありときく駿府めがけてつっ走る曽祖父鉄舟の馬の蹄の音が聞えた。「卑怯じゃないか、きみ、いきなりなぐるのは……」

関西訛は相手があまり呆気なく倒れて、瞬時手持無沙汰のてい、両手をだらりと下げ、放心の態で吉田高太郎を見た。その青い顎のあたりを突き上げてやりたいと、彼は拳をにぎりしめ、わなわな身をふるわし、背中の子供の重味をはかりながら、半歩ほど前へのめりこみそうによろめき出た。と、うしろから何者かに肩と腕をとられていた。三人の目つきの異様、私服一人に二人の正服警察官が関西訛と吉田高太郎をとりかこんでいた。

「あんたいい年して、子供しょって喧嘩なんかすると、命なくすよ」

自分より十年は若い主任風の警察官に説教されて、その夜おそく警察署の玄関を出た。紙くずのように足許に倒れたあの外套男の安否はつい聞きそびれてしまった。また自分は山岡鉄舟の曽孫であることも言わなかった。多分言っても何のたしにもなるまい。ただ、背中の子が、初めから終りまで声一つあげずじまいで、じっと眼をあけていたのは、曽祖父ゆずりの肝っ玉だったなと、なぐさめられる思いであった。

だが、その子供の方は慣れきった空腹をこらえて、何かもらえる時を眼をあけて待っていたのである。

作家のことば　**4**　　上林　暁

一個の無名戦士として自分の運命を達観し、自由に、放胆に、捨身に、文学上の権威に臆せず、愚作を書くのも止むを得ずとなし、かえってそこに文学的な功績を残せそうな気がする。

母ひで

大和禎人

九十二才になる母ひでが、もうひと月の余医師の所見でいう（重篤）の床に耐えている。

明治人として生きた風雪の木枯らしが、その頭の中を吹きぬけでもするように、しっかりしているようでも虚実を見失うような言葉をはくことが多くなっている。それでも入院の当座は日に二回も施されていた点滴がいまは一回から隔日までに減らされ、回復には向っているのだが……。

「よもちゃん、ばあ」

曽孫四方子の生れたことが、どれほどか弾みになって、湯あみするかたわらにつききって、あやしたりした至福の姿はついさきごろのことだ。赤子を抱き上げる力もまだ持ちあわせていて、かえつてはらはらさせられたものだ。

「おばあちゃんと四方子とでは九十二も違うんだねえ」

「ほんとうに、四方子はゼロ才、大そうな違いね」

長寿の母と、新しい生命と、感慨がなければならない。とくに曽祖母としての母の胸の中を占めたものはどんな懐いであったろうか。

「七十ぐらいで死ねばよかった、……」

「こんなになっても死ねないのかねえ……」

入院の前後はとり乱して、そんなふうにも口走った。腸加答児から、脱水症状も気づかわれ、はき気がともなっていた。用便の失禁状態に陥った。

孫娘の母子が里方であるわが家の滞在を終え、帰っていったのが、ちょうど同じ時期になった。

「私がこんなになったから帰るの、よもちゃんが可愛そう……」

そのころは少康の状態であったから、門口に立って手を振って見送っていた。（私がこんなになったから……）というような感ぐりは老人のものとしても、なぜかひどくさびし気に見えた。

カレンダーに赤鉛筆で◎印をした日は老人会の日として母の楽しみになっていた。十の日の十日目ごとにその日がくる。十二月はとくに二十日が忘年会にあてられ、前から待たれた日になる。さきの十日に腸をこわし、珍らしく医者へ行くと言い出していた。予後、まだ十分の回復を見ないまま、忘年会の日がきてしまった。

高齢の母の体調はこんなことでもろくも崩れた。四方子たちが帰っていったのはそうした事情の谷間にあたっている。

暮の二十四日、入院ということになった。年末年始を医療から見放されないためにもこの措置は避けられないことであった。失禁状態にある患者として、完全看護の人手も確保されなければならなかった。

同室の患者のおえつが絶えない。ヒュー、ヒューと聞えるのだが、介護している家政婦の小母さんによると泣き声だそうである。

「お爺ちゃん、ああして夜も泣くんですよ、入院したのが九月で、もう長い患者さんです、入院費のことが気になるらしくて、ああして泣きつづけているんですよ」

爺、婆の二人を看とることになった小母さんはそういう非情な説明をする。

「これでうちのお婆ちゃんも、あの小母さんに運命をにぎられたようなものですよ、暮も正月もなく、他人の（しも）の面倒を見ようと言うんですから、ただの人じゃできませんよ」

これは私の妹の割りきった言いかたであったが、そのとおりに違いない。

お爺ちゃんの患者はすでにひん死の状態である。酸素吸入を欠かせないし、モチのような啖がのどにつかえる。足指の何本かは（えそ）で失われ欠けている。時々、老婦人が看とりに来るが、夫婦には子がないらしい。お爺ちゃんはこの奥さんがくると、甘え声をあげるのだという。

母はそれこそ初めての入院だから、こうした病室の中で、なじめなくて小さく身をちぢめて

いたようだ。

「お爺ちゃんが、メイ、メイ泣くの」

そんなふうに訴える。

「お婆ちゃん大丈夫かな、アメばかりなめて……」

お爺ちゃんの方も母のことを気にしている。容態が少しよくなり、はき気もなくなると、届けられたブッ切りアメを母はよくなめた。それがお爺ちゃんにはわかるらしい。

「お婆ちゃん大丈夫かな……」

と何度もくりかえしたそうだ。

お爺ちゃんの患者は成人の日にとうとう亡くなった。街に成人たちが晴着を飾った日であった。老人は生きられるだけを精一杯生きることにつとめ、八十五才の生涯を閉ぢた。

「ええ、民生の人はそりやあ、遺体の引きとりが早いんですよ、電話一本ですぐケリがつくようになっていて、テキパキと早いもんです」

その日に限って、午後になって、病室を訪れた私の目にきれいに片づけの終ったばかりのベットだけが、空々しく写った。

「あの奥さん、涙一つこぼさず、そりやあ気丈なものでしたよ、もう覚悟はしていたのでしようけれど……」

そして、

「あの奥さん、亡くなったご主人とは十以上も年が違っていたんじゃないですか」

小母さんは余計なことをつぶやくように言った。

年が改まってから、娘たち母子も一度病室を見舞っている。

「よもちゃん、ばあー」

母は四方子をそれと認めると、笑顔を見せられるまでに立直っていた。もの心つかない、ようやく三か月の四方子はベビースマイルを浮べるまでになっていた。四方子と同じように紙おむつをし、パンプスを使っている曽祖母の変りようはわかるはずもない。

小母さんの目を盗んで、母はベットをぬけ出そうとするまでになった。ちょっと目を離したすきにベットを下りてしまって床の上にへたりこんでいたことがあって、小母さんから晒しを買って欲しいと言われた。病人を預るものの責任から、その晒しは病人の安全を守るために使うのだという、ベットに母をしばっておきたいというのだ。たとえそれが小母さんの用を足す間だけということにしても、呆れた話であった。仕事上とはいえ何と悲しい知恵であろうか。私の顔色を見て小母さんはこうして病人が身を起す引きヒモにもなると、説明を加えるのであった。

脳溢血で倒れた患者が隣のベットに急救車で運びこまれた。意識不明のまま二夜をいびきをかきつづけて亡くなった。臨終に人の出入りが繁く、かなり母の神経を疲れさせた筈である。小母さんの方も廊下のベンチに夜を明かしたという。母は発熱に見舞われた。九十二才の媼の闘病はまだこの先も続きそうである。

（五六・二）

ハイラル挽歌（一）

序章　前夜

（一）

日曜日であるのに旅団司令部でハイラル残留部隊の事務処理に忙殺された宮坂少尉は、午后は休養をとろうと帰途、砲兵隊横手を抜けて伊東台陣地の草山に登つた。

厳しい大陸の冬と、戦局の急の為に休日も無かつたので、久し振りで見る山野は春が駆足で過ぎ、既に初夏の気配であつた。ホロンバイル草原に続く山野は緑に蔽われ、草山の辺りに陽炎が揺めき昇つていた。近くの夏草の中には蘭が白くひっそりと咲き、松の疎林に山鳩が鳴いていた。足元から思いもかけず雲雀が飛び立ち、雛鳥が四方に飛び散つて行つた。ドボルザークの新世界の旋律が流れるような天地であつた

崇高な迄に輝かしい大地に彼のうっ積した不安も和らぎ、生命の歓びが内から膨らみ拡がつて行くのを覚えた。

伊東台山頂から遥か遠く草原を西より東に通じる満洲鉄道が見える。正午にハイラル駅を発車した列車であろうか、玩具のように小さく汽缶車が黒煙を吹き散らせて懸命に走つて、カン

金子正義

パ山に続く大草原の彼方に細く消え、遠く幽かに響く汽笛が悲しく伝わつて来た。内陸部へ引揚げる邦人等が車窓より興安嶺の山々に名残りを惜しんで行つたであろうと、彼も惜別の念が湧いて来るのであつた。

宮坂少尉は昭和十九年十月静岡連隊より、ハイラルの新設二五五連隊に転属を命ぜられ、偶々新しい軍旗を奉体してハイラルに向う部隊に同乗して任地に着いたのであつた。

大陸の十月は既に寒く防寒帽が必要な程であつたが、冬の澄んだ蒼穹の下を驀進する列車には夢があつた。大興安嶺の雄大に起伏する草原を、馬上悠揚と牧童が行き、放牧の羊群は雲の投影のように動いていた。

彼は転属の任地がハイラルと知つた時、遥かなシベリヤより吹き来る異国の風に、プーシキンやオブローモフの香を予想した。帰化しているであろう白系露人や満人、中国人は日鮮人と共に五族共和の旗の下に新しい大陸文化を育てていると信じた。昔、唐の長安の都に胡人の歌が流れ、西域の文化や回教寺院が建ち並んだように、ハイラルにもエキゾチックな文明があるように思つた。或は殷墟のような古い文物が残つているのではないかと、ビゼーのアラゴネーズを聴く興奮に似たものを覚えた。

然し着いて見るとハイラルは索漠たる軍都であつた。うら悲しいハイラル駅、軍人会館や官庁は立派な煉瓦造りで、いくつかの料亭や、日本商品を売る店などがあつたが、大きな店は何軒か鎧戸を下していた。春日造りのハイラル神社

が意外に大きく、肩を怒らせた軍人ばかりが闊歩していた。

宮坂少尉はハイラルに着任した同僚と最初にこの社殿に額づき、国境の町にもこんな立派な神社があるのかと驚いた。内地の都道府県ごとに造営された護国神社と同じ規模で堂々たるものであつた。境内には昭和十四年ノモハン事件で仆れた英霊を慰める忠魂碑があつた。当時ほとんど全滅した二三師団はハイラル在駐部隊であつた。碑は花崗岩の六角塔で冷え冷えと空に向つて突き立つていた。ハイラル郊外西の端れを南より北に流れるハイラル川に合流する伊敏川があつた。雪解け期には両岸は水を堰くものもなく川水は溢れ出して一面の湖沼となり、よく魚がはね、満鉄社員などが投網や釣などをしているのが見られた。魚は大きな鮒や五十糎程の草魚もよくとれた。

今は伊東山より一望千里寂として人影もなく、山々は静寂で鳥の羽音や、物憂げに鳴く山鳩のみで、白樺の枝葉の揺れの外は動くものもなかつた。

いずれ遠からず修羅の戦場と化すであろうと、耽つていた回想より現実に戻つた宮坂少尉は「そうだ、今の内にハイラルの街を見ておこう、」

と急いで官舎に帰り、平服に着替えながら、「久し振りに銀鈴に寄つて見よう」と思いつき、戸外に立つと胸に疼きが生じて来るのを覚えた。

（つづく）

卍卍卍卍卍卍卍卍

編集後記

掌の作品をあつめて、創刊の運びに至った。五、六枚という枚数で何が書けようか、と危ぶむ同人もいたが、あえてこの号は提唱のとおり方針を曲げなかった。この枚数の中で磨きあうことは決して無意味ではないと考えている。むしろ多い枚数よりも力量を問われるはずに思われる。

一作だけ例外に長編の序章の、しかも一部分を掲載したが、紙幅を承知のうえ、意欲的な取りくみをしようとするものだ。この雑誌の命運をかけて、大成を助けたいと思う。

一体、どういうグループなのかと、好事家は目を向けたがるものだが、わたしたちは、わたしたちの思うような雑誌を作り、わたしたちの作品に愛着をかけようとする、多少は腕に覚えのある野武士的な集団であるとだけ称えておきたい。

この号は経費を切りつめるため、ハーフメイドの方式が採用された。つまり下版までの工程を一人の同人が担当し、刊行されたものであることを付記しておきたい。（禎）

卍卍卍卍卍卍卍卍卍卍卍卍卍卍卍卍卍卍卍卍卍

「まんじ」創刊第一号

昭和五十六年三月一日発行（非売）

編集・製版　大和禎人

印刷・製本　清水孔版印刷
東京・北区志茂四－三八－四
☎〇三（九〇二）〇〇〇九

発行　「まんじ」編集部
東京・千代田区神田駿河台二－九
☎〇三（二九三）〇〇九四
柴田方

卍卍卍卍卍卍卍卍卍卍卍卍卍卍卍卍卍卍卍卍卍卍卍卍卍卍卍卍卍卍卍

目　次

もの憂い小島　……　山口健二　……　1
まり子さんと子どもたち　……　岸田幸雄　……　7
病室の窓　……　井上二三男　……　10
両殖人間　……　三戸岡道夫　……　12
あるフィナーレ　……　大和禎人　……　15
町までの道　……　柴田富佐子　……　23
―連載―
ハイラル挽歌（二）　……　金子正義　……　33
表紙・カット　岸田幸雄

もの憂い小島

山口健二

ニッパ椰子を編んで、葺いて組み立てた家が乱雑に肩や腰を寄せ合っている部落に、土人たちはちょいと目には戦争などどこ吹く風かと、お互いなごみ合って生きているかに見えた。でもかれらの中に立ち入ってみれば、癩病と日本軍の軍医に診断されて、離島へ隔離された家族との別れの悲しみもあったであろうし、主食のパンの実や椰子のコブラを大方日本兵に食いつくされたうらみつらみもあったであろう。さすがに未だ軍律を残している日本兵は、かれらが椰子小屋のまわりに四五本ずつ植えている馬バナナの実にまでは手を出さないけれども、かれらとても、日本兵と同じく最後の食い物である南洋あさがおの葉や、電気芋を食わねばならなかった筈だ。でも毎日仲間が栄養失調でつぎつぎ死んでいく日本兵から見れば、黒いつやのある厚い胸を張って、腰に一丁蛮刀と呼ばれる包丁ぶちこんで男たちは山へ食い物を探しに出かけるのだから、かれらには昔から伝わるかくし畑でもあるのじゃないか、少なくとも松茸作りが素人にわからぬように松茸をかくすやり方で食い物をかくしているかに思えた。部落にたまに死人が出ると、その死体の上に日本軍の労役に狩り出されて日当として貰った日本の紙幣をふりかけふりかけ火をつけて一家一部落そろってその煙の中で泣いていた。大日本帝国の紙幣を死体にふりかけて焼く意味合いはわからない。

土人たちの部落は、山が海にせまって断崖になり、その断崖と、波うち際に日本兵によって造られた海岸道路との間、巾五十米程の草地にあった。道路には波が一日中にぶい音をくり返して打寄せていた。断崖の腰のあたりから足許までの傾斜面には機関銃一ケ小隊が散開し、上の削り立った断崖には穴を掘って山砲隊が立てこもっていた。

昼さがり南洋の海は青く、空はあかるく、日本の真夏なみの陽の強さにも似ず、涼しい季節風が植物の葉をか

すかにゆるがせながらその島をつつんでいた。土人の部落から海岸道路を歩いて千米程のところにウボインと呼ばれる直径百米ほどの出島がある。その出島と本島との間には巾四十米ぐらいにわたってマングローブが、思い思いに根をはり幹をのばし合い、からみ合って、奥の方は日光の入る余地もなく葉が密に重なり合っていた。そのマングローブの林を切り開いて日本兵は本島とウボイン島をつなぐ路を造った。断崖から石を切り出し、海中に積み重ねた小みちである。干満の差はわずかではあるが、潮がさしてくると石畳はひたひたと海水につかった。潮が引くと、しきつめられた石があらはに凸凹路になり、マングローブの根のあたりは黒い泥田になって、小魚がかすかな音をたててはねたり、異様な顔をした貝や両棲類が泥の中から首を出して、ぬけるような青い空をじっとあおいでいたりした。その小路と本島の海岸道路と出会うところはT字形になっており、本島の断崖がその交差点にせまっていた。このウボイン島にも土人部落の頭上の断崖に立てこもった山砲隊と呼応して、上陸してくるアメリカ軍の舟艇をうつために歩兵砲一ケ小隊が散開の形をとり、九四式速射砲一門、明治三十八年フランスから購入したと刻印のある砲、それは軍艦の砲塔から下したものであろうがその様な古物一門、それに、重機一軽機二で武装し洞窟ほりをすすめていた。

真夜中にウボイン島の洞窟わきの小屋に独り住んでいる小尉は目をさましてじっと耳をすます姿勢になった。天をひっくり返えす勢いのスコールがこの真夜中に来たのである。真夜中のスコールなど滅多にないので小尉は異様な緊張を感じていた。そのつき刺すような雨足の音を通して、人間の絶叫めいた声がとぎれとぎれに聞えてくる。

「・・・・・・・・異状なし」と終りがききとれた。あぁ歩哨の声だな。今時分だとY上等兵かなと少尉は豪雨の中に立哨するYの姿を思い浮べ、何事もなさそうだなと深いため息をひとつして椰子の葉を敷きつめた寝台の上で寝がえりをうった。

この少尉は幹部候補生上りでもともと軍人になろうなんて志は一片もなかったし、とかく軍隊になじまない心持ちのままこの第一線に引き出されたのであるから、首筋のあたりに見せかけの毅然としたところがかけている様であった。それでもいっぱし軍人らしく、〃こんな激しいスコールの中で、もし小隊が急襲をうけたら、ひとたまりもないぞ〃と心くばりしながらうつらうつらしつづけた。・・・・・今「異状なし」と叫んだのは確かY上等兵だ。中隊からの巡回にYが答えたのだな。このひどい雨の中できこえたのだからYは正規の立哨場所の一本椰子の下をはずしてニッパ椰子ぶきの兵舎の軒までひっこんでいたのだろう。中隊の巡回は下士官一兵一の二

名だったが土人も日本兵になついているし、きょうあすアメリカ軍の上陸の気配もないから一名になった筈、それにしてもここをすませてから海岸道路と土人部落の中を通り機関銃小隊、山砲隊、更に山砲隊の断崖にならんだ非常用糧秣庫と廻って又同じ道を中隊本部まで帰ることになる。苦労なことだ。この雨の中ではYが立哨場所を変えていても大目に見てくれるだろう。等々と。

そして少尉が翌朝目をさました時には、昨夜の猛雨などケロリと忘れたように太陽は南洋の空にたかく、あかるく、マングローブの林は折柄の満ち潮で泥田から海の姿にかえって、ひたひたと単調な音を立てていた。今日の主な仕事はと・・・・・島の頂きにつくった芋畑、かぼちゃ畑の手入れと、洞窟を掘り進めるハッパ工事と、夜中の猛雨で水が入ったかも知れぬ銃、砲、剣、弾薬の点検をすることだな、と少尉は物憂く考えていた。何しろ、アメリカ軍は、ひとっ飛びに日本本土に近いフィリッピンのレイテに上陸したのだから、この島々の日本兵のいのちはもう少し先までありそうなものの、まともに物を食っていないのだから胸は洗濯板なみにあばら骨あらわに、皮膚には疥癬が一面にはびこり首はうなだれ勝ちであった。昨日もF一等兵は栄養失調と云うことで、声も立てず、ニッパ椰子兵舎の板の間でうすい軍隊毛布にくるまって息絶えていた。

「隊長どの、昨夜最後の巡回が中隊に帰らんいうて、只今中隊から何時に此処に立寄ったか問い合せであります」

分隊長が幾分関西弁の調子で少尉の小屋の前に立った。

「うん、Y上等兵の立哨中のことだ。Yにきいてみろ」小尉は偶然昨夜猛スコールの中の声を思い出していた。即座にY上等兵立哨中のことだろうと言い切れたかれは、ちょっと指揮官の面子が立つ思いであった。

ことのいきさつはこうである。

昨夜午前二時、中隊本部を出たK伍長は、中隊右翼の二ケ小隊の歩哨と接触後ウボイン島に向いそのまま行方不明になった。〃ウボイン島の歩哨と接触したのは何時であったか、その時伍長の身辺、態度に異状は認められなかったか〃と云うのである。

やはりK伍長の巡回を三時に受けたのはY上等兵であり、かれの言うところによれば、雨の中に近づいて来る人影をみたから唯何したら中隊の巡回であった。その人が誰であったかは雨中外被で全身をくるんでいたからわからなかった。自分には「ご苦労さん、これから機関銃へ行くよ」と言って去った。他に人影はなかったし、ご苦労さんと言ってくれた声は元気であったともつけ加えられた。

もちろんあの豪雨では歩いた足跡など残る筈はない。巡回が立ちまわる道筋を追って、遺留品はないか、道の

方がくをとりちがえて海へ入ってゆきそのまゝ深間にはまった痕跡はないかとつぶさに調べられ、土人部落の住民にもきびしい訊問と部落内の捜査が続けられたがK伍長はウボイン島を出て土人部落に至る海岸道路で神かくしそのまま足取りは消えていた。

三日たった。

第三大隊は飛行場の背面の山肌に陣地をつくり、飛行場目がけて上陸をはかるアメリカの舟艇にそなえていた。その夜は、夜間に上陸してくる敵舟艇にこちらが自分の陣地の位置をくらませながら闇の中で砲の照準をどの様に合わせるかと云うことで大隊内だけの演習が行われ、ウボイン島の名もない歩兵砲の少尉が、大隊の全将校や分隊長を前にして教官と云う恰好であった。もはやそのような小手先のわざで敵の上陸をはばみようもないとは、これ迄のアメリカのやり口で漠然とながら皆わかってはいる。何しろ敵は上陸する前に日本軍の陣地を艦砲射撃と空爆で根こそぎつぶしてかかる。山容改まると云われるすさまじさは今迄の一寸とした経験と情報で知っていたからである。だから食い物の乏しさからばかりでなく一言で云えば皆々最後はがむしゃらに命を捨てるより、ほかに致し方あるまいと黙契じみた気持ちがゆきわたっていて演習など形の上のことに身が入る筈がなかった。

そこで少尉も只ウボイン島では夜間の急襲にはこんな具合にやるつもりだと披露するぐらいのことであり、演習のあとで行われるえらい将校の演説など自然省略の態で、一種水盃風に椰子酒を飲んで別れた。椰子酒はアルコール分は強い。だが少尉の心の芯には何としても酔い切れないところが残っていた。その帰り途、夜は九時をまわっていた。少尉は日本兵が戦闘のために造った細い間道を一気に大隊本部から海岸道路まで走り下りた。一気と云う気合いで走らなければ、間道の両側に密生しているジャングルからどんなものが突然あらわれるかはかりしれない。全くの暗黒の山道の独り走りである。何度か足をとられてすべりころんだ。大平洋エンダビー沖で輸送船団がやられて海に入った時、持っていた軍刀は海に沈めたから、この島に上陸して配給になった曹長刀だけが今はかれにとって頼りである。何時でも横に払える構えは心の中にあった。K伍長の様な神かくしに会ってはならぬ。右手に黒々と星空を背につき立っている山の頂きのあたりがかすかにあかるい。死んだ兵士の遺体をそこに埋めることになっているのだが、担架で山道を運ぶのが精一杯、土を深く掘る力が足りない。毎日必らず来るスコールに洗われて死体は段々地上にあらわれ、そこからもうもうとあかるさが立つのであろうか。闇におびえる気持ちを、神かくしに会っては犬死であると言いきかせて少尉は山道を走った。

海岸が見えて、右手に土人部落のかくし火をみつけた時は、「俺の島は近いぞ」とどっと汗がふき出る安堵感があった。と同時に「この道だな、三日前K伍長が消えたのは」とはっきり思い出された。少尉は左側に潮の音をききながら一点のかくし火目あてに部落に近づくと、ふと「これから先があぶないぞ」という気持と「ひとつ試してみるか」というゆとりを感じた。かれは兵たちの戯言を思い出していたのである。〃土人は夜ばいする時に蛮刀の柄の方をすきな女の寝ている側のニッパ椰子の壁に突込む。その柄のひき方によって女が承知したかどうかがわかる。承知の合図があったら暫くかくれていれば女が出て来る。少尉は曹長刀の尻を、下りて来た道に一番近いニッパ小屋の壁につっこんでみた。つかと鞘を握る手のひらは汗ばんでいた。警戒心からの汗であり、女を期待するそれではない。その曹長刀の尻は小屋の内側で握られ、少尉のわからぬ土人語が男の声で太く短くきこえた。「こりゃいかん」少尉は咄嗟に威厳をこめて叫んだ。「ウボイン島は近いか」実はウボイン島は千米位先に黒々と海中に横たわって見えていた。「ああ」と答えて右側の出入口らしい所から若い大男が出て来た。「つれていく」その男は日本語で言った。この少尉をウボイン島まで案内するという気持ちが「つれていく」という短かい言葉と物腰でわかった。敵意は全く感じられない。土人は少尉のすぐ左側について歩き始めた。「前をあるけ」と少尉は命令調で言った。左側で近いと刀をぬいて斬る自信がない。この島に上陸した時曹長刀と一緒に配給になった小型のコルトを今夜は持っていなかったことが一瞬くやまれた。勝手知った道だけに土人は少尉の五六歩先を何のためらいもなく行く。腰には蛮刀がやはりある。

左手の海中にマングローブの林が見えて来て、本島とウボイン島をつなぐT字路の所まで来た。「ありがとう、もういいぞ。あした俺のところへ来いよ」と少尉は自分がこの島の長であることを誇示する気持ちも少し動いたが「ありがとう」は本当に心の底から言った。「俺のところへ来いよ」とは案内の礼に何か手許にあるひと品でもくれてやり度いと思ったからである。「んじゃ」と土人は短かく言って今来た道を何のこだわりも示さず引きかえして行く。その後姿を見送っていると少尉の背すじに冷たいものが走った。三日前に卒然と消えたK伍長の出来事がありありと浮んだのであった。

少尉は凸凹の石畳みちを小走りした。定位置である一本椰子の根本にはN上等兵が立哨していて、銃を前にがちゃりと音立ててささげる挨拶をした。少尉は足どりをととのえ、まっすぐな姿勢になって「ごくろう」と発声した。だがそのあと自分の小屋までは蹌踉とした歩き方であった。椰子酒の酔いは全くさめていたのであるが。

翌朝満潮に乗ってK伍長の戦闘帽がマングローブの密生している波打際に浮んだ。かれの死体がその樹木の林の奥深く、からみ合った根の間に発見されたのはそれから数時間後であった。軍医の鑑定によると、この完全に武装した日本兵は、首の動脈を背後から鋭くえぐられていて、そのえぐり創は土人の蛮刀によると云うことであった。部落はあらためて容赦ない調べ方が憲兵と連隊本部の将校の手で進められた。たかだか四、五十名の部落の土人は追いつめられ、一人一人の顔に必死のかげりが見え初めた。「ありがとう、あした来いよ」と少尉と言葉をかわした大男もついにかれの小屋に姿を見せなかった。

その二日後の夕方、T字形に本島とウボイン島を結ぶ地点の断崖の斜面の一本の灌木の根本に、細いひもを一重だけ首に巻いて、うずくまる姿で若い土人の自殺体が見つかった。

その日少尉は、土人自殺者を検死する高級将校らの後ろから土人の死に顔をのぞいてみた。それは少尉が子供の頃一度だけ見た首くくり自殺者のように、鼻や尻から出た汚物の跡はなく・・顔はうすく笑いを含んでいるかに見えた。目をつむると少尉のあたまの中に、部落全員の車座の中に坐った若い土人、かれに因果を説く儀式、その中で仲間の手で行われた絞首、泣きながら顔に化粧をほどこす女、その上でいかにも自分でくびれた様に灌木の根本に横たえられる光景が影絵のようにうつった。それは真夜中日本兵に気づかれぬように行われたであろうし、その夜は南洋にはめずらしく月が冴えていたと少尉は勝手に思うのである。K伍長はあの夜糧秣庫近くの闇の中にこの土人を見つけたのか、何しろ食い物をぬすむと日本兵どうし銃をうち合う頃になっていた。あるいは豪雨の中であらあらしくなった欲求から椰子の壁に銃の先を入れたのであろうか。土人が自分の愛する女を守るこころざしは、とても文明人と称する人間の想像も出来ない強さであった。いずれにしても土人は日本兵になぶり殺しにされると独りぎめして必死の手段をえらんだのであろう。しかしこの日本兵の死と土人の自殺は戦線の片隅の出来事として間もなく日本兵には忘れられた。K伍長は名誉の戦死として本土の神社にまつられたであろう。

この島々では土人の自殺などあったためしはなかったし、かれらには自殺するなんて思いもよらぬ行ないであった。さてこの土人の遺体に大日本帝国の紙幣をふりかけふりかけ焼く葬式はついに行なわれなかった。お上をはばかる静けさとあわれさがその部落をおおっていた。

まり子さんと子どもたち

岸田幸雄

宮城まり子さんってどうして私はこんなに好きなんだろう。自分でも何故だかよくわかんないけど、どうやら歌手や俳優としてではなく、あのきゃしゃな体で身障の子どもたちの世話を夢中でやっている点にあるらしい。

去年の一月の末、有楽町の朝日講堂で宮城まり子さんの作った「虹をかける子どもたち」という映画の試写会があった。この映画には「ねむの木学園」の子どもたちの画いた絵がいっぱい出て来るとのこと。もともと大人の絵より子どもの絵の方が好きな私。ぜひ見たかったし、それに私の好きなマリ子さんをこの目で一目でいいから見たかったので、私は出掛けて行った。

その日私は「開場」と「開演」を間違えてだいぶ早く着いてしまった。しかたなく会場の扉に近いソファーに掛けてゆっくり待つことにした。

ぼちぼち人が入って来る。そのうちに子どもたちの一かたまりが入って来た。一目で「ねむの木学園」の子どもたちとわかる。みな白いしゃれたセーターを着、手に手に画帖のようなものを持っている。彼等はちょうど私の前の方の広い処に陣取った。

しばらくすると今度は私の横手の扉が内側から開いて、

「あんたたち来てたのね。」

というソプラノが飛び出して来た。かなり派手な洋装で、物凄く高いハイヒールを履いている。まぎれもなく宮城まり子さんだ。子どもたちに取り囲まれると、小柄な彼女は私のところから見えなくなってしまう。どうやら持って来た画帖を見てやり、静かに話をやりとりしている様子。

このもの静かな快い情景を目の前にして、どうしたことか泪がこみ上げてくる自分に気がついた。前々からまり子さんと子どもたちの融け合い振りを一目でいいから見たいと願って来た私のために、神は今日の会が始まる

前に私の眼前にその場面を繰りひろげて見せてくれたのだ。

開演のベルが鳴った。私は一番前の方に席をとった。まり子さんを身近に見たかったから。

まずまり子さんの挨拶から始る。学園をやって行く上での苦労話から始ると思ったが、さにあらず。いきなり今日の会になるまでの不行届の点を一々あげて詫び始める。そして「どうもすみません。」を連発する。その詫び方がまた全身を折り曲げて「申訳けないこの気持わかって下さい。」といった謝り方だ。これには誰だって動かされる。

ああ、やっぱり宮城まり子さんてこういう人だったのか。どこまでもひたすらで、正直で、純粋だ。

彼女の話はとうとう詫びで始って、詫で終った。そして引っ込んだ。

いよいよ映画が始る。学園の子どもたちが画いた絵が大写しでいっぱい出てくる。どの絵も私が予想したよりも遙かに遙かに素晴しい！　大人の手なんか加っていないことは一目でわかる。色も組立も素晴しいが、そんなことを考えるより前に絵全体がこっちを揺さぶって来る。一体このような力が子どもたちの何処にひそんでいるのだろうか。

私は感動した。そして激しく泣き出した。私は生れて初めて絵を見て泣いた。幸いあたりは暗いので周りの人に泣顔を見られる心配はなかった。ただ忍ぶ泣声だけはどうしようもない。それに堪えるのに懸命だった。

いつか岡本太郎さんに絵を見て泣いたことが二度あると聞いて本気に出来なかった私だけど、現に今私は泣いている。それも身障者なのにこれだけの絵を画いたなどというけちな同情心からでは全くない。絵そのものが私を泣かせるのだ。

まり子さんこのような絵を見せてくれて本当に有難う。

映画が終ると、まり子さんは再びステージに現れて、「実は昨日までに前売券が二百枚しか売れないで、この試写会がどんなことになるか、心配で心配で、今日ここえ来るのが私は怖くて仕方ありませんでした。それがこんなにたくさんの方々に来ていただいて―。」

と言って深々と頭を下げる。私がもし彼女だとしたら、前売券のことなど口に出さずにしまうところだが、彼女としてはこう言わずにはいられなかったのだろう。やっぱり正直者だ。こういう処が私は堪らなく好きだ。

話終ってステージを立ち去ろうとする彼女に割れるような拍手と一緒にたくさんの花束が次々贈られた。その数の多さには彼女も改めてびっくりした様子。一つ一つ受取りながら言葉をかけていねいに頭を下げる。そして

中にまじった二人の少女を指さし、

「これはうちのサクラです。」

と言う。これにはみんなどっと湧く。

絶え間ない拍手を浴びながら、彼女は客席の通路を去って行った。その後姿を見つめながら、彼女に対する魅力がこれまでより倍加している自分に私は気がついた。

映画会の時の感激はあとあとまで尾をひいた。私は彼女のことをもっと詳しく知りたくなった。それで本屋で見つけたのが本人の書いた「ともだち、ねむの木、そして私」という本だった。

この本はある雑誌に連載した小文を一冊にまとめたもので、「ねむの木学園」の子どもの一人一人のことや見知らぬ読者との手紙のやりとりなどがどっさり出て来る。読んでいていかにも楽しく、身につまされる。

またこれによって、彼女の生い立ち―お母さんを結核で早く亡くし家が貧之で小学校だけしか行けなかったことや、今でも体が弱く病院の床で重症にあえぎながらも学園からの緊急の知らせに再三再四かけつけていることなどがわかる。

私の愛読書の一つだ。

今年の二月、朝日新聞では「人物拝見」に宮城まり子さんを取り上げた。その見出しは「肝大きい泣き虫ひたすら女」だった。

これによっても彼女は余程の泣き虫らしい。学園の道を一人号泣しながら歩いて行く彼女を記者は車の窓から見たことがあると言っている。そういえば試写会の時妙に私が泪もろかったのは彼女の泣き虫が私に移っていたのかな。あの夜そういう素振りを彼女は全く見せなかったのに。

この記事はかねがね私が知りたかったことに対していろいろ答えてくれた。ある時彼女は記者に「天を恐れぬ所業を始めちゃったという気がして。子どもたちってどうしてこんなに重いんでしょう。」と洩らしたこと。重症というのが椎間板（ついかんばん）ヘルニアであること。等々。

考えてみれば私が知っている彼女のことといったらほんの一部分ちょっぴりにすぎないのだ。それだけに私は彼女のことをもっともっと知りたい。誰でもいいからまり子さんのことを教えて下さい！

（一九八一・四・一一）

病室の窓

井上　一三男

看護婦に抱きかかえられるようにして、ベッドに横になった患者は、小柄な老人のようで、伸びた顎ひげが見えた。患者は殆ど動かず、点滴の針を打ちながらの看護婦の問いに答える声は細く、同室の患者の耳には入らなかった。

同室の患者たちは、布団の中で、枕から頭を浮かすようにして首をもたげ、「これは重症だ。」とお互に眼で語り合った。

老人に附き添って来た四十才がらみの男女の女の方は老人をベッドの端に立って見守っていた。男は、窓辺に寄って、病室内を見回したり、三階からの眺めに興があるのか、そこを離れようとしなかった。

廊下の方から、早い夕食の配膳の動きが伝わって来る頃、老人の隣のベッドにいる病院内の出来事の情報屋が、関心を制し切れずに、窓辺の男に聞いた。

「どうしたんだい。」

「いやあ、もう年のせいだろ。何も食えなくなっちまったのさ。もう随分何も食ってねえから、何日もつかじゃあねえかなあ。」

えらい重病人と隣り合わせになったものだと情報屋は首をすくめた。

夕食の配膳車が病室の外にとまって、それぞれに食事が配られる。老人にも普通食が出された。夕飯を食べるかという女の問いに、老人は、弱々しく首を振った。老人の夕食は、病院からの食事では足りない情報屋がいただくことになった。

老人には、女が附き添って泊まることになった。情報屋は、女から、老人は北の山の開拓農家で、細君と二人で僅かの畑を耕し、豚を飼ったりしていること、女は老人の先妻の娘で、伊勢崎の電工のところへ嫁に行っており、先程の男がその電工であることなどを聞き出していた。

早い夕食時刻から夜までは、看護婦の動きもない一時で、窓の外も、畑や、遠い林が暮れなずむ中に静かである。老人の腕へ落ち込む点滴の薬液だけがポタ、ポタと動くもののようであった。

と、その中へ、あわただしく、小柄な、痩せた、黒い老婆が入って来、ギョロリとした眼で室内を見回し、老人のベッドにつかつかと近寄ると、抱えていた大きな風呂敷包をベッドの端におろし、老人の枕元を覗き込むようにして、老人に大きな声をかけた。老人の細君であった。細君は、点滴の薬液の容器を大きな注射だと言って感嘆し、これで、じいさんは治ると断定した。細君は、先妻の子を追うようにして返えすと、ベッド脇の椅子に腰をおろし、老人の枕元に附き添った。大事な亭主を他人には渡せないという様子に見えた。

細君は、老人の針が差してある腕を揉みはじめた。情報屋が驚いて制止した。注射の後は揉むのがよいのではないかと細君は不服そうだったが、やめた。

室内に灯がつき、夜になった。それまで動かずにいた老人が声を出した。

「・・ベン。・・ベン。」

「何だい。えっ。何だと。しょんべん。」

細君は、大声で老人の言うことを確かめると慌てた。

「そんな、腕に針がささってるのに。」

うろたえる細君に老人は悲鳴を上げた。

「ションベン！ションベン！」

情報屋が看護婦室へのベルをならした。

老人は、ベッドの上に跳ね起きると、自分で腕の注射針を引き抜き、すぐ横の室内にある便所へよろめき込んだ。

点滴の薬液は床の上を流れた。駆けつけた看護婦がその薬液の上で滑った。

しばらくの時間が流れた。便所から何も物音が聞こえてこない。老人の様子を覗いた看護婦がびっくりしたように大声を出した。

老人は、洋式便所に反対にまたがり、こらえにこらえた排尿にあわせて十数日間の貯蔵物を放出していたのである。

「じいさん、何だって、あんなにためてたんだ。」

細君も、その量にあきれた体であった。

看護婦は、若いながら手際よく処理し、スリッパの用意もなくはだしで便所へとびこんだ老人の足の裏まで拭き清めた。

「おじいさん、出てよかったわねえ。さっぱりしたでしょ。」

「ああ。せいせいした。」

老人は、初めて言葉を発した。

よかった。よかった。これで安心して眠れる。同室の患者たちも、この夕刻の慌しい出来事をどうなることかと見守っていたのである。外は、もう暗くなっていた。

両殖人間

三戸岡道夫

「胸がむかむかするのです。吐きっぽいのです」
患者は三十才前後のサラリーマン風に見えた。だが、どこを診察しても異常は認められない。
「どこも悪くありませんね」
「でも、むかむかするのです」
患者は胸を押えて、ゲーゲーやった。本当に苦しそうなのだ。にせ病ではない。
「おかしいですな。とりあえず薬をあげますから、すこし様子をみることにしましょう」
医者はカプセル状の薬を三日分ほど渡した。
……
三日がすぎた。
「先生、少しもよくなりません」
患者はふたたび医者の前でゲーゲーとやった。
医者はその日時間をかけて慎重に検査した。すると女性の悪阻に非常に似ていることがわかった。

「……？」
医者は首をかしげて、患者である男の顔を眺めた。
「念のためにレントゲン検査をいたしましょう」
その結果患者は妊娠していることが判明したのである。
「判りましたよ。これは悪阻です。あなたは妊娠三カ月……」
「そ、そ、そんな、馬鹿な！僕は男ですよ」
「でも、血液検査の結果も、レントゲン検査もまちがいありません。ごらんなさい、この妊娠レントゲンの画面を…。この豆つぶのように動いているのが、あなたの胎児…」
患者はその場に卒倒した。
……
医者は翌日、東京医師会の会合に出席した。そして珍らしいこの患者の例を話した。すると、あっちでも、こっちでも、最近妊娠した男性の患者が運びこまれることが判明したのである。
「これはわたしの所ばかりかと思って黙っていたのですが、そんなに多いとは、こりゃ驚き…。ひとつ、研究してみる価値がありますな」
……
医師達はいっせいに調査にのり出した。
妊娠した男性の一人一人の素行調査をした。すると、共通項として一人の女がクローズアップされた。川崎堀之内のトルコ嬢で、あけみという女だった。
男たちはいずれもそのトルコ嬢のサービスを受けて、しばらくすると奇病（？）に悩まされ始めたという。すなわち男たちはすべて、あけみという女と交渉を持って妊娠したのである。病気の代わりに、子供をもらったということか。
……
そんなある日、医者は川崎へ出掛けていった。刑事責任追究のためではない。新しい臨床医学研究のためである。あけみが勤めるトルコ龍宮はすぐ見つかった。堀之内では一流だという。豪華絢爛、ケバケバしい入口をくぐり、
「あけみさんを…」
「ご指名ですか」
「そう」
「しばらくお待ちください。なにせ売れっ子でしてね、いま、仕事中。それにもう一人予約が入っておりますので、二時間ぐらいはお待ちいただかないと…」
「結構です。待っています」
「他にいい女もおりますよ」
「いえ、待ちます」
今回ばかりは、あけみでないと用が足りないのだ。
待合室でテレビやポルノ雑誌を見ているうちに時間はすぎて
「お客さん、個室の方へどうぞ」
背の低い、小肥りの女が、パンティ一枚で現れた。売れっ子というが、こんな女のどこがいいのだろう。年も若くはない。
「早く全部お脱ぎになって…」
「あの、今日は話しだけでいいんだが…」
「馬鹿ねえ、こんな所にきて話したって、しょうがないじゃない。脱いで、脱いで、あたし、後がつかえているんです」
裸になる。ぬるぬるしたローションが塗りたくられる。あけみの身体が密着してくる。
「君のサービスを受けた客、みんな妊娠するんだって…、本当？」
豊かな乳房の下で窒息しそうになりながら聞いてみた。
「あら、その事……？」
あけみは、ウフン、と鼻を鳴らして、

「どうも、そうらしいんです」
「どうして男が妊娠するの」
「この間のお客さんもそんなこと聞いて帰ったわ。お客さん、お医者さん…？」
「ねえ、聞かしてくれよ」
「これ、あたしの復讐なんです」
「復讐…？」
「そう…、あたし、過去、何人もの男にだまされたんです。男たちは誰もうまいこと言って近寄ってきて、妊娠するとたちまち雲か霞と逃げていってしまう。あたし、なぜ女ばかりが妊娠する、不公平だって、そう思ったんです。男は妊娠する心配が絶対ないから、安心しきってセックスをするのに、女はいつも妊娠の心配におびえている、男にもその苦しみを味わせてやらなくっちゃあ…、そう男を呪っているうちに、あたしの身体、いつのまにか別の人間に変身してしまったらしいんです。というのは、あたしとセックスする相手は、どちらが妊娠するか、その時になってみないとわかんないんです。だから男の方が妊娠する場合もある」
「そんな馬鹿な！男がだよ」
「でも、これ、本当なんです。あたしの身体がそう変身したんですから…」
医者は腹の上でぬるぬると這いずりまわっているあけみの肉体を、不意に不気味なものに感じ、恐ろしげな眼つきで眺めた。
「でも男が妊娠する場合って、医学的にどうなるのかな。逆流現象が起るのか…、それとも、吸いあげるのか」
「そんなこと、お客さんたち、医者の研究することでしょう。お願い、そうじろじろあたしの身体を見ないでよ」
「それから」
「だから、あたし、この新しい身体を武器に男に復讐しようと、多くの男性と交渉のできるトルコに入ったんです。だから、あたしの客になった男は妊娠する可能性がある」
「俺たち、安心してセックス出来ないじゃないか」
「女と同じになっただけなんです」
「それじゃ両性人間だ」
「そう神経質になることないわ」
「両性というより、両殖人間と言うべきかもしれない」
「お客さん、それだけじゃないんです」
「えっ…！」
「その妊娠する男性がセックスすると、その男性と交渉を持った女性も、あたしと同じ身体に次々変身していくんです。こうして無限にその波はひろがって…、いつの日か、地球全体の人間が……」
「おい、よせよ」
「ウ、フ、フ、フ…」

トルコ嬢はアイシャドーの濃い、たぬきのような眼を開いて笑いつづけた。
サービスは峠の頂にさしかかっている。
「そろそろお客さん、本番にいきましょうか」

あるフィナーレ

大和禎人

告白としては形通りにすすめられていた言葉の流れが急に変わった。淡々と述べられているのだが、おや、と参列する父母たちの視線が壇上に向けられた。マイクによくのる声であるし、声量も豊かである。
（心の曲った奴は噺家になるな）
というところで言葉を区切り、式場を見わたすかに見え、キラと眼が光ったようであった。なにを言うのかと思うと、次のような言葉があとに続く。
（柳家小さんという落語家があることをみなさんはもちろん知っているはずですが、これは今の小さんが四代目の先代から教えられた言葉です。落語のなかに出てくる人物は皆善人ばかりで悪人はおりませんから、噺をする噺家は心が素直でないといけない。ずるい奴はずるい噺になり、生意気な奴は生意気な噺になる。落語の中に全部出てしまう。だから落語を演ずるものは心を正しくもてという教えのようです。要するに芸は人なりということを言おうとしていることに気づきます。（心の曲った奴は）というきびしい言葉は芸をみがく人間修業のきびしさをそのままあらわしています。心してこの言葉の中の真意をくみとりたいと思います。）
壇上のバックスクリーンには瑞雲を形象した飾付があるが、国旗は見られない。そこに日の丸の旗が飾られて

医者はとたんに恐怖の眼を見開いて、
「やめてくれ、おれは妊娠したくない！」
絶叫した。

いたか、いないかはその他のチェックポイントとともに後日、教育委員会に報告がまとめられる。ここに出席している役所の人間がそれを報告するのだ。その他としてより重要なのは君が代の斉唱が行われたかどうかである。この学校ではメロディーだけがレコードで流され、起立を行っている。この日は一人だけ起立をしない生徒が卒業生の最前列にいた。予行の行われた時から、それを承知していたが、強いて席を変えなかった。あるキリスト教系の新興宗教団体の子弟だった。国旗がステージから消え、君が代の斉唱がメロディーだけに変わったのは今の校長が着任する直前の卒業式からであった。

（心清ければ喜び生る
あたかも青空のごとし

これは武者小路実篤さんの無車詩集の中にある言葉です。あの南瓜や茄子の画を好んで描いた武者小路さんの言葉です。ひかれる言葉です。

（心の曲った奴は嘶家になるな）という小さん伝家、玉条の心に通じ、全く同じ意味であると思います。心に青空を持つ素直な、正しい心の持主になることを諸君に望みたいと思います。

どうやら、今日の告辞のさわりの部分にさしかかったもののようだ。問題が多く、多難に過ぎ去ったこの一年がかえりみられ、澎湃とした感慨がその頭の中を過ぎる。眼の前に席を占める卒業生集団の顔が重なりあって意識にとらえられる。

（君らはなんとしても子供だった、せいぜい悪を気取ってみるものがあったかも知れないが、なべて子供だった……

そういう想いがその胸をあらためて這いのぼっていく。（仰げば尊し）や（螢の光）を歌いたいと言い出したのは生徒たちの方だった。一度だけ廃めてみてすぐ復活した。卒業式をセレモニーとしてどうとらえるか、理窟を並べてきたのは一群の教師たちであって、甲論乙駁に疲れた挙句であったものが、あっさり生徒の希望で覆ったのだから面白い。ナウな生徒気質を教師を業とする側が見抜けなかった結果だ。言いかえれば（仰げば尊し）や（螢の光）を歌うことによってセンチメンタルな陶酔を得ようとする権利までは奪うことはできなかった、という皮肉である。教師の側でわが師の恩という詩句にこだわるのは勝手であって、生徒の方では全く問題にしていない。古典的なメロディーに魅かれるのだ。わが師の恩という詩句の前に恥じる教師は消えなば消えよという主張が別してあるわけではない。ドライでしかもウエットなのである。同様に日の丸をステージに掲げることで右翼団体あたりの会合を想い泛べるのも一群の教師の恣意かも知れないが、まあ、それほどに言うなら、日の丸は校門に二旒かかげれば良い。かわって瑞雲をステージのバックスクリーンに飾りつけようと、むしろ積極的に提

案してからもう三年目だ。美術の教師がそれを図案化し、材料は発泡スチロールで、金泥、銀泥の色彩が施されている。スチロールは看板屋の糸鋸で切り抜かれているから、手際も鮮やかである。日の丸と君が代の取扱いについて、失地回復を重大と考えるのは一部の大人達と、役所の人間たちだ。一群の教師たちの恣意が思想なら、こちらの方も頑迷な大人たちの思想ではないのか。区議会の議員先生と呼ばれる人達となると、いよいよ始末がわるい。先生と呼ばれるものの愚かさに共通点がある。ところで告示はさらに続けられる。

（知恵のあるものが知恵のみを頼り、力ある人が力のあるままに道をゆがめることがあってはいけないと思います。どんなに力んでみても自分一人では生きられないし、人間の知恵や力だけでは生きられるものではありません。心に青空を持つ生き方をしたいものです……）

そして、眼の隅に職員席の一隅をとらえる。最右翼に教頭のM先生が見える。式次第のト書を手にして黙然、冥想の態に見えるが、実は告辞の終りを待って間髪を入れず、（起立っ）の号令をかけなければならないので、呼吸をはかっているのだ。あらかじめ告辞の原稿までは見せてもらってはいない。大概前日夜遅く書き上げた原稿なのだ。ある校長は開式一分前に出勤して教頭さんをハラハラさせたという話がある。もっともそれは大変難しい学校で式の直前でも一群の教師に取り囲まれ、詰め寄られるのをかわすための苦肉の策であったらしいのだが、そんな場合でも教頭さんはつねに万一には代行する心構えを忘れてはならない辛い立場にいる。

マダム蝶々夫人のような、あるいは淡谷のり子のような、イブニングドレスと見紛う黒づくめの、何とも艶な女教師は体操のI先生だ。「卒業証書授与」というさきの次第では（読み上げ）に卒業生の呼名を堂々と行い、存分に貫録を発揮する見せ場があった。ご主人が隣県の校長先生とかだが、夫人は夫人。一群の教師たちの中でも尖鋭という複雑さがこの人にはある。校長婦人の方は後添えだと囁やかれていたりするが、それは余分なことだ。

（どういう心算でしょう、あれはイブニングじゃありませんか、ねえ先生）

（さあ、どういうことでしょうか）

教頭先生との私語があったが、そんな答えがあっただけだ。この人も心ひそかにI先生の女体にはひ弱なおのれが圧倒されそうで、辟易を感じていたはずに思われる。クラスの順からいってその隣にあるべき学年主任のS先生なぞもやはりその体軀の蔭にかくれてしまうだろう。しかし、この人は組合のリーダである。ふだんから蔭にある如くして、実はなかなかの智嚢である。いまも彼は蔭にかくれたのではなくて、いつか式場の最後部に立っ

ていた。問題児の行動を監視する姿に見えるが、告辞の内容にはどの職員よりも注意深く耳を傾け、じっと蛇のようなあの眼で壇上の人を追いもとめ、一言、隻語も聞き洩らすまいとしている。父母席の反応もこの位置に立てば手にとるようにわかるはずだ。巧妙な泳ぎ方である。壇上から言えば実はそこがつけ目でもあって、聞いてもらう必要がある。だが、言葉尻をとらえられてはならない。

そこで、はっし、と壇上では虚空に眸をむける。微笑を口辺に泛べながら、次の言葉にうつる。マイクに声がのる距離を加減しながら、それに向って吐きかける。

（夢をひとつ持ち給え
希望をひとつ持ち給え
身近なことでは
計画をひとつ持ち給え
明日のことでは
予定をひとつ持ち給え
これはまた別の人の言葉です。）

S先生は視線をぢっとこちらへ注いだまま、右の方へ移動する。自席へ帰ろうとしているのだ。ふと、石川五右衛門のような頭髪の生徒が眼に写った。問題児のYだ。そのすぐ近くにNがいる。P・T・A会長の息子だ。この生徒の母親は会長であった。NはYの親衛隊の一人である。Yが毒したとは言いきれない。Nの方にも甘さがある。母親はそのことで会長の職を悩みぬいた。そして母親であることに負けた。女会長は先頭に立って生徒たちの間に続発する非行の責任は学校にあると詰り、しばしば詰寄る場面があった。（学校側がどうこう）という面妖な言葉が一群の教師たちの口から吐かれることがしばしばあるが、そういう教師たちがあたかも局外者の振舞いをするのと全く同じようにこの会長はその（学校側）と対立した。地元の区議がたまたま議長職にあるその袖にも泣き縋った。議長は票田にかかわることであるから、すててはおけない。彼はこの学校の会長としても十何期もつとめ、あげく、子供の在籍しない会長ということが問題になり、石もて追われた恨みがあった。共産党議員で子弟の在籍するIさんを擁立しようとする一部の父母の動きを封じるためにも学校が両成敗にしたものである。長すぎて花道のない引退であった。議長はそうした経緯に一矢をむくいる必要があった。彼は機関紙をかりて弾劾を試みたりもしている。

「これが学校か」

という大見出しで暴力事件をあばいた。

「中学校の卒業式で生徒が大暴れ、小学児童の口にガムテープ、こちらはオールドミスのヒステリック」

これが大政党の末端ローカル紙（自由○○）のトップ記事であった。二年前のことだ。地域の骨がらみもこうなると滑稽であり、笑止なのだが、その議長先生はそれをネタに恫喝までする。学校はそんなことでは決して良

くならない。

（この新聞は私のところで押えてある。これは配ってもらっては困る。混乱するだけだ）

と言いながら、その束を指さして見せた。寝起きのガウン姿でマドロスパイプをくわえながら、不遜の態度である。地方議員の程度はこれでわかるのだが、そこは我慢しなければならない。議員先生であり、議長先生だからである。その議長は今日の卒業式には出席していない。彼は利巧だから、無難な名門校の方に臨席して、いまごろは鼻をヒクつかせ来賓席あたりを多分ヘイゲイしているであろう。それぐらいのことを読めないでは壇上の告辞はつとめられない。今日はM議長にかわってI議員が臨席している。多分議長職権で割振ったのであろう。こちらはいっそうポンチ絵議員である。式場の背後から遅れて入ってきて、わざと末席に座わるものだから、余計な手数がかかる。

（先生、どうぞこちらへ）

飛んでいって、来賓席へ押しやる。

（いいんだ、いいんだ）

と言いながら、決して良くはない。俺に気がつかぬかというポーズで入ってきたのだから心の裏は知れている。たとえ愚民の選んだ選良の先生にしても、これはまた愚かしい光景である。今日はこの愚かなI先生一人だから良いものの、前任の学校では一人の議員先生も臨席のない気楽さがあったものを、この場合両先生が揃って出席したとなると、ことはいっそう面倒になる。議会のメッセージをどちらで読んで頂くかの問題がある。互の話し合いで決めてもらうにしても、互にゆずりあい、ゆずりあうから時間がかかる。議長の方は陣笠をたてようとするが如く見え、結果は俺が読むという読みがあり、それだけおおように構え、貫録を示したりする。はなはだ、ややっこしい時間が流れるものだ。今日はそれがないだけでも結構なことであった。

（あれもしたい。これもしたい。しかし、まだなにもやっていない。

これもしている。あれもしている。しかし、もうひとつ身が入らない。

こんな思いは普通の人間の常であるかも知れませんが、のりこえる努力の子であって欲しいと思います……）

校庭の花壇の一隅に（努力の子）と刻まれた記念碑があった。校歌の一節にある言葉を選んで、この学校の在任を限り退職されたH先生が残された碑である。自費で石工に彫らせ、思いをこめられたものらしい。菊桃の枝垂れの下につつましくこの碑は立っている。建碑の趣旨が一個の教師の私意を露わにしたものでないところに清々しさがあり、好ましい風景をなしている。短かくただ（努力の子）とだけ刻まれているところも良い。H先生

が建立したことを物語る文字は注意深く背後の茂みへ足を踏み入れなければわからない。

（心に青空を持つことから、皆さんの将来にひらけるものが必ずあると思います。どうか心して門出をしていただきたいと思います。）

この学校では「告辞」となっているこの次第は「卒業生におくる言葉」として見ても、大した変わりばえはない。旧態を脱するものではない。大方の小学校で採用する（呼びかけ）形式は声変りをしない児童の可憐さもあって父母を納得させ、ホロリとさせるものだが、中学校では適当とは思えない。かといって、主体は卒業する生徒自身にあると議論してみてもいい知恵は泛ばない。日の丸と君が代の取扱いの論争が年中行事として廻ってくる。この二つがチェックポイントから外されない限り、論争には中道の結論は生れてこない。新機軸は単なる待望論に終ってしまう。

ともあれ、告辞にしても、おくる言葉にしても餞けの意味に変わりはない。そう思うからこそ、もっともらしい話をすることになる。無難で平均的な話にならざるを得ない。ことにそのさわりの部分をあんこにして包む話の前後は形通りになる。せめて、あんこは一味あるものに工夫をして見たい、と苦心がいる。毎々同じであったり、どこかで聞いたようなということでは底が割れてしまう。実は今年はこれが最後の卒業式で、旬日ほど後には退職をしていく感慨があるのだが、そうした私意は口が腐っても言ってはならぬ。大学教授に（さよなら講義）という慣いがあるにしても、儀式にそれは許されない。小学校の卒業式に出かけてみて、そんな例もあるにはあったが、真似をしたくない。甘えはしりぞけたい。

これは卒業式でのことではないが、ある先生が区外の酷しい学校から転任してきて、

（私はあと二年だけの勤めですが……）

と職員にあいさつした。なぜそういうバカなことを言うのかと咎めると、

（いや、あと二年だが、頑張るという決意表明の前提としてですよ、いけないかな）

と言う。唖然とした。ただでさえ二年で何が出来るか足もとを見られて何ができるのかと、他人事でもこれを歯痒いことに思った。自らの口から言わなくても、職員も父母も承知していることなのだ。本人が言わないからタブーが守られている状態なのだ。それを言う必要があるとすれば、終業式の朝、職員だけにあいさつすればよい。あと五日ある。二十五日のその日で良い。それでも本当はまだ早すぎるかも知れない。三月三十一日の年度末、午前零時を時鈴が知らせる瞬間が本当の（時間切れ）である。（恩讐の彼方へ）、すべての怨念が消え去る時だ。一個の教師としてH先生のように碑（いしぶみ）の裏側にまわるのはそれからで良い。と、言ってもことさらなにも未練

がましく頑張るつもりがあるのではない。流れに身を任かせ、そして流れる時の中に消え去ろうとする、それが公人の定めだ、覚悟というものだ。と腹に決めているのだ。

（先生が、それを仰有らないから、困ることもあるんですよ）と教頭のM先生が言ったことがあるが、とうとうこの日まで来てしまった。

（父母の皆さまには、わが子の証書をうける姿をご覧になって、われに似よ、われに似るなと子を思う。そういう心境であられたことと思います。万感の胸に至り、熱いものが走る思いであられたと思います。心からお祝いを申しあげます）

ここで、父母席をホロリとさせる。ハンカチーフをそっと眼にあてるようであれば成功である。それは計算ずみの科白なのだ。だがこのへんから壇上では白けがくる。あまりにも常套の言葉ではないか。これではどこまでが本当の言葉であるのか、わからなくなりそうである。それが心配である。しかし、そのきまり文句を口にしながら今日ばかりは眼頭が熱くなった。

と、その時であった。父母席で壇上に向って拍手の手を突然うち鳴らす者があった。

（あの解体屋の社長だ）

社長が遅れて式場に入ってきたのはもちろん知っていた。数少い父親の出席は目ざとく壇上から見きわめている。

ところで、その解体屋の社長氏はその子弟のためにこのところ、翻弄されっづけで、頑健なその体軀も解体しそうな目にあっている。男生徒の間のリンチ事件でその息子は空中蹴りで相手を倒した。相手の親が警察関係であったからたまらない。学校の指導もあって詫び入れに出向いた加害集団の母親たちがひたすら平身低頭するのを、この相手は竹刀をもって威丈高の痛罵を加え、録音テープまでとった。彼の母親は一たん帰宅してから家を出た。思いつめた失踪であった。幸、熱海の旅館で保護されるまでを夫である社長はどんな思いを経験したことか。運よく発見がはやく、多量に飲み下していた睡眠薬は吐き出したので助かった。

気がやさしくて、ちょっと短気なところがあるけれど、力もちで、まるで「スーパーマン」みたいな、やんちゃぼうずです。

友を見る、友に如かずであろう。卒業アルバムの人物戯評はそう書かれている。彼はその短気から、やんちゃから友を傷つけ、それが原因で母親を失いかけた事の重大さを驚いたに違いない。神もみそなわす試練であった。やんちゃ坊主はしたたかな啓示をうけたはずに思われる。目ざめをもったはずであった。彼のずんぐり、むっくりした姿は前列の方でなければならなかったが、壇上から

この瞬間には捉え得なかった。
リンチ事件に連座した子をもつ母親たちの中で、職員に向って（申し訳ありません）と泣きくずれて、詫びを言ったのは彼の母親一人だけであった。相手方の激しい怒りに会い、痛罵をうけて引上げてきた親達は、謝罪に行って（どちらが被害者かわからなくなった）とぼやきあい、
（ひどすぎますよ、あれでは子供たちも可哀そうですよ、いくらなんでもあの態度では）
と口々の報告であった。親子の同道した多数派のショックは大きすぎた。そして被害者意識すら訴えた。そうした中にあって、彼の母の贖罪意識は間違えば死に至るほど激しいものがあった。やんちゃ坊主だが、気のやさしいと言われる彼の心にひびかぬはずがない。
彼の父親が式場へ入ってきたとき、すべてが了解できた。事件の事後処理の経過の中で会っているのだが、この社長の態度は終始潔よいものであった。あの顚末の中で一組の親子が傷つきながら、それをのり超え、晴々として今日の式場に臨んでいる。何と心を洗われる光景ではないか。
（良かった）
と思う。いま、卒業生の席の中に彼を発見し得なかったが、証書を各個に渡すさきの次第では彼にも手渡しをしている。詰襟服のカラーが白く、彼の悪びれない顔を見ている。
（卒業式に拍手をするなんて、はじめての経験ですよ。教頭先生の言われる意味にはそれが場所柄を弁えないことという思いがあったかも知れない。式を終ったところで、そういう私語があった。あの父親の拍手が何に向ったものであるにせよ、しかし、これはまた思いがけない、何とも素晴しいフィナーレであった。
（五六・四・二三）

町までの道

柴田富佐子

バスが走り去った後の砂埃が鎮まるのを待って、せいは又歩き出した。両腕を後ろへ廻し、こころもち前へ曲った腰の上で指を組んでいる。一足前へ進む度に、組んだ指は軽く撥ねる。体中で調子をとって歩いている感じだ。着ぶくれた胸元は、腕を後ろに廻しているせいで衿がはだけ、薄汚れた肌襦袢や毛糸のシャツや、長襦袢の衿が重なって帯の上で袋を作っている。黒衿をかけた綿入れの半纏が、少し長過ぎるように見えるのは、夫の物を着ているせいかも知れない。
長目に着た着物の裾から見え隠れする足袋の肌色が、黒っぽい色づくめの中で、変にはでやかで視線を捉える。頬の肉がそげて一きわ高く見える鼻筋が、せいの顔をきつく見せるが、若い頃はかなりの器量よしで通ったろうと思わせる。
「おばさん、どこさいぐね」
低い生垣越しに、「力士屋」のかあちゃんが声をかけた。雑貨を商う店に「力士屋」の屋号は不似合いだが、何代か前の主が、素人相撲の大関を張ったとかで、いつからかこの通り名が屋号になってしまった。
「ちょっと、町までよ」
町役場、郵便局、銀行、スーパーなどが軒を連ねている一帯を町と呼んでいる。
「気の毒な事だったない。どんなにか淋しかっぺよ、おばさん」
同情の溢れた目で見つめられて、せいはそれまでのどことなく浮き浮きした表情をぐっと引緊めた。
「急に一人になっちまったよ」
「ほんとにな、おじさんは八十過ぎてんだから仕方ねえけんど、定ちゃんまで死ぬこたあねえべさ」
「親不孝な奴だ」
「全くだ。さんざおばさんに世話かけてな」

定夫が事故で死んだという知らせを受けた時、せいは要平の入院している病院にいた。放送で名を呼ばれ事務室へ行くと、三人いる事務員が、一様に凍りついたような目でせいを見た。

「おばさん、しっかりしなきゃ駄目だよ」

一番年若い娘が、堪りかねたようにせいの背中へ飛びついて来た。あとの二人もせいを取り囲むように近寄って来た。

「はい、染谷ですが」

受話器を取り上げたせいの手を、後ろから娘の手がしっかり押えた。

「ああ、おばさんけ、警察の佐藤だが」

顔見知りのおまわりの声であった。

「おばさん、びっくりしないで、よく聞くんだ」

オートバイで飛ばしていた定夫が、山王の道路わきの電柱に激突して即死した、現場へ案内するからすぐ警察まで来て欲しい ― 佐藤は何度も言葉を切り、言い淀みそう言った。

― あのバカが ―

せいの胸には、この言葉しか残らなかった。これだけを残して、総ての言葉が潮の引くように足元から体外へ流れ出ていった。せいの体も、その流れに引きこまれるように床に崩れた。

「おばさん、しっかりして、しっかりして」

三人はせいを抱えて診察室のベットへ運んだ。夕方近い診察室は壁の白さだけが目立っていた。

「可哀想になあ、おばさん」と繰り返しながら、涙ぐんだ娘が、せいの頬をさすってくれていた。馳けつけた医師は注射をしたあと、

「無理だったら、警察の方は後にして貰ったら、電話しといてやっから」と言ってくれたが、せいは定夫が可哀相だから無理しても行ってやらねば、と答えた。

「おじさんには、黙っててない」

事務員にそう念をおしてからせいは医師に車で警察まで送って貰い、佐藤の車に乗換えた。草履を脱いで後ろの座席に小さく坐りこんだせいは、両手できつく腹を押えつけていた。そうしないと空っぽになった体は、ぐしゃりと前へ折れてしまいそうな気がした。

「おばさん、大丈夫け」

佐藤は時折振り返って言葉をかけたが、せいはただ首を縦に振って答えていた。

町外れの雑木林を伐り開いて作ったゴルフ場の前で東京へ帰る客を取手まで送っていくマイクロバスに出会った位で、車の往来は少ない。

道の右手に拡がる田が、地平線と融け合うあたりの空は、水色から藍に変る前の一瞬の明るさを映して黄金色に輝いていた。

「きれいな空だない。明日もいい天気だっぺよ」

せいの気を引き立てるように、佐藤は土地の言葉で語りかけた。

現場は田の中に続く一本道の中途であった。ゆるい下り坂になっている。道の左側に立っているコンクリートの電柱に激突し、撥ね返され右側の田の中に投げ出されていた、と佐藤はその辺りを指さしてせいに教えた。乾いた田の表面は踏み荒され、一本の深い太い線がずっと伸びている先に、ハンドルも前輪もひしゃげ、泥まみれで投げ出されているオートバイがあった。

思いがけない外の風の冷たさに首をすくめ、せいは、佐藤の指さす通りに視線を移していた。膝が小刻みにふるえ、立っているのが辛かった。佐藤はせいの肩を抱いて車へ連れ戻しながら言った。

「なあ、おばさんよ。見たいだろうけど、見ない方がいい。見られる状態じゃないんだ。一生おばさんの目に焼きついて、おばさんが苦しむだけだから、見ないで仏にしてやった方がいい、な、そうしなさい」

定夫の遺体は解剖のため取手の警察に運ばれているという。現場近くに落ちていたという腕時計を、佐藤はポケットから出した。ビニール袋に入ったその腕時計は、ガラスも針も吹っ飛び、鎖はちぎれていたが、紛れもなく定夫のものである。金張りのその時計を得意気にせいに見せた時、定夫は時計の下に緑色の布を巻いていた。

「こうすると、時計の金色が引き立って、よけい豪華に見えっぺ」

陽焼けした手首に巻いた緑色の布に金ぴかの時計は、夏でもステテコの上に巻いた茶色い毛糸の腹巻と共に、運転手になってからの定夫が意気がっていた小道具の一つである。

佐藤は家まで送ってくれた。玄関には鍵もかかっていなかった。玄関から順に電気をつけて茶の間に入ったせいは、炬燵の上の湯呑茶碗と、畳に転がっている一升瓶の空瓶を見た。柱の暦の今日の日付には、矢張り赤鉛筆で丸がつけてある。山王という場所を聞いた時から、定夫は酒を飲んで競輪場へ行こうとしていたのではないか、という予感があった。暦の赤丸は競輪の開催日を示す印であり、山王のあの道は競輪場に真直ぐ続く道である。せいが病院へ出かけた留守に定夫は仕事をサボって家へ帰り、酒を呷ってオートバイを飛ばしたのだろう。競輪場の開場は正午だし、定夫が事故を起したのは、その五分前だった。時間にせかされ酔も手伝って定夫はぐんぐんメーターをあげた。

― あのバカが ―

誰れがいる訳でもないのに、あたりを見廻してからせいは空瓶と湯呑を台所へ片付けた。暦も破いた。ストーブをつけ炬燵に入った。湯を沸しに立上るのも億劫な位に体は疲れているのに、不思議と気持ちは落着いている。

長い間肩にきつく喰いこんでいた背負い紐が、プツン

と切れて背負っていた重荷が転がり落ちたような気がする。肩が軽い。
「ああ軽くなった、軽くなった」
右に左に肩をゆすると、軽くなった肩はゴキッゴキッと軽い音をたてた。

中学を出てゴルフ場に勤めた定夫は、東京から来る客の贅沢に憧憬れるようになった。
いつか覚えた煙草は洋モクでなきゃ、着るものはブランド品でなきゃなどと言ってみても、安い給料では手も足も出ない。てっとり早く金を稼ぐにはトラックの運転手がいいと知恵をつけられ、運転免許のとれる十八才になるのを待って免許をとり、食品会社の運転手になった。取る金は増えたが、今度は酒を覚え遊びを始めた。ここ数年は、その上に競輪にまでこって、せいに月々のものを渡さないばかりか、僅かな要平の稼ぎや年金にまで手を出す有様だった。
夜遅く卑猥な歌を歌いながら定夫が帰って来ると、それまで静かにテレビを見ていた要平は表情を硬ばらせ布団に入ってしまう。酒臭い息をまき散らしながら定夫はテレビの前にあぐらをかいて、せいに「水」と怒鳴る。女の裸が出て来るまでテレビのチャンネルをガチャつかせる。男の欲情を恥しげもなくさらけ出したような定夫の濁った目を見るのが嫌で、せいも自分の布団にもぐり込む。
「おじさんはいいよな。そんな年になってもちゃんと女が側にいる。おれなんか、まだ二十五だっていうのに、やりたくたってやる相手もいねえ。酒でも飲まなきゃ、寝られやしねえよ」
明らかに年上と見える女を、一緒になりたいと言って連れて来た事がある。女は背の低さをカバーするように、髪を高々とアップに結っていた。
「あたしはね、どうでもいいんだけど、この人が」
と女は流し目で横の定夫をさし、ぼったりした手で定夫の膝を摑んだ。定夫はだらしなく口をゆがめてその手の上に自分の手を重ねた。
「どうでも一緒になりたいって言うもんだから」
何が入っているのか、ふくれたハンドバックから煙草を取出して口にくわえると、すかさず定夫がライターの火をつけた。女が口をすぼめて吐き出した煙が、要平の顔先にまで届いた。要平は不快そうに手で煙を払った。
「なあ、おじさん、よかっぺな」
―このバカが―と大声を出したいのをせいは唇を嚙んでこらえていた。
「お前がどうでも一緒になりたいって家を出るなら仕方ねえが、ここでおれ達と一緒に暮すっていうのなら断る」
そう言うと要平は体をずらして横を向いてしまった。
「おらも同じだ」

せいは女を見て言った。
「そうでしょうねえ、だから言わないこっちゃない」
女は定夫の手を払いのけて立上った。その肩幅の広い、腰骨の張った短い後姿は定夫の母親に似ていたと、後になってせいは思い当った。
あのバカが、何をしでかすか、その恐れはいつもせいの意識から離れなかった。
「頼むから仕事中は酒を飲むなよ」
気安めだと知りながらも、毎朝せいは家を出る定夫の背にこう声をかけずにいられなかった。せい以上に気の小さい要平は、せい以上に定夫の行状を案じていたに違いない。度々の心臓発作もそれが原因かも知れない。とすると、病院を出る時、事務員に知らせるな、と頼んで来たが、知らせた方が却って要平の病気のためかもしれない。自分もこんな安らいだ気分でいられるのだから、要平も、もう他人に迷惑をかける心配はなくなったと知ったら、どんなにか安心して、ゆっくり眠る事もできるだろう。
翌日、佐藤が警察の車で定夫の遺体を運んで来た。古くから冠婚葬祭の時には互いに助け合う班という組織があって、万事は班長の指図で事が運ぶしきたりになっている。三段のつましい祭壇ながら、両側に金と赤の賑やかな花輪が飾られ、定夫の同級生だった道林寺の住職が経を読みだすと、葬式らしい湿った空気が家を包んだ。遺体は白い布でぐるぐる巻きした上を、透明なビニールで覆ってあった。最後の別れも出来ずに棺に納められた事が、一層近所の人々の同情を誘い、せいはやさしい言葉のかけられ通しだった。人々が労りたがっている時は、有難く労られていた方がいい。あのバカが、という言葉はぐっと飲みこんで、ただ頭を下げて礼を言っていると、定夫はずっと素直でやさしい子だったようにも思えて来た。
「これからは俺が働いて、おじさんにもおばさんにも楽させてやっからない」
ゴルフ場に勤め始めた頃の定夫は、給料も袋ごとせいに渡してくれた。その頃が一番平和で生活も楽であった。祭壇の写真は、せいが希望してその当時のものを飾ってもらった。
「少し若すぎるんでねえの」
班長は五年も前の写真をためらった。

通夜・葬式を済ませるまでの二日間、せいは病院へ行く暇がなかった。行きたくない気持ちもあった。要平に知らせたものかどうか、せいはまだ迷っている。子のない夫婦にとって、生後すぐから育てあげた定夫は子と同じ存在である。その死が要平にショックを与えない筈はない。と言って余り長く行かないのも要平に不安を与えるのではないか。迷いながらバスを降り、病院の廊下を

歩いた。すぐに病室の前へ着いてしまった。話すも話さないも、要平の容態次第にしようと、ようやく肚を決めてドアを開けたせいに、要平が声をかけた。
「一人で大変だったない」
せいが入って来るのを知っていたような間の良さだった。
「病気にさわると思って黙ってたんだけど」
頷きながら要平は枕の下から折畳んだ新聞を引き抜き、せいの前に拡げた。
そこには、
— オートバイ電柱に激突　死ぬ —
と強い活字が並んでいた。定夫の顔写真まで載っている。活字の強さが、せいの涙を引出していた。
「もう全部済んだのけ」
せいの方に向けた要平の目尻からも涙が流れていた。
「あのバカが」
せいの吐き捨てた言葉を掬いあげて、押し返すように要平は透き通って見えるほどに白い手を伸してせいの口を押えた。
「悪かったない。おれが役立たずで」
懐からガーゼのハンカチを出してせいは要平の涙を拭いた。
「誰れにも迷惑をかけずに済んでよかったじゃないか。それが何より心配だった。自分でぶつけて自分で死ぬなんて、あいつにしちゃ出来過ぎた死に方だ。なあ」
要平の目尻から涙が溢れ落ちた。

梅の多い土地である。どこの家の庭にも一本や二本の梅の木がある。紅梅は少なく白梅が多い。道路沿いの家々のブロック塀や生垣の上からも、ついつい伸びた細い枝に、豊かに膨らんだ蕾がこぼれ落ちそうに並んでいる。
正面に道林寺の赤い山門が見えて来た。住職が定夫のために、格安で墓地を分けてくれると約束してくれた。定夫の退職金と、せいが掛けていた簡易保険の保険金で、二つの葬式を出しても墓地や墓石を買う位の金は残っている。要平は、白っぽい石よりも、黒味がかった石の方が墓石らしくていいと言った事がある。墓地が決ったら石屋へ黒っぽい石を頼みに行こうとせいは思った。
通夜の席で、住職はせいを部屋の片隅に呼んだ。
「定夫の父ちゃんと母ちゃんは生きているのけ」
せいは今頃なんでそんな事をと、咎めるような目を向けた。
「もし亡くなっているのなら、この際定夫と一緒に葬ってあげたらどうかと思って」
「父親は、あれを預けて東京さ帰ってすぐ病気で死んだそうだが、母親は、あれが三つか四つの時、東京さ行って、それっきり戻って来なかったんだ。ずっと前だけど、再婚したって話を聞いたから、生きてんだっぺよ」

遺骨はなくても、父親を一緒に葬ってやった方がいいと、もう一度住職が言った。
広い境内の奥の方を仕切って始めた幼稚園が結構はやって、ここを通るとピアノの音や園児の歌声がきこえる。境内で、お揃いのスモックを着た園児が、遊戯や体操をしてる事もある。古い眠ったようだった寺が、子供の歓声で目を覚ました。幼稚園からの収益で寺を囲む竹林は手入れされ、山門は塗り替えられ、参道は修理された。それらが定夫と同い年の住職の手で実行された事を思うと、せいは又、「あのバカが」、という言葉を口にしてしまった。
道林寺に突当って右に曲れば町までは一本道である。警察の前を過ぎ、この町で唯一の信号機のついた交叉点を越えれば、すぐ左手に銀行がある。
昼下りの銀行には、客は一人もいなかった。窓口で記帳していた行員が、せいを認めるとカウンターを廻って出て来た。
「この度は有難とうございました。出来ていますからすぐお持ちします。どうぞこちらへ」
行員は丁寧にせいを奥へ導いて椅子をすすめた。女の行員がお茶をいれて来た。
「おじさんまで亡くなって、淋しくなりましたね」
並んで腰を下した行員は、手で茶をすすめながら言った。
「定夫さんは、染谷さんと苗字が違うようですが、どういう御関係ですか」
「おれの腹違いの弟の子だよ」
「ああそれで、息子さんにしちゃ年も違いすぎると思ってました」

十六の年にせいが家を飛出して以来、三十年余り音信の絶えていた知定が、何の前触れもなく訪ねてきたのは、敗戦の翌々年だった。
汚れた兵隊服の男と赤ん坊を背負った女が庭の方から入って来た時、せいは物乞いの夫婦が入って来たのかと思った。布の手提袋を摑んだ男が
「あの—」とためらいがちに縁側で繕い物をしているせいに近付いて来た。
「染谷さんですね」
戦闘帽を脱いでせいを見つめた目が、せいから一気に三十年の空白を奪った。左目が内に寄っていてじっと見つめられると、何となく物悲しくなるような目は、せいの瞼の裏に残っている知定のものに違いなかった。
「矢張り姉さんか」
男は縁側にせいと並んで腰かけ、長い空白を少しでも早く埋めようとするかのように、せいの体に自分の体を押しつけて来た。
「姉さんの鼻と口は、親爺にそっくりだ」

「お前こそ、その後ろへ出っぱった頭なんか、いいとこ似ないもんだよ」
そう言いながらも、せいは知定の一途な親愛の情がただ嬉しかった。知定が生まれた事で家を出なければならなかった昔の傷は、もう跡形もなかった。
「親爺がね。何たってお前のたった一人の姉さんなんだから、何かあったら頼っていけと口癖のように言ってたから、ここの住所は暗記しちゃっていたよ」
「で、父さんやお前の母さんは」
「俺が兵隊からやっとの思いで帰ってみると、家は例の三月十日の空襲で焼けちゃってさ。随分近所の人達に聞いて廻ったけど、生きてる姿を見たって人はだれもいないんだ。よっぽどひどかったらしいから、年寄り夫婦じゃ逃げきれなかったんだろうよ。もう諦めてるよ」
せいは立上って仏壇に線香をあげた。
「姉さんには余りいい親じゃなかったんだろうに」
「もう昔の事だ。忘れた」
兵隊仲間と闇屋をしている間に春子と知合い、焼け残った春子の家に転がりこんだ。しかし、元々が狭い上に焼け出された春子の兄弟の家族も同居している家が住みよい筈はなかった。定夫が生まれれば尚の事である。どうにもならなくて頼って来たと知定は言った。
「何とか仕事と住む場所の目鼻がつくまで二人を預ってくれないか。出来るだけ早く迎えに来るから」
知定はせいの前に両手をついた。
知定の後ろに赤ん坊を背負って突立っている春子は、ひどく愛想のない女だった。そばかすの目立つ平べったい顔に、丸い目と下唇の厚い口が無神経にくっついている。せいが、
「まあ上ったらよかっぺ」
と声をかけると、「今日は」でもなく上って来て縁側にべたりと坐りこんだ。
「下してもいいかなあ。重たくって、重たくって」
と言う間に袢天を脱ぎ背負い紐を解き始めた。慌ててせいは手元の坐布団を二枚並べた。
手を拡げて待つせいに背を向けて、春子は紐をゆるめた。せいの腕の中に、生温い重みが預けられた。小さな寝息と共に湧上ってくる乳臭い温さをせいはむさぼるように吸いこんだ。胸に満ちたその温さに、体がとろけていくよう恍惚感があった。
「姉さん、どうしたの」
知定に声をかけられるまでせいは体を動かす事が出来なかった。
「あんまり重いんで、腕が痛くなった」
「そりゃそうだよ。そんなにきつく抱いてりゃ腕も痛くなるさ」
知定は慣れた手付きでせいから定夫を受取り坐布団に寝かせた。

「姉さんは赤ん坊を抱いた事がないみたいだね」
「そんな事もないけど」
重みも温かさも、よその子を抱いた時とはまるで違う。その違いが血の繋りというものなのかとせいは思った。
母乳が出すぎるのか、春子の上衣の胸元には丸い汚点がいくつもついている。いかにも丈夫そうだが無器用そうな春子を、せいは好きになれそうになかったが、定夫のために我慢して一緒に暮そうと心を決めた。寝ている定夫と並んで知定も畳の上に転って何度も何度も手足を大きく伸していた。
「矢張りいいなあ畳の上は。何年ぶりだろう」
せいにそう言い、春子にも同じ事を言ったが、春子は、
「自分ばっかしいい想いをして」
やさしい顔もせずに言った。
腹ぺこだという二人のために、せいは早い夕飯の支度にとりかかった。米をとぎかまどにかけて火をつけた。薪に火が燃え移った所でせいは春子を呼んだ。春子はもったりとかまどの前にしゃがみこみ火を覗いた。モンペの膝が薄切れて肌の色が透けて見えた。
「薪はない、なるべく立てるようにすりゃよく燃えるんだ。おれは裏さ行って何か野菜を見てくっから」
裏の庭に少しばかりの野菜を作っている。キュウリだのインゲンだのをざるに入れて戻ってくると、春子の涙まじりのかきくどく声が聞えた。せいは戸の陰に身を寄せた。
「あんたにとっては実の姉さんの家なんだから、のうのうとしてもいられようけど、あたしは知らない人ばっかりのこんな田舎に、定夫と二人で残されて、どうしていいかわからないじゃないの」
せいが春子にいい印象を持たなかったように、春子もせいに気安い感情は持たなかったらしい。
「あんとき、危いから駄目だって、あんなに言ったのに、あんたが言う事きかないから、できちゃったんじゃないの。定夫さえいなけりゃ、二人で働いて東京で何とかやっていけるのに、みんなあんたが悪いんだから……」
定夫さえいなけりゃ、と言った言葉がせいの足を動かした。
「夫婦の間で、今更何を言ってんだい。そんなつまんない事言ってるから、ほら、薪がいぶって、ちっとも燃えやしないじゃないか」
不意に現れたせいに驚いて顔をあげた春子の頬には、薪をいじった手でこすったのだろう、黒い条が何本も流れていた。
「はい、じゃこれ。お預りした三百万円のうちこちらが二百五十万円の二年定期です。二年たったら利息をつけてお返しします。こちらは五十万の普通預金です。この通帳とハンコを持って来て下されば、必要な時はいつで

もおろせますから」
行員は金で縁どりした証書を見せ、金色の地に鶴が飛んでいる図柄の袋に納めた。受取った証書と通帳とハンコを小さな風呂敷に包み、せいは懐の奥深く押込んだ。帯の位置まで押込んで、帯の上から念を押すようにポンと叩いた。行員がくれた景品入りの紙袋を後手に持って銀行を出た。
まるで懐炉をいくつも入れたように、せいの懐は温かかった。快い温かさが、体の隅々にまで伝っていく。温泉に入った時のようだと思った。3という数字を先頭に、六つの0が、ピアノの音に合せてせいの頭の中を行進していく。それは、さっき道林寺の幼稚園でかいま見た園児の行進のようであった。お揃いの空色のスモックを着て、小さな手を振り小さな足をあげて、精一杯歩いている数字の行進である。生まれてから一度も、こんな大金を手にした事はない。余り金額が大き過ぎて、欲しいとも思わなかった大金である。
好きな物を腹一杯食べた後のような満足感があった。定夫を初めて膝に抱きとった時のあのどっしりした重さと甘い温さがせいの体に甦っていた。
昨日、定夫が勤めていた食品会社の社長が訪ねて来た。
「早く来よう来ようと思ってたんだけど、あっちの手続きだ、こっちの手続きだ、って走り廻っていたら、こんなに遅くなっちゃって、済まなかったね。一日も早くおばさんを安心させてやりたいと思って、これでも一生懸命やったんだよ」
社長は要平と定夫に線香をあげてから、改ってせいの前に坐った。
「これね」
と上衣の内ポケットから封筒を取出してせいの前へ差出した。
「定夫の傷害保険と生命保険の受取証です」
定夫は会社で団体の生命保険に二百万円と傷害保険に百万円入っていたという。掛金は給料から差引きで、証書もハンコも会社が預っていた。
「無理にも入れといてよかったよ。いろいろ手続きが面倒だから、おばさんには無理だと思って、私が全部やってあげたから、明日銀行へこのハンコを持って行きなさい。毎月二、三万も下せば、年金とでおばさん一人位なら暮せるだろう。これからは、この金だけが頼りなんだから、大事に使わなきゃね」
後手に持った紙袋は、一足毎にせいの体から離れ、膝の裏にぶつかる。
警察の前まで来た時、後から来た自転車がブレーキの音と共にせいの傍に止った。
「おばさんは年の割に足が早いんだね。さっきから、おばさん、おばさんて呼んでたの聞えなかったの」
佐藤は自転車から降りてせいと向い合った。
「思ったより元気そうなんで、安心したよ。まあおばさんも親不幸な息子をもって気の毒だったが、仏になったんだから、許してやるんだね」
「はい」
「じゃ、俺は仕事があるから、これで」
せいの肩を軽く叩いて佐藤は離れていった。親不孝な息子、と佐藤は言った。せい自身も人に話す時はそう言った。銀行へ行くまではそう思っていた。だが今は違う。金の心配なしに生活していけるというこの安堵感は、父親も、五十年以上連れ添った要平さえもせいに与えてはくれなかった。これからは、だれに気兼ねもせず、悠々と生きていける。生まれて初めて味合うこの解放感を与えてくれた定夫は、決して親不孝な息子じゃない。親孝行だ。日本一の親孝行な息子だったんだ。
水海道行のバスがせいを追抜いた。乾ききった道の砂埃が、かすみ網のようにせいを取囲んだが、せいは顔をそむけただけで足を止めようとはしなかった。

ハイラル挽歌（二）

序章　前夜

金子正義

（一）
市街へ向う斜面の唐松の疎林に野鳥が明るく囀っていた。伸び始めた夏草を心地よく踏んでいくと獣の遠吠えの様な声が流れて来た。立ち停って暫く耳を欹てたが、草原の野獣が春情を抬動させて叫ぶ地表に伝わる唸りでもなく、空に響く鳥の歓びの啼鳴でもない。更に野草を静かに踏みしめて行くと、それは人間の声であった。然かも美しい男女の混声合唱ではないか。歌は聞き染んだ軍歌ではなく、遠く忘れて仕舞った青春のメロデーであった。コーラスは松の疎林を抜けた草原にあった。宮坂少尉は歌声の断たれるのを惜んで凝っと耳を傾けて立っていた。歌は花競べであった。そして湖畔の宿となり、

アベマリアに変り、トセルリの嘆きのセレナードとなって行った。然かも甘く優しく気品すら感ぜられる若い女性の声と、それを扶ける正確なリズムのバリトンであった。彼はこんなにも女の声が美しく魂を揺すぶる程の響を持つものとは思ってもいなかった。愛と女性とに断絶した日々であったからであろうか。彼は暫く立ち竦んでいたが、声の主達に気付かれぬように迂回して、松林の蔭からそっと見ると、草叢には軍服のまま仰向いて、歌集を持った兵隊と、左右から歌集を覗く二人の若い女の白い顔が草蔭を透して見える。草叢に寝そべる放恣な男女の姿など絶えて久しく見たことの無い彼にはそれは若さと希望に満ちた光景に映じた。どうやら兵隊は司令部勤務の下士官らしく、女達は軍用達会社の事務員らしかった。

明日にもソ連軍が進攻して来る戦局の緊迫も知らぬ顔で長閑に歌っている者達の呆れた暢気さに腹立ちを覚えたが、辺り一面に咲き競っている鈴蘭の白い花が、彼等の青春の血を騒がせたのであろうと、羨望と嫉妬の念の情を仰え、今此処に咲く短い命のように、僅か一刻青春の夢を歌に燃焼させる男女を哀れにすら思えてきた。

「此処に咲く花と共に一心に歌えよ」と呟き彼等に気付かれぬようそっと立ち去って丘陵を西に下って街に入った。

停車場に続く表通りから裏道に入ったバー、銀鈴に寄るのがハイラルに来てから唯一の宮坂少尉の慰めであった。夜は酒場となって民間人や軍関係の男女が賑い、酒気と煙草の煙が濛々と立罩めるが、開店する五時から一、二時間程は客も少なく、何時も客待ち気の女給達がレコードを掛けていた。音盤は歌謡曲や民謡や、古い童謡まであった。いずれも摩り切れた音を出していた。その中に珍らしく何組かの洋楽があった。チゴイネルワイゼンとか、バッハのブランデンブルグ交響曲とか、未完成まであった。意外に揃っているのは、前に駐屯していた二十三師団の将校達の私物で、師団が南方に転出する時に譲り受けたと聞いた。

宮坂少尉が銀鈴に行くのはそのレコードを聴く為だと自分でも思っているが、其処に居るマダムを見るのも秘かな愉悦であった。別段意味の有る言葉を交した訳でも無く、マダムにとっても、彼は何の関心もない下級将校に過ぎない筈であった。

マダムは髪を短かく宝塚の男役のように刈りあげ、襟をきゅと結んだ中国服を着ているので、その襟足が長く美しかった。宮坂少尉がドアを押して入ると、無表情に近い冷やかな瞳をきっと向ける。暫くして「何になさる」と飲物ともレコードの注文を訊くともとれる短い言葉を掛け、微かに目元が潤む。

彼はマダムがカウンターから客席を往き来する姿を見守って、ビバルディ四季第二楽章、ラルゴ嬰ハ短調のバ

イオリンソネットの調べを思い浮かべ想念をかき立てるのが楽しみであった。

どの様な人生を歩んで国境の町に流れ着いたか判らないが、彼女が黙って蓄音機に手を掛け、緩っくりとハンドルを廻わす姿態は、優雅で貴婦人の哀愁があった。摩り切れたレコードの旋律が流れると彼は目を閉じて風にそよぐ白樺の枝葉や、ホロンベイルの野に遊ぶ放牧の羊群を思い浮かべ、過ぎし日の学生時代の楽しさを想い、いつの日かの平和への夢を描くのであった。

時には目を閉じて追想に耽って何気なく薄目を開くと、マダムもカウンターに凭れてレコードに聴き入っている。そして目が彼と瞬間に合うと微かに目を潤ませて微笑む。彼にはその瞬間が幸福であった。一瞬の幸せとは斯うしたものかと思うのであった。

(三)

既に五月師団主力はハイラルより後方の開嶺に転出し、大興安嶺の陣地構築に大童であった。宮坂少尉は連隊の残務整理や、残された武器弾薬、医療、食糧等をハイラル防衛の主力となる独立混成八〇旅団への引継も終ってホッとした数日であった。だが日増にソ連軍の進攻情報が切迫したものとなっていた。彼は努めてその圧迫感から逃がれ、嵐の前の静けさの中に身を置き、少しでも精神の自由を享楽したかった。然し彼の享ける自由は僅かに短い北満の夏を此の世の見納めに飽く無く見ておくことであった。毎日宿舎と司令部の間を往還する時や、ハイラルを囲む防衛陣地に連絡に行く途中、彼は瞳に焼け付けるように四囲の風景を見続けていた。

北満の夏は涼やかである。白樺の葉蔭から覗く空は限り無く高く、燦々と紫紺の玉が降りかかるようであった。山霧の流れに乗ってカッコーが鳴く。柔かに判っきりとしたその啼声はメルヘンの世界に彼を誘い込むようであった。森の奥では山鳩がメランコリックに鳴いて平和で幻想的なイメジーを誘った。なだらかな丘陵は赤、黄、紫、凡ゆる地上の花を寄せ集めた絨氈の山のように華麗であった。連なり重なり合って起伏する興安嶺の斜面には鈴蘭が密生し、沢近く下りると野苺が赤く実を豊かにつけていた。この自然の美事にして悠々たる営みに一体人間は何にをしようとしているのであろうか、彼にはこれを破壊しようとする戦争を疑わざるを得なかった。然し彼は軍人であった。祖国を守らなければならなかった。彼は憂を抱いて美しい山野の展望より帰って来る日々であった。

そうした或る夕刻、それは土曜日であった。珍らしく残留部隊の酒保が開かれていたので立ち寄って見た。

酒保は兵隊達が解放された気分で自由に出入して日用品や饅頭などを買ったり、時計の修理を頼んだりした往時の賑わいは無くひっそりとしていた。師団残留各隊や、

司令部付近のハイラル防衛陣地の各隊から、使役の当番兵が中隊の希望を纏めて取りに来るのみであった。

酒保では司令部の経理係より下士官と当番兵が来て、入口に卓子を並らべ、当日の販売品だけを積んで置き、使役当番が来ると伝票と引替に渡していた。仕事が単純なので下士官は殆んど仕事をせず、当番兵一人で始末していた。

既に真赤な太陽がホロンバイルの果てに落ちようとして、平原一帯は黄金色に輝き、北西のカンパ山より安堡山の丘陵な薄墨に翳っていた。昏い酒保室から入口に持ち出された販売台に居る当番兵が、使役兵が来るとテキパキと伝票を見て品物を渡し代金を受け取っていた。直ぐ横の下士官は、宮坂少尉が近寄るのを気着かずに、脇見もせず机に向って何にやら書いている。覗くと達者な字が見える、乱雑に重ねた原稿用紙の喰み出した中に、「お母さん」と表題が見えた。どうやら書き振りから創作のようである。軍隊では日記はおろか手紙でも自由に書けない。況んや陣中で創作など思いもよらなかった。ソ連の大機動部隊集結中の情報が日ごとに繁しい司令部の慌しさを少しも意に介せず、原稿用紙にペンを走らせている下士官の姿に一種の精神の高貴さを覚えた。肩章を見ると金筋に二ッ星である。

「おい軍曹、随分長い手紙じゃないか」

と宮坂少尉は声をかけた。軍曹は一瞬驚いた風であったが、宮坂少尉が態と手紙と言った好意を理解して便乗するように、

「はい、遺書であります」

とニヤと笑ってざわざわと数十枚の原稿用紙を掻き寄せた。

彼にも戦争の緊迫は押し寄せているのだ。ハイラル防衛陣地での最后を覚悟して、本気に遺書のつもりで書いているのかも知れないと宮坂少尉は思って、

「早く纏めて送っておけよ。軍曹の名は何んと言うのか」

と訊いた。

「はい、師団経理部事務室勤務、益子兼吉軍曹であります」

と答えた。その声に宮坂少尉は草原のコーラスを思い出し、同じ下士官に相違ないと思った。司令部勤務の下士官は殆んど乙幹か、大学出の幹候落ちか、召集インテリであった。戦争が無ければ世に出る才能の有る者も多かった。宮坂少尉は益子軍曹の軈ての死を思った。創作は遺書であると信じた。夕陽は既に草原の果に沈んで急速に暗くなって行った。

編集後記

※風薫る好季、小誌もさわやかに第二号をおくる運びに至った。

※創刊号を三月に出してから、季刊を確保するペースで、同人の意欲もそれにふさわしい盛上りが見られ、まずは上昇気流に乗るあんばいである。めでたいことである。あらためて、仲間があり、同行の意識をもち、声をかけあい、たとえこうした片々たる雑誌でもこれを営み維持する意義を痛感させられる。

※前号は掌編の特集号としたが、この号からはその枠をはずし、枚数を問わないことにした。お互にこれからはのびのびと書くことにしたいと思っている。

この号の収録枚数はほぼ一〇〇枚であるが、意欲の作品であれば枚数にかかわらず、全誌面を割くことも惜しまない方針である。

※たまたま朝日新聞に連載されている「新人国記」を読んでいたら、その静岡県の巻に藤枝市在住の作家小川国夫氏のことが書かれており、氏の言葉として次のようなものに出会った。「文士とは少年時代の趣味を捨てずに一生かかって展開し、表現していくものだと思うんです」というのだ。はなはだ我意を得て妙である。われわれの貫こうとするものは一つでなければならないと思う。

（禎）

「まんじ」第二号

昭和五十六年六月一日発行　（非売）

編集　大和禎人

印刷　㈲加藤清耕社（261・5743）
千代田区神田神保町三ー一一

発行　「作家群」
（まんじ）編集部

〒一〇一東京・千代田区神田駿河台二ー九
☎〇三（二九三）〇〇九四　柴田方

目次

呪縛の語り部……大和禎人……1
ソクラクレス……三戸岡道夫……8
めぐむは走る……山口健二……21
可愛い登美……岸田幸雄……26
メガルさんの夏休み……柴田保……33
遅すぎた春……柴田富佐子……38
―連載―
ハイラル挽歌（三）……金子正義……54

表紙・カット　岸田幸雄

呪縛の語り部

大和禎人

（三年ぶりブラジル里帰りの牧場主、小野田寛郎（ひろお））というサブタイトルがあり、その人のまことに明るい笑顔の写真が添えてある。朝日新聞の「ひと」というコラム欄だ。まぎれもなくあの小野田さんである。だが、もうここにはかっての暗く、異様に光る猜疑の眼ざしと、かげりは微塵もないことが良い。

小野田寛郎少尉がルバング島に発見されたのはもう七年も前の昭和四十九年三月十日だ。三十年戦争に終止符をうちジャングルを出た少尉がその日、折れ曲った戦闘帽の目庇（まびさし）に手をかざし、挙手をした姿は痛々しくたしかに劇的な一コマであったが、当の主人公のあの時の眼はあくまで人を信じない明かに猜疑に満ちたものであった。その二年前、四十七年一月グァム島に発見された横井庄一さんの生還とはどこか一味違うものがあった。罪のない兵隊の横井さんと、将校でしかも中野学校出身という呪縛の中に生きた小野田さんとの違いであったようにそれは思われる。

「コモ・バイ（やあ、お元気？）」流ちょうなポルトガル語とともに、さっと右手をさし出した。日焼けした顔、ブラジルの大地を耕しているたくましい手だ。「このところ、父母が相次いで亡くなり、その墓参と、中野学校の同期生の叙勲祝いに出席するため」帰国した。

小野田さんがあっさり「狭い日本」をすてて、渡伯した経緯と心境は詳しくは知らない。ただ、呪縛を逃れようとする小野田さん、孤独潜行といった宿命に生きる芯の強さ、信念に生きつづける人の雄々しさといったものを漠然と感じ、舌をまいた覚えになっている。

サンパウロから西へ千六百キロで再びジャングルと戦い、緑の牧場に変えることに専念してきた。いま牧場の広さ約千百二十ヘクタール。愛馬にまたがり、地平線を背に九百五十頭の牛を追う。友が訪れ

れば、愛用のライフルを手に森でシカやイノシシを仕留め、それを肴に夜を徹して語り明かす。ゆう然たる第二の人生。

ただし、ここでこのジャーナリストの記事をう呑みにするわけにはいかない。小野田さんのこれまで歩んだ七年は決して平坦であり、平穏であったとは思えないし、現に彼の今回の帰国も中野学校と無関係ではないことを思いやると、どうして私たちの人生は複雑なものであり、またある意味ではすこぶる単純でもあり、はなはだ図式的であると言えなくもない。如意棒にまたがり金斗雲に乗った孫呉空のように、ついにはお釈迦さまの掌の世界を一歩も脱け出し得なかったという話に似てくる。ともあれ、そんな寓話的世界を人間は一歩も抜け出し得ない宿命を負うているような気も一方ではするのだ。

ところで、小野田さんが奥さんを迎えた経緯まではゴシップとして知ってはいても、はたしてその家庭は幸せだったのだろうかというところが気にもなるのだが、記事はそのへんについてもふれて伝えている部分があり、微笑を誘われる。さらに写しておこう。

……最近は日系人会長の公務も多忙とか。「入植地に電気をひくための事業に取り組み、昨年八月やっと実現してみんな大喜びでした。これを促進するため、マットグロッソ州知事ら政治家を招き、牛五頭ほどつぶしてシェラスコ（焼き肉）パーティをやりました。アミザーデ（友情）は法律に優先する、と勧められましてね」

今年のカーニバルはさる三日終ったが、日系人会でもダンスパーティーを主催。それを無事終えて町枝夫人とともにサンパウロー東京直行便に二十七時間乗ってやってきた。「時差ぼけ、ブラジルぼけを直すため」、夫人の実家（茨城県稲敷郡）でしばし休息。

とあり、まずまずと人事ならず安心を与えてくれる。小野田さんの笑顔は正真正銘の本物であった。胸をなでおろす思いがしたことである。

さて、ここで私は複雑な思いをこめて昭和十三年三月二十日、日曜日のあるスナップ写真を思い出す。荒川の土手の上に、軍隊喇叭を吹鳴する一人の青年の姿だ。

S・F君。このイニシアルはもちろん匿名であることをまずお断りして、この小説の先を書きすすめたい。後々、中野学校出身者となる同君に迷惑のかかることのないように。

S・F君はこの年（丁年）であった。丁年というのは今日では耳なれぬ言葉になってしまっているが、満二十歳を指すものだ。やがて壮丁として兵役の義務を果さなければならないのであった。軍隊喇叭の吹鳴を巧みにする技能は少年団員であったころ培われ、今は青年団員と

して、喇叭手の彼は花形たり得る素養の持主になっている。

左手を腰に軽くちて、姿勢正しく頬をふくらませる同君、青春の豊かな頬も凛々しく、眉を上げ一点を見つめる、それは正しく軍国青年の晴れ姿だ。ボーイスカウトの帽子が少しく彼を子供っぽく見せているところに、哀れがあり、彼の装いの中に将来を暗示する何かの雰囲気がある。予備軍的な青年団服のせいであったろうか。

両奥の親知らずの義歯の中に、彼を呪縛するカプセルが秘められていた。中野学校時代、そのための抜歯をしているのだ。そして、死生の境にあっても、つねに生きる使命を与えられていた。カプセルの中の青酸性毒物は生きるための用意であった。いざという時もなおそれをあおいで死ねよとは教えられなかった。

喇叭を吹鳴する前記のS・F君をスナップしたのはもちろんこの私であったが、同年の暮、聖夜の日入営する彼を上野駅に見送ってから、四十余年も私は彼と会うことがなかった。しかも、彼の生死の消息すら知り得ないで過してきた。彼が釈放され煉獄との縁が切れたのは何と昭和二十八年というのだから、正に十五年、彼は呪縛の運命を戦いぬき、戦後のシベリア抑留と、覚えなく不当なアメリカ軍の拘置を含める歳月を生きた。純真なこの青年をかりたて、十五年もの尊い青春をささげ、しかも潔よしと信じさせたものは何であったろうか……。

（今の天皇の退位がない限り私の戦争は終らない、そういう気持が今の私の詐らざる気持だ。生き残りの戦友たちと私は例祭に必ず靖国神社を参拝する。社殿の階を勝手に上って頭を下げる。だれにも私たちは遠慮することはない。神主の制止に会っても蹴散らすだけだ。空しく戦場に無念を嚙んで死んで行った戦友の御霊に詣でるのに何の遠慮もいらないはずである。総理大臣とその閣僚が打ち揃っての参拝に、何を憚ってか、

（一私人として云々）

などと、言訳たらたら昇殿するのとはわけが違う。堂々フリーパスで良い。奥殿深くに入る特権をもつものこそこの私たちだ）

四十余年後の再会を、いま私たちはある喫茶店に持ちこんでいる。モーニングサービスの時間だが、彼の憤りは火を噴くありさまで、声高になりがちだから、客の多くない店内でも周囲が気になった。会談はこれが二度目である。材料を提供するから戦記ものを書かないかという話は彼の方から言い出されていた。再会をもとめて突然電話をかけてきたのが一ケ月ほど前だ。月に一度会社の用件があって上京するらしい。彼は浜松に本拠をおく今は会社の経営者なのである。

（心配がいるものか、なに会えば分るはずさ、もっとも、ボクも今はすっかり禿げあがってはいるがね、昔の

仲間だ、分るって…)

四十余年を経て、お互がわかるだろうかという懸念を彼は笑った。経理課にいたS・Fと名乗られて、私もすぐ喇叭を吹鳴する彼の風貌を思い出すことができた。机を並べていた仲間だ。

(やあ、)

(よおー)

昭和五十六年の現代に生きて、二人は繁華な街角にお ち合った。地下鉄の階段口を背に彼はきわめてダンディな装いで立っていた。ベアリングの流通商社の経営は順調らしい。東京には支社をおいているという。中野学校の教育をうけたという彼の眼は鷲のように鋭く光る。

(天皇の退位のない限り私の戦争は終らない)という言葉がこの忠勇無双の勇士の口から吐き出されたことに私は驚く。この憤りを私はどう表現したら良いものか、材料を提供しようという彼の言葉はあっても、きわめて難しいことに思える。一期から三期ぐらいまでの中野学校出身はすべて予備士官であり、彼に職業軍人ならざるものという主張がある。しかし、同時に予備士官学校の最右翼の卒業生という誇り高いエリートの自覚も同居する。教育係草鹿少佐の名が出てくる、私服通学の一年間は現地永住の使命と、民族独立を啓蒙せよという大義を教え込まれ、北支五省に潜行する。点と点を結ぶ進攻作戦の線引に励む諜報活動は昭和十九年まで四年にわたる。一日も休むことがなかった。身の危険にさらされたことも一再ではない。いきなり馬糞を口に入れる痴呆の演技で虎口を脱出した覚えもある……。

スリルに満ちた体験談は尽きることがない。潜行する穏密行動の中で敵国要人に置毒、暗殺したケースもあったりした。その遅効性毒物について、彼はこう説明する。

(この薬物はその場では死なない、数日後に頓死する……。だから、言わば完全犯罪に近い。相手の隙を見て飲物にそれを入れる、そういう薬まで現実にあった。これはあまり大きな声では言えませんがね……)

天皇の退位を論じて声を憚らなかった同君がなぜか、ここでは声を落す。悪戯っ子のような眼をする矛盾に私は気づく……。

(F大人)として彼の首についには懸賞金がかけられる。昭和二十年四月、彼は大尉昇進の内命と同時に満州の関東軍へ転勤を命令される。司令部の参謀長は彼の労を犒らいつつ日本は負けるだろうと予言し、第一号の戦犯として君が絞首刑となる運命を見るに忍びない、逃げてくれと言われた。彼を待っていた新しい任務は内蒙古挺身斬込隊の編成であった。満州各部隊から入墨者の下士官、兵五〇〇名を集めて陣地構築をする。七月のソ連参戦で重戦軍を邀撃してこの陣地は不落鉄桶の守りとして効果をあげる。タコツボを横穴で結ぶトンネル作戦で、これは中共軍との戦いの中で彼の会得し戦果をあげた作

戦の応用であった。敵戦車がこれで膠着する。夜陰、蒙古馬を駆って襲撃を加える。このゲリラ戦の中で、彼は敵兵を斬りまくった。彼の殪したソ聯兵の中には女性兵士がいた。後の十五年刑のこれが要因となるのだが、服装は同じだから、彼は知る由もない。この戦闘の中で弾薬、食糧のすべてが尽きる。八月二十七日に至って、蒙古に入る前にさずけられていた作戦命令に従い奉天まで引上げ、ここで降伏の説得に応じ、兵士と訣別する。彼のみが単身ハバロフスクへ飛行機で拉置され、人民裁判にかけられ、前記の十五年刑を確定し、チタの刑務所に収監された。彼が血涙をもって別れた兵士達はシベリヤに送られ、労役に服し、一人の落伍者もなく、昭和二十三、四年にかけて帰国したという。

忠勇無双の彼の武功の梗概は右のようである。近ごろの(なんとなくクリスタル)というような趣とは違う。青春を燃焼した価値感が違い、背景が違う。まことに止む得ない相違なのだ。いずれを是とするも、否とするも、自由であろう。またいずれの場合にか腹を立てる人があるとすればその人はきっと笑いものになるのだろう。

ともあれ、ここには戦記ものの素材として、ポピュラーなすべてのものがあるという印象を免れない。そして、それからのチタの収容所生活となると、山崎豊子氏の「不毛地帯」の内容にも似てくる。しかもそれは無名作家の今井源治氏の「シベリアの歌」の盗用作というトラブルの付録つきで、これまた食傷気味であることはS・F君には言えないが、私の気持の中にある。生命をかけた凄絶な青春十五年のクリスタルに脱帽しながら、そういう気持が動くのはなぜかと自問してみるが、自答の方は答えが浮んでこない。まして、第三者である余人の私が、身代りとして戦記を書くなぞ、おこがましく覚束ないことに思えてくる。あたかも新聞のコラム欄に小野田さんの笑顔の写真を見、その記事を読んだ感想の醒めやらぬところで、

(彼は七期だ、二俣分校の出身らしい)

と明言するS・F君に再会したことは何かの導きかも知れないなどと、渡りに船の食指を動かしかけた私は軽卒であったようだ。(鎮魂歌)として、同時におのれの生きざまとして、彼自身がそれを文章にするならきっと人の心をうつであろう。私のポピュラーと感じたものがそうでなくなる。真実はきっと訴える力をもつはずだ。彼の一つしかない生は、その生を終ればおしまいになる。生きた証人が証言をしようとする衝動はきわめて自然なものと思う。幸、彼自身にめぐってきた戦後は遅すぎたが、そして戦犯であったという過去のために不当にも忌避を社会からうける時期もあったが、自立独歩の事業が当りをとって成功した。社運は隆昌であり、彼はすこぶる多忙だ。だから、自ら文章を綴る暇はない。

(材料になるかと思うが、折を見ては書きためたノー

であった。

（あれから戦友に会ったのだが、あの話は君の思い出に、そっとしまっておけと言われてねえ、そうしたいと思って……。）

私は啞然とした。電話のことでもありとっさには返事のしようがなかった。

小野田さんがそうであったように、彼も三十五歳で帰還し、はじめて家庭を築いた。それでは彼の青春十五年の性は、と私は遠慮がちに問うたが、彼は笑って答えた。

（たえず私たちは性病の恐ろしさを教えられていたから、そんな気持になれるはずもなかった……。）

彼はその点でも呪縛に生き、せめてもの今の幸福をつかんでいるようだ。

ソクラクレス

三戸岡道夫

一

会議をやっても最近は室内の空気が汚れない。めっきりタバコを吸う人間が減ったからである。

東西銀行の今日の会議は収益増強委員会の第一回目で、二十一階の役員会議室で開かれていた。最近の銀行は儲からない、その対策として設置されたもので、メンバーは専務取締役が二人に常務取締役が三人、それに企画部長を加えて、合計六名である。

「嫌になるほど儲からないね」

委員長である専務取締役が投げやりな調子で言うと

「ほとんどの銀行の利鞘が赤だ。金を貸せば貸すほど損をする。これでは金なんて貸さない方がいい」

堰を切ったように愚痴がとびだした。

「それに問題は国債だな。こんな目茶目茶に銀行ばかりに引受けさせられたんじゃあ、たまらない。しかも一方的、強制的だ。集めた預金の八割は国債にとられてしまう。まともに貸出なんてできやしない。資金ぐりのため に国債を売れば、売れば売ったで、まっ赤な赤字。年間四百億円もの売却損を出して、儲かるはずがない」

「まったくだ。赤字国債を六十兆円も七十兆円も発行して、まるで銀行の犠牲で日本経済を支えているようなものだ。こんな馬鹿な国、世界中どこを探したって、ない。大蔵省の無定見と、政府の無能ぶりには、あきれ返るな」

ひとときの政府批判に花が咲いたかと思うと

「そのうえ郵便貯金に金をとられて、預金もふえない」

「郵便貯金への対抗商品という、複利預金とか利息の高い預金がふえるから、資金コストは上るいっぽうで、お手あげだね」

「いまや銀行は第三の不況産業さ。それも一時的ではない構造的不況産業……」

愚痴と不平は果てしもない。だが、さて、その対策という段になると

「うーん」

委員一同首をかしげるばかりで、いっこうに名案も浮かばず

「もう銀行は駄目じゃないのかな」

「ギブアップだね」

「でも大蔵省が何とかするかもね。銀行がバタバタ倒産というのを、だまって見ているわけにもいくまい」

「合併か……」

「儲からない同志が合併したって儲かりっこないよ」

どの銀行も決算のときは手持ちの有価証券を売りその売却益で穴埋めして表面上は一応利益が出たように飾ってはいるものの、

これもまた、ガヤガヤ、ワイワイで、果てしがない。ついに委員長もたまりかねて

「それでは一つ、若手にプロジェクトチームでも作ってもらって、そこで研究してもらうことにしましょうか。その案ができた上で、もう一度……」

提案が終るか、終らないうちに

「賛成！」

「賛成……」

これまでプロジェクトチームなどが検討して、成功したためしがない。しかし委員たちにしてみれば、こんな泥沼に足をつっこんだような仕事から、早く足が洗えればそれでいいのであって、成功、不成功は二の次である。かくしてあっというまにプロジェクトチームの編成が決定されて、第一回の収益増強委員会はめでたく閉会となったのである。

二

プロジェクトチームのメンバーは本部の各部から、係長クラスの若手が選ばれ、収益増強計画の仕事に専任することになった。

リーダーには企画部係長の梶山が当った。しかしいい知恵があるわけではない。

預金コストは上る一方、貸出金利は下るばかり、資金量は伸びなやみ、人件費、物件費はふえる一方、国債の

負担は減る気配いもない ―こうした八方塞りのなかでは、たとえ若手が知恵をしぼり、ソロバンをはじいてみても、儲かるはずもない。

「役員クラスが考えてできない計画を我々に押しつけてよこしたって、いい案が出るはずないじゃないか」

「役員連中の責任のがれさ」

「どうやって儲けるかだ？　冗談じゃないよ。ここまでくれば、もう経営戦略の問題さ。たゞ一生懸命やれば儲かるというものじゃない。銀行は儲からない収益構造になっちゃった。だから、その構造を変えなくては、儲からない。構造を変えるとなると、経営上の問題だからね、決めるべき役員さんたちにまずそれを決めてもらわなくちゃあ……」

せっかく編成されたプロジェクトチームでも、計画のケケケもできないうちから、理論が空転するばかりで、ちっとも先に進まない。

三

そんなある日、リーダーの梶山は変な怪情報を耳にした。

「内線電話の五〇〇番をかけたことあるかい」

「五〇〇番？ない。だって本部の内線はすべて四桁で、五〇〇という三桁の番号なんて無いじゃないのかい」

「内線になくても、かければかかるのさ」

「なにか聞えるのかい」

梶山は、ふと、あらぬ期待を空想した。

「まあ、かけてみろよ」

梶山は言われるままにダイヤルを廻してみた。5。0。0……。

すると、けたたましい音楽が衝撃音のように耳に飛びこんできた。

「混線か……？」

「そうかもしれない」

……

馬鹿にしないでよ

そっちのせいよ

プレイバック　プレイバック

三四……スナック

二年前に流行した山口百恵の歌だ。

「バーか、キャバレーか……？」

「わからない」

こんな電話の混線はよくあることである。それにしてもバーとはうまい所と混線したものだな。ひょっとすると、あのけたたましいミュージックは、いまはやりのディスコかもしれない。梶山はなんだかたのしい気分になった。

そんなことがあってから梶山は、ひまがあるとときどき混線電話を聞いてみた。受話器を耳にあて、電話をす

るふりをして、仕事中バーから流れる音楽をたのしんでいるなんて、ちょっと背徳のよろこびがあった。

……

馬鹿にしないでよ

そっちのせいよ

プレイバック、プレイバック

……

そのうち一人だけで楽しんでいるのはもったいないと、チームのメンバーはもちろん、出逢う人毎に教えて歩いた。人々は受話器を耳にあてると、言いあわせたように梶山の方を見てにんまりと笑った。

だが、そのうちに、奇異なことに気がつきはじめた。

「この電話、同じ曲しかやらないね」

そう言われてみれば、たしかにそうだった。いつ、誰がダイヤルしても、山口百恵の、馬鹿にしないでよ、ばかりなのである。どうしてだろう。

最初のうちは、どこかに山口百恵偏執狂みたいなのがいて、くり返し同じ曲をかけているのかと思ったのだが、それにしてもひどすぎる。もう一週間以上になる。一週間以上も同じ曲ばかりということになると、気違いである。

だが、もし気違いでないとすると、同じレコードがオートマチックに、くり返し廻っているか、それともエンドレスの音楽テープがかかっているか、どちらかである。廃業になったバーの暗闇で、はずし忘れたテープだけが空しくエンドレスに鳴りつづけているのかと想像の翼を伸すと、それは殺人事件のあった無人の部屋で、ラジオだけがいつまでも死体の側で鳴りひびいている空想につながっていた。

ひょっとするとこの五〇〇番という内線は、どこかの黄泉の国に接続されているのではないか……、梶山はぞっとした。

四

怪電話の正体は何なのか。

たんなる混線でないことは、はっきりした。一週間以上もあんなに異常混線がつづくはずはない。それを突きとめなければ……。

どこで調べたらわかるだろう。とりあえず電話交換室に問いあわせてみた。だが若い交換手の

「あら、ほんと、聞こえるわ。どうしたのかしら…。いちおう調べてみまーす」

頼りない応答。あまり期待できそうにない。本店ビルのメンテナンスは管理部の担当だと見当をつけた梶山は管理部の管理課に連絡してみると、見当はドンピシャリで

「それはまったく気がつきませんでした。さっそく調査します」

課長の返事。

二、三日すると、さすがに担当部のことだけはあって、その原因はすぐにわかり

「電話交換機を納入したSS電機に問いあわせ、技術者にきてもらったところ、この本店ビルができ上ったとき、すなわちちょうど三年前になるわけですが、電話交換機を裾えつけたとき、技師が当面使用する予定のない番号に音楽をセットして、通話テストしたのですね。それがエンドレスで、百恵ちゃんのプレイバックの曲。開通のあと、消すのを忘れたものだから、そのまま鳴りつづけていたのです」

課長の説明は明解であった。あまりに素早い解明は、少しあっけなさすぎた。

機械は馬鹿だから、ストップがかかるまでは、いつまでも鳴りつづけていたのだ。だが三年間も、昼となく夜となく、ひっきりなしに歌いつづけてきたのかと思うと機械とはいえ少し哀れに思えた。誰も気がつかない交換機のなかに埋めこまれたまま、永久に歌いつづけるテープの音は、ビルのセメントのなかに誤って埋めこまれた人間が、「助けてくれ、助けてくれ！」と、永久に叫びつづける亡霊の声のように梶山には思えてならなかった。

五

怪電話の正体もわかってしまえば、なんだ、ということで、管理部の課長は

「さっそく音楽は取りはずしました」

と報告をしてきたが、正直言って梶山には怪電話に対する多少の愛着があって、「調べてくれ」とは言ったが、「はずしてくれ」とは言わなかった、と言ってやりたい感じがあった。残っていれば、まだ知らない人に教えて驚かすたのしみがある。そのたのしみがなくなった。この近代的な超高層ビルのなかには、怪談の一つぐらいあってもいい。

そう思うと梶山は急にあのプレイバックの音楽がなつかしくなって、ダイヤルを廻してみた。

5。0。0……。

だが、もう、なんの応答もない。

無音。

梶山はがっかりした。

だがその時、梶山の頭に別の考えがひらめいた。音が聞えないのは、音楽が本当になくなったのではなくて、前と同じように廻ってはいるのだが、ただ外に聞えないだけなのではなかろうか……。

この考えは、かなりミステリアルで、しかも新鮮な考えだと思った。百恵ちゃんの曲はいぜんとして交換機のなかでエンドレスに廻っている。ただ人間の耳には聞こえない。今後も誰に聞かれることもなく、永久に百恵ちゃんは歌いつづける……。

そう思ったとき、梶山の頭には収益増強計画についてのアイデアが突然ひらめいた。

それは、あまりに素晴らしいアイデアだったので、われ知らず

「あっ……！」

と軽い叫び声をあげたくらいであった。これで利益増強計画がうまくいく……。

……

そのアイデアを実現するのにはコンピューターの使用が不可欠であった。梶山はさっそくコンピューター・システム部からシステム・プログラマーの鳴滝を呼んで、二人でひそかに秘策を練った。

アイデアが素晴らしければ素晴らしいだけ、コンピューターにのせるソフト・ウェアが難かしい。コンピューター・システム作りには六カ月もかかったが、それでも予定通りに計画書は出来あがり、

「せっかくの名プランだから、いい名前をつけたいね」

「強く、逞ましい名前がいい」

「アルギンZ計画というのはどうだろう」

「なんだかドリンク剤にそんな名前があったなあ」

「じゃ、ヘラクレス計画」

「なんだい、そのヘラクレスって…？」

「知らないのかい、これさ」

そう言って両腕を上にあげると、逞ましく曲げて見せて

「筋肉もりもりの、強い奴さ。いま、どこかのゴマーシャルでやっているよ、ほら、ソクラテスよりヘラクレス……」

「でも、筋肉だけじゃ……」

「それじゃ、ソクラテスとヘラクレスを合せて、ソクラクレス計画……」

「それはグーだな」

こうして計画はソクラクレス計画と名づけられて、利益増強委員会へ正式に答申された。委員会ではそれを基にして長期利益増強計画書を作成し、頭取の承認を得て正式にスタートさせた。それによれば東西銀行の収益は、今後確実に増加する予定であった。

六

ソクラクレス計画は順調にすべり出した。

計画の内容は、預金の増加、貸出金の増加、貸出金利の目標、人件費、物件費などの予想と、細かい項目にわたって目標が示され、それを達成するために全国三百個所に配置された支店が、一生懸命に働いた。

その結果、東西銀行の業績は順調で、半期がすぎ、決算の数字が出てみると、予想以上の儲かりようで

「えっ！　こんなに儲かったのかい」

上園頭取も驚くほどの数字であった。

数字はコンピューターから正確に出てくるから、間違いはない。押えても、押えても、こみあげてくる笑いを噛み殺しながら

「我々は予想外に働いたんだなあ」

「利益なんて、結局ちょっと頑張れば儲かるものなんだよ。そう神経質になることないさ。なにせ八兆円の金が動いているんだもの。実行、実行、要は実行力あるのみ。我々の力も見捨てたものじゃないね」

頭取以下すっかり自信をつけ、その年の暮のボーナスはたっぷりと出て、競争相手である他の銀行をうらやましがらせた。プロジェクトチームのメンバーにはボーナスが特別加算され、さらに上園頭取から、一晩、中華料理をごちそうになるという栄誉も与えられたことは、もちろんであった。

さて、こうなると、マスコミが東西銀行を放っておかなかった。折しも銀行経営は、やれ国際化、やれ金利の自由化、やれ構造的不況産業だと、大さわぎの時代であるから

「構造的不況にあえぐ金融界にあって、唯一高収益の東西銀行」

とA紙が取りあげると、続いてB紙、C紙と、先を争うように東西銀行のソクラクレス計画を取りあげ、四大紙が終れば、次はおびただしい週刊誌、雑誌、テレビ番組にと、あっという間にスターダムにのった流行歌手よろしく　東西銀行がマスコミのどこかに出ていない日はないといった有様。

「奇蹟の銀行、東西銀行」

「八十年代の経営を先取りする東西銀行」

「若手のアイデアを経営に生かした稀な銀行」

こうなるとプロジェクトチームのメンバーたちも、しばしばマスコミの舞台に引きずり出され、上園頭取に至っては、もう、経営の神様といった工合。

「世の中の経営者はすべからく上園頭取に学ぶべし」

そんなキャッチフレーズが、雑誌、新聞に氾濫し、そうかと思うと経営講演会や経営セミナーの講師にひっぱり出されて、ほとんど席のあたたまる暇もなかった。するとそんな席上でよく質問が出た。

「この難局時に頭取がいつも銀行を留守にしていて、よく東西銀行さんは儲かりますな。わたしの所なんて、頭取のわたしが朝から晩までキリキリ舞いしていても、なかなか思うように儲かりませんのに……」

当然の質問である。すると上園頭取はいつも自信をもってこう答えるのであった。

「それがソクラクレス計画の強みです。ソクラクレス計画が動いているかぎり、東西銀行の収益は大丈夫です」

「はあ……？」

七

ソクラクレス計画はついに現代の怪物になったといっていい。

だが若干、合点のいかぬことがあった。

それはソクラクレス計画をいくら勉強しても、セミナーでレクチャーを受けて帰っても、どの企業もさっぱり儲かるようにならないことであった。

「ソクラクレス計画って本当にきくのかい？」

だが、そうした質問にいつも上園頭取はこう答えた。

「計画はあくまでも計画。その計画を実現させるのが、君、経営者の能力というものさ、ワ、ハ、ハ……」

要はやる人次第というわけである。なんだか、かって一世を風靡した紅茶きのこのような工合になってきた。

現に東西銀行のなかにも、ソクラクレス計画のうさんくささに、なんとなく気づきはじめている人間が、二、三いた。まず、梶山といっしょに仕事をしたプロジェクトチームのメンバーである。ソクラクレスのコンピューターシステムは、梶山とシステム・プログラマーの鳴滝の二人が極秘に作りあげたので、他のメンバーはその内容をまったく知らないからであった。

「こんなにおれ達、ほんとうに誉められていいのかなあ」

まずそんな素朴な疑問が彼等を襲った。

「そうだよなあ。プロジェクトチームというけれど、おれ達、それほど大した計画を作った覚えない」

「今までの長期計画とくらべたって、それほど変っているわけじゃない」

「そうなんだ。係数目標だって、従来のトレンドに若干の意欲を加えて修正した程度で、飛躍的に業績が上るようなものじゃない。だから上園頭取が経営の神様と言われるほど、うまくいっている筈ないよなあ」

「業績は普通なのに、どうして利益ばかりがあんなに出るのだろう」

自分の銀行でありながら、自分の銀行がなんとなく不気味なものに見えてくる。儲かっているのだから、いいじゃないかと、単純にそう言っていられない雰囲気である。

ソクラクレスとはいったい何物なのか。

八

その年の暮れが近づいた。木枯しが吹き荒れ、ジングルベルが鳴り、歳末大売出しの垂れ幕が風にはためき、銀行員はボーナス預金集めに忙しい。

そんなあわただしさの中で、毎晩のように、どこかで忘年会が行われている。

プロジェクトチームはとっくの昔に解散したのに、年の暮になると誰が言い出すともなく集っては、忘年会と

いうことになる。今年の忘年会は水たき料理屋の二階だったが、今夜はまだあまり酔いも廻らないうちから

「ソクラクレスって、いったい何なんだい」

ということになった。

「ソクラクレス？わかんないよ。そんなもの」

「自分で作っておいてわからないってことがあるか」

「そう、からむなよ。いいから、酒くさい息を吹きかけないでくれ」

だが、それがきっかけで忘年会はたちまち

「ソクラクレスって、何なのだ……」

「ソクラクレスの正体は……」

ソクラクレス一色に塗りつぶされて、いつのまにか一同の視線はまず梶山の顔に集中し、次にその視線をシステム・プログラマーの鳴滝の方に移動させていったが、

「ソクラクレスの正体は、つまるところコンピューターシステムにあるんだろう？」

チームのなかでも勘の一番鋭い尾花がぴたりと言った。

「最初チームのなかにシステム部の人間はいなかった。それが途中から鳴滝が入ってきた。もちろん最近はなにをやってもコンピューターの手を借りなければ何もできないから、システム部のメンバーが入ったって少しもおかしくはない、いや、入ってむしろ当然なのだが、しかしそれならば、最初から入っていればいい。それが途中から突然入ってきた。そこにソクラクレスの鍵があるような気がするな」

さすが尾花の頭は鋭いと梶山は思いながら、その痩せぎすで、神経の細かそうな横顔、よく動くうすい唇を眺めていた。

「聞くところによると上園頭取は、調子にのって、今度経営大学を作ってその理事長もやるというじゃないか」

「銀行が出資してかい…？」

「そうだろう。いくら頭取でも、個人で学校までやる金はないだろうから」

「いよいよ頭取の仕事の方はお留守になるね」

「頭取にそんなことさせておいて、本当にいいと思うのかい」

尾花は酒をのむと蒼くなる顔をひきつらせるようにして、梶山につめ寄ると、一言

「梶山、大丈夫、完全犯罪だろうな」

斬るように言った。

「完全犯罪…？」

誰かが、うわ言のように言ったその完全犯罪という言葉に、酒に酔っぱらっていた一座は、一瞬シンと静まった。

九

「完全犯罪という言葉にまともに答えようとすると、ちょっと難かしいが……」

と梶山は言葉を選びながら

「ソクラクレスは犯罪ではない、だがそれは完全である—そう言えるだろう」

梶山の言い方があまりにはっきりしていたので、さすがの尾花もすぐにそれを反論する言葉が出なかった。

「犯罪ではない。それは合法システムなんだよ」

梶山はくり返すようにそう言うと

「我々はチームで利益増強計画なるものを検討した。だが、利益とはそもそも何なのか。決算とは何なのか。改めてそう問われてみると、明確にこれだと言える人間は居ないのではないかな。利益—それは要するに決算の結果はじき出されてきた数字にすぎないのだ。たとえばここにある徳利のように……」

喋りながら梶山は徳利を持って、左右に振りながら

「はっきり眼に見えるものじゃない。計算されて出てきた、単に数字にすぎないのさ。誰もこれだと言って、摑むこともできない、触ることもできない。ちょうど神様のようなもので、眼には見えない、手にふれることもできない。だから鏡とか宝剣とかを御神体として信ずるほかないように、利益もどこかに客観的に正しいものがあるのではなくて、決算方式にしたがって計算されて出てきた数字にすぎないのさ。出てきた以上はその数字を信ずる外はない。それが違うといったって、誰もそれを立証できやしない。たとえ計算し直してみたって、その数字も同じように計算されて出てきた数字にすぎないのだ。絶対正しいという根拠はどこにもない。『正しいと信ずる』こと、それが正しいということだ」

梶山は一気に喋りまくった。

かって梶山にはこんな経験があった。その頃は経理部経理課というところにいて、銀行全体の収益予測事務をやっていた。まだコンピューターの入らないころで、女子行員がソロバンをはじいていた。その女子行員がある日、突然

「貸出利廻りの数字がちがっておりました」

だがその時はすでに銀行全体がその間違った数字で走り出してしまっていたので、期の途中からの大幅な利益修正は大変困難で、上を下への大騒ぎになった。梶山は上司から大目玉をくった。そもそも銀行全体の収益の基礎となる重要な数字を、一女子行員のソロバンの数字だけに頼っていることにそもそも問題があるのだが、仕事というものは個々の数字をいちいち疑っていたのでは、前へ進まない。梶山は

「今度は大丈夫かい」

と念を押した。

「大丈夫です」

「絶対…？」

「ええ、絶対」

だがその絶対という保証はどこにもない。またこの女

子行員のことだから二カ月もたたないうちに、『また違っていました』では、目もあてられない。だが、いま梶山のやれることといったら

「大丈夫か、大丈夫か、絶対大丈夫か」

と、しつっこく念を押し、彼女が答える

「大丈夫です」

という言葉を信じて仕事をする以外ないのである。疑っていけば、きりがない。どこまで疑えば正しいのか…無限地獄に落ちるばかりである。

かって女子行員が手で計算したものを、いまはコンピューターが計算している。だから現在ではコンピューターの数字を信用するより外に手がないわけで、それは利廻りであろうと、銀行収益の数字であろうと、同じである。

「するとコンピューターから儲かったという数字をはじき出させる、そうすれば銀行は儲かったということになる—と、まあ、こういうわけなのか」

尾花が途中から言葉を入れた。

「さすが尾花君だ、鋭い、そうこなくっちゃ。コンピューターに、いつも儲かるような数字が出てくるプログラムを組んでおけば、それで我々の収益増強計画は完了なのさ。コンピューターからはその数字しか出てこないのだから、それが唯一絶対の東西銀行の収益……」

「なるほど、嘘の数字でも、それを信用すれば、それが本当の数字ということか」

「そして考えてみろよ、こうした計算が実はコンピューターの一番得意の分野なんだ」

「そのコンピューターシステムを、梶山と鳴滝の二人で極秘に作ったというわけだ」

「その通り」

「それでは紛飾決算じゃないか」

誰かが言った。

「だが君、その紛飾ということを何によって証明する?」

梶山は自信をもって言った。

「コンピューターによって正しい数字を」

「だめだ、いま言ったろう、コンピューターからはその数字しか出てこないのだ」

悲しいことに、人間ではコンピューター以上に複雑な計算を、コンピューター以上に早いスピードで計算できないのである。

十

何のことはない、マスコミを騒がせている東西銀行の高収益は、コンピューターの計算システムによる架空利益にすぎなかったのである。しかしそれを誰もが発見できず、誰もがそれを信じていれば、それが本当の利益なのである。

「でも一時的にはそれでいいとしても、長く続けていれば、必ずどこかに変な所が出て、ばれてしまわないかい」

「そこがシステムの完全なるゆえんさ。たしかに架空利益が累積していけば、どこかにおかしな所が出てくる。たとえば現金勘定が足らなくなるとか、貸出利廻りが低下するとかだ。だが、そうした現象が起きると、すぐにコンピューターが修正してしまうシステムが組んである。コンピューターは永久にこの修正作業を続けるのさ」

「ふ—ん」

さすがの尾花もため息まじりに感心して

「で、どこから、そのアイデアを……」

発想の原点に興味をもった。

「ほら、あの山口百恵だよ。馬鹿にしないでよ、そっちのせいよ……」

梶山は歌うように言い

「例の怪電話さ」

梶山はエンドレスに歌いつづける怪電話から、永久に嘘を修正しつづけるコンピューターシステムを思いついたのである。

「なるほど。しかしシステムは永久でも、本当に永久にボロが出ないかな」

「理論的に言えば、架空利益の累計が、預金残高を越えてしまえば、システムは瓦解する。そして実際にはもっと前にパンクするだろう。だが少くとも、百年や二百年は大丈夫だ。少くもおれ達が生きている間は保証できる」

「すると経営の神様である上園頭取も大丈夫というわけだ」

「だから上園頭取がセミナーで何を大言壮語しようと、ね、ちゃんと儲かるようにコンピューターが作動しているわけだから、安心さ。経営大学でも何でも作ってくれ。少くとも頭取が死ぬまではソクラクレスのインチキ計算はばれないのだから、上園頭取は死ぬまで経営の神様でいられるわけだ。そして自分もそれを信じて死んでいけるのだから、幸福な人間さ」

「いい気なものだ」

「だが、われわれだって、いい気なものさ。ソクラクレスのお蔭で、停年になるまで高い給料がもらえて、たっぷりボーナスがもらえて、そのうえ銀行が倒産する心配もない」

「そのかわり、百年たったら大変だ。ある日コンピューターが突然故障する。狂ったようにおかしな数字を吐きつづける。まるでコンピューターが下痢をしたような症状になる。調べてみると、びっくり仰天。百年以上にわたって架空利益を出しつづけてきたために、コンピューターシステムが破裂し、東西銀行の資産内容はちょうど白蟻に喰いつぶされて内部が空洞になった大木のよう

に、すっかりガラン洞になってしまっていることがわかる」

「上を下への大騒動……」

「でも、そんなこと、知っちゃあいないよ、おれ達の死んだ後のことだ」

……

忘年会が終って、梶山は一人で電車に乗っていた。窓の外を冬のネオンが宝石のように流れる。闇に光るきらめきの集団は、まるで拡大したＩＣ（集積回路）の内部をのぞいたようだった。

コンピューターの心臓部ともいうＣＰＵ（中央演算装置）の中には、おびただしいＩＣが静謐に並んでいる。人眼の届かないそのＣＰＵの中で、今日もコンピューターはせっせと架空利益の計算を行っている。そしてこれから五十年、百年と、誰にも知られずに、まるで地下水のように計算しつづけて、それは尽むことがないのだ。

そう思ったとき、梶山の中には突然あの怪電話の音楽がよみ返ってきたのであった。

……

馬鹿にしないで
そっちのせいよ
プレイバック、プレイバック

……

めぐむは走る

山口健二

大正十一年（一九二二年）、大隈重信、山縣有朋あいついで死に、森鷗外も六十三年の春秋をとじた。日本共産党はこの年、秘密結社の核作りをすませ、大平洋沿岸の地殻は音もなくひそやかに翌十二年の大震災の準備をすゝめる気配であった。

このまちの東には菅の平がうす紫色に煙り、西は旭山、頼朝山、豪嶺山がせまり、その山裾路を牛馬が、馬子うたに蹄の音をゆっくりと合わせながら山村に物を運んだ、南北にかけては、信濃川が千曲、犀の両川にわかれ、越後の国から「中山道」「北国往還善光寺道」へとつながる。

停車場はまちの南の外れに木造の建物を空色のペンキで化粧して、この山あいの小都市が善光寺参りの人むれや、近隣の山村の産物の集散地であることを少し誇らしげに、練瓦造りの巨大な機関車庫や、幾本も幾本も走る線路を広ろびろと抱えこんでいる。その機関車庫から朦々と立ちのぼる石炭の煙を、時には耳を劈ざく短く鋭い気笛で、又時には茫々と空の彼方に語りかけるような気笛で吐き散らしながら、蒸気機関車が黒光りする鉄の姿を身振るいさせて出入りしていた。その機関車の中の菜っ葉服の機関士の顔は、かれが釜の鉄蓋をあけて石炭を投げ入れる時にカッと火焔に映えて、めぐむの目には善光寺の仁王像の顔よりもおそろしく、おごそかに、不思議の国の鬼の王様のようにうつった。又線路の果ては、遠くうす紫に霞む山あいに吸いこまれ、果てしなく、ついには天につながってゆくかに見えた。かれは、その停車場の古枕木で造られた囲い柵に頬杖をついたり、寄りかかったり、蹲みこんだりしながら、旭山の峯に夕陽が沈みかかるまで一日中うっとりとかれの心の中の世界に遊ぶのである。めぐむは十五才であった。

しのが死んだ夫との間にめぐむを生む。しのと夫がめ

ぐむが普通の子供でないことに気がつく。二人は死にものの狂いでめぐむの為にと金をためる。もちろん、重ねて子供をつくるおこないなんて、恐ろしさが先に立って出来なくなった。しのの方にも夫の方にも、はっきり狂いが頭にある者は見当らなかったのだから、それだけ何者かの仕業は二人にとって解釈のしょうのない恐ろしさでせまっていた。夫は、その役場の書記で、しのはそのまちにつながる村の小学校の女教員であった。夫は、役場に出勤する前と、役場を終えてからの数時間、まちにある養蚕組合事務所に出て内職をした。二人の必死の稼ぎでめぐむが十一才になった年、ようやくまちの北の山懐近く、田圃の中に四百五拾円也で一戸建ての家を建てた。山に近く田圃や畑にとりかこまれて地代も安く普通の子供でないめぐむを持った二人には世間からのがれてホッとするところでもあった。だがその翌年、夫は風邪で呆気なく死んだ。大正八年全国で十五万の死者を出した流行性感冒であったのだろうが、粗食と過労のためでもあった。死ぬ二年前から、一割七分の値上げで一箇六銭になったバットを、値上りをにくんでやめた夫が哀れであったが、小農の四女で、よく勉強ができるというので村の素封家出の尋常小学校長が力瘤を入れてくれて、学資を出世払いで出してくれたお陰で女教員になれたしのは、夫の死に会ってもめそめそと実家を手頼るわけにはいかず、めぐむと二人で生きてゆかねばならなかった。木組みは粗末で、庭とて樹木もなく、畑、田圃と隣り合せであるが、未だ漆喰の匂いもあたらしいその家の中でである。

しのは師範学校出の教員であるから、めぐむが三、四才の頃から、自分の力で人の子並みな知恵をつけようと文字と数とを教えたが無駄であった。まだ幼児のうちは顔つきは夫に似て瓜実風で、放っておいても、そう他人に疎まれることはなかったが、家を建ておわった夏、夫と二人が最後の頼みとした東京の大学病院という所へ連れてゆくために汽車に乗せたことが、めぐむに奇怪な目覚め方をさせる切っ掛けになった。だから歯を食いしばって粗食と労働に耐えて建てた家が、夫を殺し、めぐむを目覚めさせ、その上やがて極微な細菌となってしのの心を荒し初めるということになるのである。

それ迄は、それ程きびしく言いきかせたり折檻などしなくても、めぐむは父と母の留守中、与えられた物を食べ、与えられた物を手にして遊んで昼間を過していた。白痴の子を独り家に残しておいても、火遊びのもとさえ始末すれば、戸をしめ切って、それに鍵する必要がない程、そのまちは事もなく穏かな空気につつまれていた。遠く国の外に目をやれば、〃ドイツ潜水艦による船舶の無制限・無警告撃沈宣告〃とか〃アメリカ国の対独宣戦布告〃とか〃日本軍艦の地中海出動・日本陸軍のシベリヤ出兵〃とか、又国内でも、壱円につき二升台への米価暴

騰・米の取引所立合停止から遂に参加者七十万人に及ぶ〃米騒動〃の爆発とか大波小波はあったが、まちの男たちは浴衣の尻をはしょって、ステテコばきの足を下駄に、かんかん帽を頭にのせて、ゆったりとした足取りで街を歩き、洋服に靴などという出立は高級役人、裁判官、医者、警官、監獄吏員ぐらいなもので、教員や普通の官公吏は和服に袴をうがつ者が多かった。女たちは、家の中で一日中こまごまと心のこもった家事に忙しく、世間との交わりは、毎朝毎夕家々を注文取りに、配達にと廻る魚屋、八百屋、又は引出しのついた箱に色様々な見本を入れて背負って来る菓子屋のご用聞きや、のんびりと呼び売りの声を流してゆく棒手振り行商人たちとの無駄話ぐらいなもので、花柳の街には「パイノパイノパイ」「平和節」「のんき節」が数少ない蓄音器から流れ出てくるといった静かさであった。

東京市の小学校教員が八割増俸の示威運動をやるという動きが、この山村の小学校にも余波を運んで、その日は放課後児童を帰してから会議があるというのを、しのは同僚や、口髭を蓄えた教頭の目を盗むようにそそくさと学校を出た。他の誰よりも早く退くことへの心の引け目には、もうこの頃はなれて、それだけ勤務にきめをこまかく、師範学校でまなんだ新教育法も取り入れて決して他の同僚には引けはとっていないという自負さえあった。白痴の子があることは誰にも打明けていない。他人に打明けて情けを引こうなどとはしのの思ったこともないことであり、それよりも、朝早くから夜がすっかりまちを覆いつくすまで働いている夫と、それからめぐむとは、自分が支えているのだという思いが、一時間半も歩かねばならない足腰をますますシャンとさせ、瞳は宙に据わっていた。

夕暮れ時の家々からは、コークスや炭をたく煙が漂い出て、時には焼き魚のかすかな匂をまじえていた。しのは田圃の中にぽつりと立った家に人気がなさそうだと一丁も手前から感じていた。めぐむはどうしたのかな？今迄こんなことはなかった……。

通りから畦にまがるところで、その家が建った時、近処のつき合いのしるしにと紫陽花を只で一株便所のわきに植えてくれた植木屋の年寄りが腰をのばしながらしのに話しかけた。

「今おかえりかね。今日はヒョンなとこでめぐむ坊見かけたから、こりゃひとこと言っとかにやならねえって思ったんだ。半里もある停車場の線路のとこで汽車見てるんだが、まちがって線路に入りゃ危ねえからな」

「あら、そんなとこまでめぐむが……どうも、どうも……」

「今日はまだ家へ帰っていねえようだよ」

しのはお茶でも一ツと年寄りをさそってみたが

「おらあ、そこんとこに用事あるもんだで……」
とかれは腰を二つ三つたたいて立ち去った。
その日旭山に夕陽が沈み、あたりが闇につつまれかかる頃、めぐむは縁側の下から上目遣いにしのの顔をうかがいながら上って来た。かれの目は恍惚の世界から無理に引き戻された人間の無惨な悔いの思いに歪んでいた。そのことをしのはその夜は夫に内緒にした。新しい子供教育の心理学というようなものを師範学校で学んだことのあるかの女は、めぐむをいきなり叱ったり折檻したりはせずに、今迄より一層注意深くめぐむを観察して、ことというところで巧みに教えていかねばならぬと心に決めた。ただその夜は夫の帰る前に
「お前今日どこへ行って来た？かあちゃんに話してごらん」とやさしく言った。めぐむは上目遣いから段々普通の目つきに戻りながら
「キシャポッポ・ピッピー・ダダチチ・シュシシ・ダダチチシュシッシー・ダダチチ・ダダチチ・ポー」と言いながらその目には再び恍惚感があふれ始めて、部屋の中を走り回ろうとした。しのはこれで植木屋の年寄りの言った通りだなとわかったが、一瞬汽車にひかれてしまうがいいという思いが稲妻のように心の隅をかすめ、そっと身振るいしてめぐむを抱きしめていた。
しのがめぐむと一緒に家にいられる日は、日曜・祝祭日だけで、夫は殆んどめぐむの寝顔だけを見る暮らしが続いていた。だからしのはめぐむのそばに更に長くいてやるためには一層機会をねらって同僚や教頭の目を盗まねばならなかったし、めぐむの方にも母親しのの引き締った目をのがれようとする気が次第に芽生えて来て、暗くならぬうちに、しのより先に家に帰っていなければならないことを感づいて来た。その上恍惚の世界に出来るだけ長くいたいので、とうとう停車場までの半里の街を韋駄天走りに走ることを工夫した。父親が死んで一年、十二才のめぐむの色白かった瓜実顔は黒褐色に干涸びてきた。一日中停車場の木柵に立っているから陽に焼けるのはあたり前のこと、そのうえ、しのが昼食にと用意しておく食べ物を食べずに一日一里を走るのだから、顔の皮は骨にじかに張りつき、裸足と脚は引きしまって鉄棒のように細く強くなって来た。この変化をしのが気づかぬ筈がない。初めは汽車の玩具を与えたり、汽車の絵本を買ってやったり、寝物語りには汽車がどんなに恐い化け物で、めぐむをねらって食べようとしているんだよと、自作の童話風な話をしてきかせるのだが、かれの停車場通いはやむ様子は見られなかった。そればかりか、此の頃は韋駄天に走るばかりでなく、走る自分が汽車になって、線路に乗って、何処までも、遂には紫色の山あいから天の方まで駆け登れそうに思えてくるのであった。
夫の生きているうちは、根気強い女教員の努力が続い

たのであったが、夫がいなくなって、白い漆喰に冷然ととり囲まれるめぐむと二人だけの家になってからは、しのは少しずつめぐむの教え方に狂いが加わってくるようであった。
「カアチャン、カンベン、ユルシテカンベン、カアチャンカンベン」と絶叫するめぐむの声が田圃の中の一軒屋から一丁も離れた山の肌に反射して、街を吹きぬける風に乗って聞えることが多くなった。
「師範学校ちゅうとこでガクモンしたひとがやってるんだからなぁ」とめぐむの絶叫が聞えても近処の人は立ち入ってくることを憚った。
ある夜、そこは年寄りの自信がさせるのだろうか、それとも仏心のせいであろうか、めぐむを停車場で見かけたと数年前まだしのの夫が生きていた時にしのに知らせてくれた植木屋の年寄りが、めぐむの絶叫にたまりかねて、しのの家に近づいて見た。
二十燭の裸電灯の下の丸いちゃぶ台に皿が二、三品、後姿であるがしのはあぐらをかき、かの女の右かたわらに一升入りの徳利が据えてある。左わきに箒の竹の柄が投げ出されている。正面からしのの顔が見えたら、この仏ごころの年寄りもおそらくその場に立ち竦むか、勇気を振い起して一目散に逃げ帰ったであろう。めぐむは裸で棕櫚なわで柱にしばりつけられていた。投げ出された黒い脛には早熟気味に毛がまばらながら生え、その奥にはちゃんと薄く黒い部分がのぞいていた。
しのはめし茶椀で臂を横につっぱる姿勢で酒を呑む。夜は女を変貌させたか。後姿であるから年寄りの眼にはじかには見えないが、はだけた浴衣の頸や肩のあたりから察すると、かの女の目は凝然とめぐむのその部分に据えられているようであった。
「ガクモンっておっそろしいことさせるもんだな」年寄りは声にならぬ考えを喉もとで呑みこんで、忍び足になって畦まであとずさって、夜の空気を深く吸った。
その翌朝、しのが学校へ出て行ったあと、間もなくめぐむは畦から通りへ出て来て、両肘を腰に、駆け足の姿勢をとって言った。「ピーッ……ハッシャーシューッシューッポッポッポ」
腰のあたりのこぶしを車輪の回転の形にまわし始め、やがて「ダダチチ・シュシシ・ダダチチシュシシ」と走り出した。足と肘の回転は次第に速度を増し、まだひと気まばらな街を、牛乳配達の引き車や新聞配達人には目もくれず、十才頃作ってもらった丈が短かくつるしあがった浴衣の裾を十五才の毛脛で蹴ちらしながら、めぐむは停車場目がけてつっ走る。半里の道を一息に駆けとおすことは出来ない。めぐむの汽車は東京へ行ったとき覚えた停車場の名前をとなえて時々とまるのだ。
「ウエダーウエダー」
「タカサキータカサキー」

〝シュウーツ・シュウーツシュウー。グッグッグッグッウー〟とめぐむの汽車は蒸気を吐きブレーキを入る。
途中の停車場にとまるとめぐむの汽車は息を入れるために暫らくは歩く。黙って歩く。目は遠くうつろに空に向けられている。そんな時、街の商店の若いおかみさんが店の前を掃いていたり、水など撒いている姿に出あうと、めぐむの目は空から地上にかえり、かれは近頃次のような挨拶をするようになった。
「おかみさん、赤い腰巻みえるヨ」
夜中のしのの折檻はめぐむを更にもう一つ別の世界にも目覚めさせてゆくようであった。

可愛い登美

岸田幸雄

一、けんか神輿

ここは関東の城下町。毎年この町で行われる秋祭は評判で、東京あたりからも沢山の人が押しかけて来る。その焦点は何といっても、「けんか神輿」だ。辻で出合った神輿と神輿がさんざん揉み合った揚句、相手に進路を譲らせた方が勝ちという「けんか」だ。その場所はいつも決っている。蔵造りの家がいっぱい並んだ町のど真ン中の辻だ。
今日はその日だ。夜の八時頃だろうか。いよいよ始った。神輿を揉む者も見る者も心は一体になって酔い痴れる。見ると、人垣の最前列で熱狂しながら応援している十人ほどの女の子達がいる。みんな派手な祭着をきて、真赤な口紅をつけている。これがこの町の中学一年生たちとは誰も知るまい。
次々に新手の神輿が現れて揉み合う。
最後の揉み合いが終るまでにたっぷり二時間はかかったろう。誰もが存分に堪能した貌をして、二手に別れて帰る神輿の後をぞろぞろと蹤いてゆく。
さっきの女の子達はと見ると、それとは反対の淋しい通りをなおも興奮して喋りながらかたまって行く。すると前の方を五、六人ずつの若い男達が通りを挾んで冗談を言いながら歩いている。
「あれ上級生だよ」
と誰かが言う。
どうやら男達には酒が入っているようだ。互いの冗談が大声になり、険しくなり、急に間隔が狭ばまって来た。
その時女の子達の中から小柄なのがするすると飛び出し、中に割って入り、
「喧嘩はやめなさい！」
と両手をひろげて大の字に構えた。
これには男達の方が却ってびっくりしたようだ。そして双方ともげらげら笑い出した。
「馬鹿！喧嘩じゃねえよ」
と言いながら互いの間を離して、もとのように歩き出す。
「トミー！　やったあ」
そういう女の子達の叫びに迎えられて、その子は戻ると、舌をべろっと出して言った。
「あたしほっぱり投げられるかと思った」
男達はやがて姿を消した。
もうたいていの店は閉っていた。中でたった一軒灯をつけている菓子屋があった。トミーと呼ばれた女の子は今度はそこへ飛び込んだ。そして大きな菓子袋を持って出ると、一人一人にその菓子をわけ与えた。
丁度その時俄雨が降って来た。女の子達は申し合せたようにちりぢりに別れた。あとには静かな暗い通りだけが取残された。

二、二つの瞳

祭の時の女の子達の中学校の担任は佐伯優子先生。長身ですらっとした体育の先生だ。すべてにさらっとしていて、えこ贔屓をしないから、みんなの生徒から慕われている。新卒でこの学校へ来てもう十年になる。
佐伯先生は新一年生としてこの女の子達を受持って、授業その他でいつもじっと自分を見詰めている二つの瞳を感じていた。その瞳は「あたしは先生が好きで好きでたまりません」という瞳であり、同時にまた「誰よりもあたしを可愛いがって下さい」という瞳でもあった。先生は可愛い子だと思った。だがえこ贔屓は絶対に嫌だ。ふだんはわざとそっちは見ないようにしている。といっても時々気になってそっちに目を向けると、その瞳は待ってましたとばかりにニコニコッとする。
この二つの瞳の持主があの祭の時仲間から「トミー」と呼ばれた女の子だ。本名林登美。「とみ」とは呼びにくいので専ら仲間からは「トミー」と呼ばれている。
どうやら登美は仲間に対して気前がいいらしい。そして小親分としてクラスの半分ぐらいの人気をかち得てい

るようだ。

一学期早々佐伯先生は他の生徒と同様登美の処も家庭訪問した。登美の家は城趾の近くにある古い染物屋だ。

母親が家の総てを仕切っているようだ。父親もおばあさんも出て来て愛想がいい。どうやら家庭の悩みは登美が外にばかり出ていて、家で落ちついて勉強をまるでしないことだった。先生はどの家庭へ行っても必ず聞くことだが、登美の月々の小遣いの額を聞いた。それによると平均か多少多い程度だった。

話しながら佐伯先生はただ一つ気になることがあった。それは母親が人前で婿さんである父親を口汚く罵ることだった。

二学期になって、祭の前後から妙なことが他の先生達から佐伯先生の耳に囁かれるようになった。最近いくつかのクラスで起ったお金の盗難の犯人が登美ではないかというのだ。佐伯先生は信じなかった。だが気にかかる。

ある日先生は相談室に登美一人をよんだ。

「この頃よそのクラスでお金がよく盗られているけどまさかあなたではないでしょうね」

「いえ、あたしです」

この返事には佐伯先生の方が泣出しそうな顔になる。

「盗ったお金どうしているの」

「あたしの仲間みんな貧乏でお小遣いを持ちません。それを見ると、どうしても何か買ってやりたくなるんです」

「人から盗ったお金で買って貰って喜ぶ子がいると思うの」

「……」

二人はしばらく黙ったまま。

やっと、今度は登美の方から切り出した。

「先生はもうあたしが嫌いですか」

「こんな恥しいことをしておきながら、まだあんたは先生に可愛いがって下さいと言うの。それほど可愛いがって貰いたかったら、今後絶対にやりませんとここで誓いなさい！」

「はい。絶対にしません」

其後盗難の噂は跡を絶った。佐伯先生はほっとした。だが三学期の終り頃ＰＴＡ主催のバザーが開かれた時、役員のあるお母さんのハンドバックから登美は大金を盗んだ。

これは進級会議で当然大きな問題になった。殆ど全職員の意見は一致して、

「林登美の盗癖はもう一種の病気である。もうこうなったら専門の施設に入れて治療して貰うより方法はない」

と言うわけだ。これに対して佐伯先生の意見は、

「学校として施設に入れることは簡単だ。しかし登美がこのようになったことには、自分にも大きな責任がある。担任としての努力不足を痛感している。来年度もあの子を持ち上ってできる限りの力を尽したいので、協力して貰えないだろうか」

これには他の職員も折れないわけには行かなかった。

二年になった登美を佐伯先生は自分のやっているバレーボールクラブに入れた。ある程度登美の精力のはけ口になるだろうと考えてのことであり、また一刻も彼女から目を離したくなかったからである。

母親も学校に呼んで、先生は激しい口調でこう説いた。

「どうかご家庭をもっと楽しくして下さい。登美さんはお母さんがお父さんを馬鹿にするような家にいたくないのです」

母親は黙ってこそこそと引きさがった。

しかしそれから一月たたない中に、登美はさらに大きな事件を起して佐伯先生を仰天させた。自分の近所の家を三軒荒らして現行犯で警察につかまったのだ。

こうなったらもう佐伯先生にはどうしようもない。即刻北関東の施設に入れることになった。施設といっても早く言えば感化院である。

その日施設から先生が迎えに来た。そして附添いは要らぬと言って登美を連れ去った。帰り間際次の言葉を附け添えて…。

「では二年間私共にお委せ下さい。それから里心を起すといけませんから、今後少くとも三ケ月間手紙の往復また当方へのご来訪は一切ご遠慮下さい」

三、可愛い栗鼠たち

登美の連れて行かれた施設は広い山裾にあった。施設といっても立派な正門には〇〇学園と書かれた看板が下っている。塀は高いが、中に入ると広々した校庭の真正面に純白の洒落れた二階建の校舎が構えている。校庭のまわりにきれいな花がいっぱい咲いている。鳥小舎のようなものもいくつか見える。校舎の裏へ出ると寮が五つほど並んでいる。登美はその中の寮の一室に導かれた。

先生はそこで初めて、自分はここの寮長で「有島実」というと名乗った。奥さんも出て来て名を「和子」と告げる。やはりここの先生だ。先生夫妻は登美が前の学校で何をやって来たかなどとは一切聞かなかった。そしてこれからの毎日の生活のきまりのようなものを話し、困ったことがあったら何でも相談しなさいと言う。登美は黙って話を聞きながら、この先生二人とも何処となく佐伯先生に似ていると思った。

同じ寮の全生徒にも紹介された。登美は驚いた。どの人もどの人も自分より五つか六つぐらい齢を喰った姉さ

んばかりだ。みなしたたか者の貌をしている。そして、「なーんだこんな子どもか」という目つきでこっちを見ている。どこにも自分を相手にしてくれそうな貌は見当らない。

紹介が終って割り当てられた自分の部屋に入ると、すでに同室の五人の生徒は戻っていた。でもその五人は大体自分と同じぐらいの齢格好だ。登美は幾分ほっとした。

その夜登美は布団をかむっておそくまで泣いていた。時々「佐伯先生！佐伯先生！」と叫びながら。

翌日から授業が始った。登美が考えていたよりも学科はずっとやさしい。登美は安心した。

夕食前の自由時間に登美の足は昨日来た時に見当をつけておいた鳥小舎の方へ自然に向っていた。

小鳥よりも小さな動物がずっと多い。

真白なモルモットが二、三十匹もいる。藁につつまれてどれも何かを忙しそうに嚙んでいる。でも体は全く動かさず静かだ。赤い目が時々金色に光って、可愛い。

栗鼠も五、六匹いる。じっとしているのもいれば、木の枝をするすると渡り歩くのもいれば、地面に犬のチンチンそっくりの格好ですまし顔のもいる。どれもみんな可愛い。特別にこっちを見ているわけでもないのに、「あたしたちみんなあなたのお友だちよ」と言っているように見える。登美は登美で、「地面にチンチンしている栗鼠チャン、あなたを抱きしめたい！」と、思う。

兎も十匹ぐらいいる。大きな耳を時々縦にして、遠くの音を聞くような格好をするのが可愛い。

小鳥たちもいろんな種類のがいる。思い思いに枝から枝へ自由に飛びかっている。けんかなんかしない。どれも美しい。

どの小舎の前でも登美の足は釘づけになるみたいだった。この小さな生きものたちがこれほど可愛いと思ったのは生れて初めてだ。一言も何もいわないのにこんなに自分を慰め、元気づけてくれる。これから毎日必ず会いに来るからねと、登美は小さな生きものたちに誓った。

四、再会

登美がここへ入って一ト月ほど経った頃この学園に大変なことが起った。寮生の脱走事件だ。それも登美のいる有島寮を挙げての脱走だった。事前に登美にも姉さん株から下話はあった。しかしそれは命令に近かった。登美には姉さん達が怖くてとても反対など出来ない。首を縦に振るよりほかはなかった。

それからの毎日は登美にとって胸を掻きむしられる思いだった。このことが実際に行われたとしたら、実先生も和子先生も気が狂ってしまうのではないか。何でも困ったことがあったら相談しなさいと言われているが、これだけは相談できることではない。佐伯先生にも相談したいけど手紙が出せない。

実行の日登美は直前に唯一人山羊小舎に逃げ込んだ。脱走に参加しないためである。初めから考えていた事だ。

計画は予定通り行われた。夜の十一時を期して、裏の雑木林のところの塀を、予め用意した縄梯子で越え始めた。そして最初の五、六人が外の地面を踏んだその時、一網打尽全員つかまった。

翌日から寮生一人一人からの事情聴取が血走った目の有島実先生によって行われた。登美も聴かれた。登美はありのままを答えた。

やがて学園にも再び平和が戻った。登美の栗鼠小舎通いは毎日続いている。事件から三週間ほど後、登美には外部との手紙のやりとりと来訪が改めて許された。初めの予定より一ト月も早い。

登美は第一番に佐伯先生に手紙を書いた。いちばん書きたいのは事件のことだけど、心配するといけないからやめておこう。有島実先生、和子先生がとても可愛いがって下さること、この頃は和子先生の夕食の材料の買出しに毎日お伴していること、それを仲間に妬まれていること、栗鼠たちが可愛いこと、山羊の世話をおうせつかったこと、できたらそのうちぜひ一度来て下さいなどと書いた。

折返して佐伯先生からいついつ必ず行くと返事が来た。

その日佐伯優子先生は本当にやって来た。学園では二人のために校舎の方の来賓室を当ててくれた。佐伯先生が先に入る。黒いドレスがよく似合う。窓の外の梅雨明けらしい緑が目にしみる。

やがて、白とグレーの制服を着た登美が入って来た。

「登美！」

「先生！」

いきなり登美は先生に走り寄って抱きつくかと、先生は思ったが、登美はそうしなかった。静かに先生と向き合うと丁寧に頭を下げて、

「先生、今日は本当にすみません」と言う。二人は立ったまま瞳と瞳を見合せた。待ちに待った二ケ月振りの再会だ。しばらく双方とも見動きする気配を見せない。このままでいつまでもいたいというふうでもある。

先生にうながされて、割合に低い小さな机を挟んで二人はやっとソファーに腰を下した。

「登美、変ったわねえ。大人になったわねえ」

先生のその声を聞くと同時に登美はワッと泣き出した。結局登美は最後まで泣っ放しだった。やがて激しく喋り出した。泣きながらの話だから、はたで聞いたらさっぱりわけがわかるまい。だが先生にはすべてが呑み込めるふうだった。

まず脱走事件のことから長々と喋り出される。先生には初耳のことだ。まさかこれほどまでのことがあったと

は。又、栗鼠たちが可愛くて仕方がない。このことだけは先生、どうしてもわかって下さいとも言う。これにも先生は驚く。中学校にいた時、こんなことを言う子ではなかった。又、実先生と和子先生の可愛いがってくれ方が佐伯先生とそっくりだと何回も繰り返す。

話を聞きながら先生は考えた。この子はもう大丈夫だ。自分たちが中学校で一年かかっても出来なかったことをこの学園は二ケ月で果してくれた。素晴しいことだ。先生は大きな安心をもって登美に別れを告げた。

帰りしな佐伯先生は登美から聞いた栗鼠小舎に立寄ってみた。成程可愛い。先生は栗鼠たちにそっと囁いた。

「栗鼠ちゃんたち有難う。登美を変えてくれた第一番の功労者はあなた方よ」先生は正門を出る時校舎を振返った。するとさっきの部屋の窓から登美が一生懸命こっちへ手を振っているのが見えた。

五、それから

それからの月日は登美にも佐伯先生にもとんとん過ぎて行った。丸二年の学園生活も間もなく終って五月に学校へ戻った。五月だから同期の生徒の卒業式はすでに済んでいたが、卒業証書は戻ったその日に校長室で校長から手渡された。これで林登美は立派に中学校卒業生だ。

それからも登美から先生によく手紙が来る。また遊びにも来る。だから登美のことは手に取るように先生にわかった。先生は一年家で勉強して東京の私立高校に入ることをすすめた。だが登美は人の髪をいじるのが好きだからそういう職に就きたいと言う。それも女の髪でなく、男の髪を扱う理髪店がいいと言う。やがて東京の親戚の世話で下谷の理髪店に住込みで入ったと知らされる。

その後の手紙によると調子は上々らしい。登実がその店に入って早くも五年ほど経ったある日、先生は東京へ出たついでに登美の働いている理髪店をのぞいて見た。その時登美は自分の髪に櫛をはさみながら、紳士の髪にウエーブをかけていた。登美はもういっぱしだった。

相変らず登美からよく手紙が来る。それによるとこの頃は東京のアパートから店に通っているらしい。また毎日毎日が楽しくてしょうがないとも言って来る。また友達に誘われてバレーボールのNチームの後援会に入ったそうな。又、そのチームで一番好きなのはS選手だとのこと。でもその選手の前へ出ると何も言えなくなってしまうそうな。

ごく最近先生の手許に立派な角封筒が届いた。開いて見るとS選手との結婚披露宴の招待状だった。そして来賓としてご挨拶をお願いしたいと言う。更に登美らしい字で、「でも学園のことは内緒ね。」と書添えられていた。

よくやる登美！　可愛い登美！

メガルさんの夏休み

柴田　保

七月に入ると、青空に太陽が終日輝き、きく組の前は、柿の木と大桐の葉が重なり合って、涼しい緑蔭をつくっていた。その下で青木先生は、子供の連絡帳にプリントを四つ折りにして、はさんでいた。子供たちは暑い日なたで、砂遊びに夢中だった。協同でつくったダムが完成し、どろ水であふれる頃は、どの子の手も足も顔までどろんこになった。青木先生はホースで水道の水を頭からかけると、水はシャワーになって、光の中で虹をつくり、子供たちは喚声をあげながら、虹の中をかけ廻った。

園庭のポポとぐみの葉蔭を半分占領して、プールが出来上るところだった。六個の鉄の横枠に四本のパイプをつなぎ、ボルトで締め枠組をつくり、ビニロンの防水布を入れて広げるのに二日、今日、内側を粉石鹸で洗い流したので、青白色のビニロン生地は、光を反射してまぶしかった。青木先生は、はだしになって、ぶ厚い布の折目を踏み直していると、まだ所々、水は溜っているものの、熱くなった布地をとおして、雑草のやわらかな感触が伝ってきた。

夏休みになると、幼稚園の水泳教室が始まる。去年はメガルさんと青木先生が指導をした。メガルさんはこの園で、園児のサッカーの先生になって二十年が過ぎた。最初子供たちが、彼にメガネザルとあだ名をつけてから、メガネザルはいつかメガルになり、今では本名よりも、園児や親しい人たちはメガルさんと呼ぶようになった。

ある新緑の五月、保育本から大型遊具も取扱う会社のセールスマンが、組立式円型プールを車にのせて宣伝に来た。保育用品の画一化には反対のメガルさんも、プールはコンクリートという既成概念を砕くこの円型プールがすっかり気に入ってしまった。そこで、その年の夏から、このプールで水泳教室を始めた。

メガルさんの中学にはプールが無くて、多摩川の等々力の岸の近く、流れに沿って二十五メートルに丸太を打

ち込み、水面から出た部分に横板を張った簡易プールをつくって泳いだ。彼は背泳なので、スタートの位置につくと、水の流れが強く、腕といわず、肩といわず、珠玉のように澄んだ冷たい水が、盛り上るように、ぶつかってきた。今の多摩川からは想像すべくもない。

メガルさんは大学に入ると水泳部に入った。学校の正門の真向いが三高だった。「一五〇〇で優勝した北村が三高の水泳部に入った」というので、その場にいた三人で、吉田山に続く暗い木立ちに囲まれた三高のプールに出掛けた。ちょうど水球の練習中で、その中にかっての北村久寿雄少年がいた。メガルさんは彼らの練習を見ているうちに胸がつまってきた。ロスアンジェルス・オリンピックの一五〇〇に優勝し、しかも四国の商業から、難関といわれた三高に合格し得た原動力は何だったのだろうか。もと来た道を帰りながら、三人はこのことを話し合った。そして得た結論は先天的に頭が良く、水泳に向いた素質を持ち、後天的に恵まれた環境があり、この両者によって強い意志力と体力がつくられたのではないか。

幼稚園の夏休みは子供のために設けたものだが、先生たちにとっても待遠しいものだった。予定では一学期のまとめや二学期の準備、夏期保育、それに自分のための研修と休み中でも忙がしいものだが、初めて都会の幼稚園に勤めた先生たちは、故郷に帰って、久しぶりに両親や家族、友人にも会うことができるし、かねて希望の長い旅行に行くことも出来た。

それだけにメガルさんは、水泳教室が先生の夏休みを犠牲にすることのないように考えていた。そこで参加者の父兄に脱衣室等の管理を頼んだ。最初の間は夏休みということで集合時間に遅れる子供も多く、その度に準備体操から見てやるので、既にプールに入っている子供たちの方が留守になり、ひとりではとても出来ないと、音を上げかけたが、父兄たちが、それこそ献身的に助けてくれたので、年々、要領もわかり、楽しいものになっていった。やがて、近くの幼稚園でも、夏の水泳教室を始めるようになり、参加者も増え、プールも七メートル×三メートルの角型にした。

夏休みも終わる頃、メガルさんはクモ膜下出血で倒れた。近頃は体調も順調で彼の言によると、若いの年寄りだのは年令によらない。ぼくは走らせても、泳がせても、たいていの二十代には負けない自信があると言っていた彼が、左半身不随になり、なおっても元の体力の八〇パーセントと医者に言われた時はさすがに深刻な顔だった。後遺症は左足先と、左指にしびれが残った程度できわめて軽かったが、その後の検査の結果、本態性高血圧にシンキンコウソクと診断され、何十年も縁が無かった病院に、二週間毎に通うようになった。そうして冬は過ぎ、病状もその後変化もなく、夏を迎えるようになった。メ

ガルさんは急に年をとったように白髪が多くなり、しわも増えてきた。もう水には入れないのだからと思っていた先生たちも、メガルさんが水泳教室の準備を再び始めたのには驚ろいた。こうなると、一人でさせておくわけにはいかず、相談の結果、新任の先生を一人、助手として、つけることにした。

水泳教室を始めて十五年、近所に建築中だったデラックスなスイミング・スクールが開かれ、続いて送迎バス付のスイミング・クラブが開業し、近隣の幼稚園児も行くようになった。「これで水泳教室の意味も無くなったわね」「メガルさんもゆっくり療養したらいいわね」と言う先生たちの声も聞かれるようになった。

こうした、いきさつも知らず、青木先生は、去年、メガルさんの助手になった。

去年は雨の日や寒い日が多かった。それでも水泳教室は盛況だった。メガルさんは大きなプールで、水に潜れた子供の指導、青木先生は小さいプールで、まだ潜れない子供の指導に当った。青木先生は前もって、プリントで「家庭で、洗顔の時を利用し、顔を水につけられるようにして下さい」と書いておいたが、第一日目が始まってみると、水面から十センチ平行に上げた棒の下を潜れる子供は少なかった。それでも友だちと一緒だと出来るもので、二日目には、ほとんどが潜れるようになった。三日目が来ても潜れない子供に「どうして出来ないと思う」と聞いてみると「疲れた」「眼がいたい」「水着がきつい」という答えが返ってきた。そこで、それぞれ子供の要求通りにしてから、棒の前にならばせた。棒をにらんだまま、動こうとしない子供の母親は、初めは「がんばって」と声援を送っていたが、しまいには「そんなことが出来ないの」と金切声をあげて怒った。メガルさんは「子供は今、弱い自分と強い自分が戦っているのだ。それで強い自分が弱い自分に勝った時、初めて潜れるようになる。これは幼児にとって大切な経験だと思う。それを叱ったりすると、せっかくの緊張をつぶすことになる。ただどうしても出来ない子供もいる。指導者は子供をよく観察して、子供が助けを求めているんだなと思った時は『よくがんばったね』と今までの努力を認めた上で水をかけると、潜れるようになるよ」と納得させてから、水をかけるようにする。不意に子供の頭を水中におしこんでも、潜れるようになるだろう。しかし自分で苦労し、自分の力で潜れたこととは大きな違いだと思う。

チーちゃんは年少組の子で遅生まれだった。触れると、こわれそうで、細い腕は、やっと水の抵抗に堪えているようだった。この子を水に潜らせるなんて、とてもかわいそうな気がしたが、〇才の赤ちゃんを泳がせている人もいるのだと自分に言い聞かせた。そこで森の池に住んでいる水おおかみの話を聞かせた。とんがり耳のこわい眼をして、大きな口から長い舌をベローンと出した水お

おかみが来ないうちに「先生と一緒に逃げましょう」とチーちゃんの小さい右手をしっかり握ると一、二、三で棒の下を潜った。水中をゆさ・ゆさと黒い髪と小さな白い顔が過ぎていった。まわりのお母さんたちはいっせいに拍手をした。

中村君は年長組の男の子だった。とても活潑な子だが、水とは合性が悪いのか二日たっても潜れないで、年長でただひとり潜れないグループに入った。ところが三日目になると不思議に潜れるようになっていた。お母さんの話では、昨夜、お父さんの帰りを待って、「潜るのを教えて」と一緒にお風呂に水を入れて練習したんですよ、と言う声もはずんでいた。

今年はまだメガルさんの助手は決っていなかった。Aさんはお父さんの仕事の都合で、幼稚園をやめるそうだ。Bさんは来年結婚とか、CさんとDさんは夏の研究大会の継続研究に出席の予定、からだが弱いEさんは二学期に備え、夏はゆっくり静養しなくては、あとは古い先生たち、というと青木先生だけになる。でも、こういうことは教務会ではっきりさせておかなくてはいけない。

「水泳教室で泳げるようになると、スイミング・スクールに行ってしまうの、どう思いますか」青木先生は、自分の胸の中の不満をメガルさんにぶつけているような気がして、悪いことを言ったかなと後悔した。

「私は小学生の時から、水を見ると泳ぎたくなるんです。ちっともうまくならなかったけれど、だから旅行先でも、海や川を見ると、なんとか都合をつけては泳いだものです。今でも、その土地の名を聞くとその時泳いだ水の感触を思い出します。なにしろ知らない海や川で泳ぐのだから、周囲や水の中に危険なものはないか。水のきれい、きたないが気にかゝります。そして岸辺に水と反対に向けて、はきものを揃えて置き、その上に衣類を抜いだ順に四角にたたんで重ね、最后に帽子を乗せるんです。雨が急に降ってもぬらさずにすむし、運ぶのにも便利です。それから準備体操を充分して、水にお願いしますと挨拶してから中に入ります。戦争中、武昌という所に駐屯していたことがあります。楊子江という大きな河をへだてて対岸は漢口という明るい、きれいな街で、日本租界にある時計塔がよく見え、風の具合で時計の鳴る音が聞こえてきます。夏の夕方、楊子江で泳ごうと、河岸に来てみると、河は赤土の岸の下をえぐって、渦を巻きながら流れていました。恐ろしくて、泳げなかった。その時、これが楊子江の水の姿だと思いました。電車で多摩川を渡ると、川は汚され、白い洗剤の泡がシャボン玉になって飛んでいます。人間に汚され、死の川のようになって、海に流れています。私たちが毎日飲んでいる水を、私たちが汚すなんて、どういうことでしょう。

子供にとって水は無限の遊び方を知っている世界一素晴らしい友だちです。ふだんなら、水いたずらと怒られるが、夏は水遊び公認です。輝く太陽の下で、黒ん坊になって思い切り水遊びができます。子供の時のこうした楽しい経験は頭の中の配線に組み込まれます。おとなは自分の幼い頃のことを思い出すことができない。それ故に幼い時は大切であるといいます。子供はおとなになり、昔の水遊びの記憶は無くなっても配線は残されています。そして水を大切にする心、自然を愛する心につながってくるのです。私たちの水泳教室の目的はここにあります。また幼児は基礎体力がないので、水から身を守るため、遊びをより楽しくするために、やれば出来るという自信を持つために、ふだん動かしている筋肉を使う、やさしい泳ぎ方のクロールを教えるといった程度で、鍛えるようなことはしていません。

メガルさんは、もうすっかり出来上ったプールのロープのはしを鉄枠に結びおえたところだった。

青木先生はバケツやデッキブラシを片付けながら、今年も早く帰れないと思った。「いいや、少しぐらい遅れたって」そして、駅の木柵にほっぺたをつけて、電車が着き、人を吐き出し、また人を乗せて出ていくのを見ているだろう小さな弟や妹それに犬のシロの前に、こんど買った黄色いワンピースで、サッと降りたらどんな顔をするだろうといった夢からそろそろ卒業しなくてはと思うのだった。

遅すぎた春

柴田富佐子

クリーニング屋から届いた冬物の中に、これまでの環なら決して身につけない色や柄があった。環は小さい頃から赤い色の似合わない子で、紺か水色、せいぜい淡いピンクやオレンジ色のものしか身につけなかった。色の白いふっくらした顔立ちの環には、そういう地味な色の方が似合いもしたし、職業に相応しい品格を与えてもいた。ところがどうだろう。ビニール袋から取出した洗濯物の中には、けばけばしいばかりの青竹色や、目を刺すような牡丹色のセーターがある。黄色と黒の派手な格子柄のスカートがある。真赤な花模様のワンピースがある。

何かおかしい、とさとが感じ始めたのは、それが最初だった。

二人きりの遅い夕飯を済ませて自分の部屋へ引揚げようとした環が、思いついたといった様子で引返して来た。

「明日から二階の掃除はわたしがやるわ」

「いいわよ。無理しなくたって」

「雨戸もわたしが閉めるわ」

自分を思いやって言っているのではないらしい声の調子に気付いて、さとは洗い物の手を止めた。

「掃除するったって、いつやるの。やる時間なんて、ないじゃないの」

いつも環は九時の診察開始時間ぎりぎりまで寝ている。環が食事を済ませ白衣を着る頃には、待合室には何人かの患者が待っている。

一度診察室へ入ってしまうと、夕方六時の終了時間まで殆んど休みはない。よくこんなに病人がいるもんだと感心するほど、患者は後を断たない。看護婦にはきちんと一時間の昼休みを与えているが、自分は昼食抜きの日も珍らしくない。体も使うし気も遣う。だからさとは、環をなるべく早く寝かせ遅く起すように気を配っている。

そんな環の生活時間のどこから、掃除の時間をひねり

出そうというのだろう。

ああは言っても、矢張りあたしがやってやらなくちゃ、と翌日もいつも通り二階へ上っていったさとは、環の部屋のドアに黒い南京錠がぶら下っているのを見て息を呑んだ。

それは、部屋へ入るな——という環の厳しい意志表示に外ならなかった。

その日、急に降り出した雨にさとは慌てて二階へ駆け上った。洗濯物を抱えて階段を下りる前に、いつもの癖で環の部屋のドアに目が行った。すると、いつもさとに向って赤んべえをしているようなあの苛々しい南京錠がない。深く考える余裕もなく、さとは走り寄って把手を掴んで廻した。押した。だが、把手は廻っても、ドアはごく僅か身を引いただけだった。二度、三度、ドアと押し較べをした。その都度、金属と金属のぶつかり合う乾いた音を聞くだけだった。内鍵がかかっている——という事は、中に人間がいるという事実を真直ぐ指差している。

目も鼻も口もない、男という字だけをべったり顔に貼りつけた人間の息遣いを、さとは感じた。

物干しに面して環の部屋の窓が開いているが、南京錠の出現と同時に窓のカーテンは厚地のものに変えられ、ガラスに目をこすりつけるようにしても、部屋の中の様子は見えなくなっている。しかし今は、ひっそりと息をつめて、物干しのさとの挙動を窺っている男の動静が、そのまばたき一つさえも、さとには感じとれた。部屋の中の空気のゆれが、厚いカーテンを通し、窓のガラスを突き抜けて、さとの心にはピリピリ響く。

さとは窓に向って突立った。見えない相手に真向うから対峙する積りであった。さとの気迫はガラスを通し、カーテンを通して男を圧倒する。男は顔をそむけて奥へ去る。

「ざまあみろ」とも言いたい勢いで部屋へ戻って来たが、さとの気持ちは重くなるばかりであった。

戦後のバラックからこの家を建て直す時に二階をアパートにして貸した。今は環が使っている六帖が二間で、廊下の片側に流しとトイレがある。鉄骨の外階段を下りるとすぐ裏木戸で外へ出られる。さとは手の空いた時、用のあるふりをして裏木戸を見張ったり、物干しへ上ってみたりしたが、男はいつ上りこんで、いつ下りて来るのか、その姿を見かける事は出来なかった。

買物篭からはみ出した野菜を手で押えながら歩いていたさとを、角の酒屋のおばあちゃんが呼びとめた。

「まあ、いつも孫が先生にお世話になって済みませんねえ」

愛想よく話しかけたおばあちゃんは、急に声を落した。
「誠に申上げにくいんですけどね。あの車」
と目で倉庫の前に停っている乗用車を示した。まだ買って間もないように見えるそのクリーム色の車に、さとも目を移した。
「あそこね、倉庫の前なんで、荷の出し入れに不自由しちゃうんです。何しろうちの荷はみんな重いもんばかりで、一寸の遠廻りも配達の若いもんがぶつぶつ言って」
さとはおばあちゃんが何故そんな事を自分に言うのか訝っていた。その表情に気がついておばあちゃんが言った。
「お宅のお客さんのじゃないんですか。この間からちょくちょく停っているんで、店の者がついていったら、お宅の裏木戸へ入っていったって言ってましたけど、ついさっき」
聞いている中に、さとの心は妙に弾んで来た。虫の知らせというものがあるなら、その時のさとの心の弾みはそれだった。あの車があるという事は、男が今環の部屋にいるという事だ。
せかせかと裏木戸を入ったさとは、野菜篭を階段の下に置くと、手摺りに体重を預けるようにして階段を上り始めた。ない。矢張り南京錠はない。
ドアと反対側のガス台に掴りながら、一歩一歩に気を配ってドアに近付いた。静かに把手に手をかけた。そろそろと右へ廻した。
と、ドアが不意にふわあっとさとの体を引いた。さとは把手を掴んだまま跪いてしまった。慌てて身を起しかけたさとの目と、物音に驚いて振り向いた男の目がぶつかった。
どうやって茶の間に戻って来たのか、さとには解らなかった。気がついた時は、さとは火鉢のへりを両手できつく握りしめていた。
「あっ」と大きな声を出したような気もする。転げ落ちそうな勢いで階段を下りて来たような気もする。その時にぶつけたらしく、左の向う脛に痛みが火照っている。
（男、あの男、あんな男）
その言葉はさとの頭の中で跳ね返り、ぶつかり又跳ね返って、際限なく谺し続けた。
背を丸め、息をつめて火鉢にしがみついたまま動かないさとの背後で、診察室のドアが開いた。軽いスリッパの音が近付いて来る。
その時になって、さとは急に環が怖くなった。さっきの物音で、環は敏感に事態を察したに違いない。だが、怒っているにしてはゆるい足音だと気をゆるめた時、
「今日はこれで失礼します。お先に」
看護婦の声であった。
看護婦が帰った後も診察室ではしばらく片付けているらしい物音がしていたが、やがて階段を上って行ったき

り、環は茶の間には来なかった。
厚く暗く垂れこめた雨雲のように、男の顔はさとの心に覆いかぶさっている。吐く息は力のない溜息ばかりであった。
（選りに選って……）
さっきから何度同じ呟きを繰り返したことか。あのクリーム色の若々しい車から連想した新鮮な若者ではなかった。さとが秘かに願っていたような、環に相応しい地位と容貌を持った男でもなかった。
男は環が嘱託医をしていた近くの観光会社の運転手である。疲れたからと言って仲間と連立って男が栄養剤を注射しに来た帰りがけに、診察室のドアがうまく閉らない事があった。
男は屈み込んで下の方の蝶番を調べていたが、
「ねじ廻しを貸して下さい」
とさとに言い、見てる間に直してくれた。
「へえ、あなた見かけによらず器用なのね」
子供が珍らしい玩具を目の前にした時のような好奇心を露わにした顔付きで環が言った。
「ええ、まあこういう事、割と好きなんです。ほかにこわれた所があったら、時間がありますから、今直しますよ」
さとは裏口のガラス戸の滑りが悪いのを想い出した。男は気安く裏へ廻り、ガラス戸を外して戸車を見た。
「一寸待って下さい」
と姿を消したと思うと、戸車を二つ買って来て取替えてくれた。男が戸を押すと、戸は気持ちよく走った。
「まあ驚いた。あなたって魔法使いみたい」
環は大袈裟な声を出した。その後も環は、薬局に棚を吊ってくれの、郵便受を取付けてくれの、と男に頼み、その都度男の靴下やシャツを買って与えていたが、男の勤める観光会社が、広い駐車場を求めて郊外へ移転したのをしおに男は姿を見せなくなった。さとは男の名前すら忘れていた。
古い出入りの製薬会社の外交に
「おくさん、元気ないねえ此頃、どっか悪いんじゃないの。先生によく診て貰ったら」
と言われるほど、さとの表情は冴えなかったし、動作は鈍くなった。空気を一杯に吸い込んで膨らんでいた風船の頂に、針の先程の穴があいてしまったように、いくら力んで空気を送りこんでみようとしても、さとの気持ちは膨らまなかった。力めば力むほど、その小さな穴から洩れるスースーという音の佗しさが身に染みるばかりだった。
毎日の生活に支障をきたさないだけの家事を済ますと、さとは茶の間に坐りこんでいる時間が多くなった。

「此頃、お母さんがちっとも見えませんね、って患者さんによく聞かれるんですよ」
男の事を知っているのか知らないのか、看護婦が屈託のない声で言った。
環の留守に診察室へ入って保険証を調べたら、確かに男には妻も二人の子供もいる。新聞の社会面に三角関係が原因で起きた刃傷沙汰の記事を見ると、さとは冷たい手を首筋に置かれた時のような心の底から湧き上ってくる震えを止めることができなかった。いつかこれと同じ事が環にも起る。興味本位に書きたてられた記事の上に、まるで磔にされたように、環と男の写真が並ぶ。
黙っていてはいけない。母親として、どうしても一度はっきり環に言っておかなければいけない、とさとは思った。
「奥さんも子供さんもいるんでしょ。どうする気なの」
環は目をあげてさとを一瞥しただけで又箸を動かした。
「家族をきちんと始末して、あんたと一緒になるっていうのなら、それはそれで仕様がないと思うけど」
それでも環は何も答えない。
「いつまでこんな状態が続くと思ってるの。向うだって黙っていないだろうし」
環は箸と茶碗を同時に置いた。
「お茶頂戴」
さとが急須に湯を注いで押してやると、環はゆっくりと茶碗に茶を注いだ。太々しくさえ見えるその落着いた動作が、さとを苛立たせた。
「旦那さんを盗られて、黙っている奥さんはいないのよ」
「大丈夫よ。お母さんが心配する事は何もないわ」
「なんで大丈夫なの。訳を聞かなきゃ、あたしは心配で心配で夜もろくに寝られやしないのよ」
「だって、何も迷惑をかけていないもの。給料は全部家へ入れているんだし」
「お金の事だけじゃないでしょ。気持ちの問題よ」
「気持ち。それは無理よ。人の心までどうこう支配する力は、誰れにもないわ」
環は立上った。
「とにかく、余計な心配しなくたっていいのよ。誰れにも迷惑はかけていないんだから」
「あたしにこんなに迷惑かけといて」
腰の廻りに肉がついて一周り大きくなった後姿を見せて、環は二階へ行ってしまった。
環は月の初めの日曜だけは、健康保険の請求書を書かねばならないので家にいるが、それ以外の日曜は殆んど家を空けるようになった。
土曜の診察を一時には終らして、どこへ行くとも告げ

ずにそそくさと出かけてしまう。
「何かあったら困るから、行先だけは言ってってくれないと」
最初の二、三回は、さとも環の背に声をかけた。
「あとで電話するわよ」
男が手繰っている糸に引摺られるように出て行ってしまう環に、さとは諦めて何も言わなくなった。何を入れてあるのか、焼きたてのパンみたいに膨らんだ赤いチェックの旅行鞄だけが、さとの目に残った。
出掛けた晩の十時頃に決って電話をして来る。
「何か変ったことなかった」
「別に」
「そう、じゃ明日の夕方帰るわ」
それだけで電話は切れてしまう。
「先生どこへおでかけですか。昨日きれいなクリーム色の車にお乗りになっておでかけになるの見ましたけど」
そういった問いが、患者の口から再三さとの耳に入って来た。環に男が出来た事は、近所の人々の噂になるだろう。世間の奥さん達というものは、男女間の不道徳に対しては厳しいものである。環の不道徳は、忽ち非難の渦を巻き起してさとの耳に雪崩れこんでくるだろう。さとは外に出て人に会うのがうとましくなった。買物はなるべく人の集らない時間に済ますように心掛けた。
土曜の午後というと、環がうまく近所の人の目に触れずに出掛けてくれるようにと祈った。そんなさとの気持など知らぬげに、環は修学旅行に行く女学生みたいな弾んだ足取りで出掛けて行く。
さとが嫌味を言わなければ、環は土産物を出した。車で四、五時間位の温泉場の土産品が多い。いつも自分一人だけが中央に写っている写真を、その背景の景色を説明しながら見せてくれる事もある。これまで殆んど旅行らしい旅行もできなかった環は、初めての場所を訪れる楽しみを抑えきれない様子だった。
その説明に
「ふん、ふん」と頷きながら、さとはその写真を写した男の事は考えまいと、懸命に怺えていた。
戦中、戦後の物資不足の時代に幼年期を送り、少女時代からは勉強、勉強のあけくれであった。国家試験も通り、病院勤めを始めると、今度は開業の準備であり、開業すればしたで一日中患者の相手である。ようやく基盤も固まり、生活に余裕ができた時には、環は三十九才になっていた。世間並みに身を装う事も、目を楽しませる事もせずに過して来た環を、さとはそういう事に全く興味を持たない娘と思っていたが、それは誤りであった。
環も並みの娘心を持っていた。ただ開業医として一本立ちするまではと、無理にも自分を抑え込んで、真直ぐに突き進んで来たに過ぎなかったのだろう。学生時代、勤務医時代のいくつかの恋愛が実らずに終ったのは、そ

うした環の自制心の強さに由来していたに違いない。最後のふんぎりがつかないままに時が過ぎ、男が去り、環は男を失った事で、又一段と自制心を強くして来たのだろう。

案じていた近所の噂は、さとを脅かす程の事もなく、さとは土曜の午後から日曜の夜まで一人でいる事に慣れた。長い日曜の一日は、大方テレビを見ながら針を運んだ。縫い物がなくなると、さとは押入れから古い行李を引出し、さまざまな裁ち切れを取出した。その一枚一枚に、夫の、幼かった頃の環の、若い頃の自分の姿を重ね合せながら、配色と大きさを考えてはぎ合わせ、一枚の大きな布に縫いあげた。それに額縁の裏をつけて掛布団に仕立てた。まるでこれまでの自分の人生を綴り合わせたようなその布団にくるまって寝ると、不思議と心が和み、昔を想い出した。環の事よりも、夫との想い出の方が多かった。

夫とは遠い縁続きである。伯母から夫との話を持込まれた時、さとは東京へ出られるという事だけで乗り気になった。体は少々弱いが、気持ちのやさしいおとなしい男だと聞いて心を決めた。

さとが嫁入って間もなく、姑は脳溢血で倒れた。お姑さんの看病のために嫁に行ったようなものだと、伯母は気の毒がってくれたが、僅かな期間でもさとを実の娘のように大事にしてくれた姑が好きで、丸五年間心を尽して看病した。慣れない商売と姑の看病とで、新婚の甘い夢を温めるゆとりは、身体的にも時間的にもありはしなかった。いつも次の用事に追いたてられているような生活であった。

姑が静かに逝って、ようやく親子三人の生活になった頃には、さとは夫に替って店をとりしきる雑貨屋の小母さんになっていた。さとが店の仕事にかかりきりになった分だけ、環の世話は夫の仕事になった。夫は環を「俺の宝物だ」と言い、男とは思えない小まめさで環を慈しんだ。外出すると、「頭が痛い」と青い顔をして帰って来て、二、三十分横になる夫が、環が学校から帰って来れば、その顔を見ただけで頬に赤味がさす有様だった。

嫌がる夫を環と二人で無理に病院へ連れて行って診て貰うと、心臓だけでなく、腎臓も悪いと言われた。その中朝起きた時の顔や足のむくみが次第にひどくなり、入院して注射と薬の治療が続いた。

アメリカとの戦争が始まる直前に、夫は病院のベッドで息を引取った。生命の火が消えると共に、それまでの全身のむくみが少しずつ引いて、気がつくと病み衰えた男の体に変っていた。

朝から重たい雲が垂れこめ、空気まで湿気を含んで鉛色に淀んでいるような梅雨時のせいでか、その朝も環は

「食べたくない」

と食事をとらなかった。お昼に冷たい桃を一つ食べたきりで、夕飯も箸がすすまない。

「食べたくなくても食べなくちゃ、体がもたないわよ」

「大丈夫よ、注射打っとくから」

大儀そうにお膳に片手をついて立上った環は、診察室へ戻っていった。さとには思い当る事があった。しかし気安く口に出せる事ではなかった。環自身、もう自分の体の変調に気付いているとしたら——そう思いついた時、さとは「大変だ」と心の中で叫んだ。折角身篭った子を、私の大事な大事な孫を——洗い物を抛り出してさとは馳け出した。診察室のドアをノックもせずに開けて中へ飛込んださとは、振り返った環の冷たい目に射すくめられた。

「入る時は、ノックぐらいするものよ」

「だって……」

環は腕から抜いたばかりの注射針を外して消毒器の中へ入れた。まくりあげた左の二の腕に、青紫の痣があった。肌が白いだけに、その色は鮮烈であった。さとは胸がドキドキするばかりで、うまく言葉が見つからなかった。

「どうしたのよ。何かあったの」

「その痣……」

「薬が洩れただけよ」

袖を下しながら、環はもう一度さとを見た。

「何か用なの」

「……」

「用がなかったら、あたしはまだ仕事があるから、あっちへ行っててくれない」

環はさとに背を向けて腰を下した。白衣のその後姿が、さとには悲しみを訴えて泣いているように思えてならなかった。

椅子を半回転させて環はさとと向き合い、じっと涙ぐんださとの目を見つめていた。

「いいのよ。心配しなくたって」

その声のやさしさに誘い出されたように、さとの涙は溢れ出た。

「やあねえ、泣いたりして……早く寝なさいよ」

「まさか、環さん、殺したりはしないでしょうね」

「……」

「ねえ環さん、あんたの子ならわたしにとっては大事な大事な孫なんだからね」

「何言ってるの、あたしはひとり者よ。子供なんか産める訳ないじゃないの」

「世間が何て言ったって構わない。わたしが育ててあげるから、わたしの子にしたっていい」

「まさか、お母さんいくつだと思ってるの。いいのよあたしの事はあたし一人でちゃんと仕末つけるから、心配しなくたっていいのよ」

環に押出されるようにさとは診察室の外へ出た。環を医者にするのと引替えに、諦めた筈の孫であったが、環の妊娠を知った一瞬を境に、さとの胸には孫の存在が幸福をよぶ女神として入りこんでしまっていた。

あの確かな手応え、しっとりしたぬくもりを、この手に抱きとりたい。喉の奥がひりひりする程に、小さな女神を抱きしめたいと思った。

患者や近所の人々には、病気で入院したと偽って、環はどこか、そう田舎の家でもいいし、それが嫌なら全然知らない土地を探してもいい。環はそこで子供を産む。産んだら環は帰って来て、入れ替りにさとが行って子供を育てる。半年、いや一年か一年半経った頃、養子を貰ったといって帰って来ればいい。

秘密はいつかどこからか洩れるものかも知れないし、子供の顔が環にそっくりだったら人々は一目で悟ってしまうかも知れない。しかし、知れたって構やしない。日が経ってしまえば、それはそれで人々は認め、秘密は秘密でなくなる。要するに、環のお腹の大きい姿さえ人目にさらさなければいいのだ。環が身を隠している間の半年や一年間、収入がなくたって何とかなるだけの蓄えはある筈だ。足りなければ、借金したっていい。三十九才という環の年令を考えれば、最初で最後のチャンスとも言えるこの機会を外したら、わたしは孫の顔を見られずに死ななきゃならない。夫と自分の血が、いや環の血が残せる最後のチャンスなのだ。

寝つかれずに夜を過したさとが、明方になって深く寝入ってしまい、目を覚した時は、いつも起きる時間をとうに過ぎていた。

「ああ大変、寝坊しちゃった」

少し手を抜いて掃除を済ませ、朝食を整えて環を起こそうとインターホンのボタンを何度押しても、環の部屋からの応答はなかった。

（しまった……）

さとは階段を馳け上った。環の部屋のドアには、あの黒い南京錠がアカンベーをしていた。すぐに階段を馳け下りて表へ廻った。と、恐れていた通り、玄関のガラス戸に、「本日休診」の札が下げてあった。

何でも自分一人で処理しようとする環への怒りは、持っていき場がないだけにさとの胸の中でいつまでも煮えたぎっていた。時間になっても看護婦は来ず、患者も姿を見せない。片付いた診察室の、昨夜環が坐っていた椅子に腰を下してしまうと、もう立上る気力はなかった。

孫はいっときの幻であった。今頃はどこかの産婦人科の手術室の片偶に置かれた汚物入れに、他の汚物といっしょくたに抛り込まれているのだろう。

体内から押し出された次の瞬間に上った力強い初声を、さとは今でも覚えている。

「女の子だよ」

と言った産婆の声、初湯をつかわせる慌しい動きを遠くに感じながら、引摺り込まれるように寝入ってしまい、夕方目を覚ました時には、初着を着た環が傍の布団に寝ていた。

初めてその頬に触れた時の、あの温かさ柔かさ、いとしさにひかれて過ごして来た三十九年であったと思う。

うっすらと涙ぐんださとの目に花瓶のドライフラワーが写った。酔芙蓉の花が散った後に、綿の実ほどの実が成ったのをそのままにしておいたら、からからに乾いた。

葉は落ちて、長い茎の先に飴玉みたいについた実を、環は面白がって花瓶にさした。実は開いて種をこぼすこともなく、半年以上も同じ姿で環の机を飾っている。珍らしがった患者に「これなんですか」と最初の中はよく尋ねられたが、すっかり部屋の一部になりきった今は、だれも気にしなくなっている。首の折れた一本をついと抜くと、その衝動で折れてた首が机に落ちた。乾ききった実は、さとがつまみあげただけで指の形に凹んだ。その凹みに又指を当てて、今度は強く押すと、実は大きく口を開けて二つに割れた。思いがけず小さな黒い種が、一列に並んでいた。

さとの目に又涙が溢れた。

孫を抱けない自分より、身篭った子をその手に抱きとれない環の方が、どれほど辛いか。一人で冷たいベッドに横たわっている環の心細さを思うと、哀れで哀れでさとの涙はとめどなかった。

この苦い経験から、環があの男と切れる決心をしてくれたら、今度こそ本気になって環に相応しい男、少くとも身篭った子を正常に環の手に抱きとれる男を探してやろう。もし男が望むなら、環は医者なんか止めてもいい。あたしは元の雑貨屋の小母さんに戻って、一人で暮してもいい。それで環が倖になれるなら。今度の事は、その倖への捨石にしなくてはならない。

あの男との事を知ってから半年近い間、うつうつと晴れなかったさとの気持に、ようやく一条の光が差し込んだようであった。環がこれをしおに、男から離れるのは、もう規定の事とさとには思えた。全身の糸を一纏めに、きゅっと引張りあげられた繰り人形のように、さとの弛緩していた体が、勢いよく椅子から立上った。

「こうしちゃいられないよ」

手早く外出の支度をしてさとは家を出た。近くの菓子屋で手土産を整え、さとは古い友達の直木を尋ねようとした。

直木の娘は環と小学校が一緒だった。

「あんまり出来のいい娘を持つと、楽しみも大きいだろうけど、気苦労も多いわね。家のみたいに平凡な娘の方が、嫁にやっちゃえば親の責任は果せるんだから気楽でいいわよ」

直木がそう言った娘は、高校を出ると二、三年家にい

て型通りの見合いをし、会社員と結婚した。子供が小さい頃は、風邪をひいたの、怪我をしたのと、よく環の所へ来ていたが、小児科を卒業してからは、忙しさにかまけて滅多に顔を見せなくなっている。

環は違う。子供を生んで育てるだけの娘とは違うのだ――それがさとの長年抱いて来た誇りであった。だが、今のさとには、その誇りすらどうにも空しく思えてならなかった。

三人の子と夫に囲まれ、確とした妻の座にどっかり腰を据えている娘と、身篭った子を葬らねばならない立場の環と、どっちが倖といえるだろう。女の倖せとは、所詮平凡な結婚にあったのだろうか。直木が、

「環さんにどうかしら」

と、あの話を持って来たのは昨年の秋だった。或る大手メーカーの部長さんで、五十を二つ出ているが、子供はいない。一緒にいるだけで楽しくなるような人だという。

「正式な写真じゃないけど」

と言って見せられたスナップ写真には、太りぎみの男がゴルフのクラブを振り上げて笑っていた。

「主人のゴルフ友達なのよ。三年前に奥さんが亡くなって、ずっと一人なの。年は少し離れているけど、若くみえるでしょう。いい人よ。まだ聞いてはみないけど、この人なら、きっと環さんがお医者さんを続けてもいいって言うと思うわ」

その時のさとは、まだ環とあの男の事を知らなかったから、

「今更結婚して、男の御気嫌とるのなんか面倒臭くてやだわ」

という環の言葉を素直に信じていた。実際さとには、環が男の顔色をみいみい男の為に料理を作ったり、洗濯をしたりという事が、できようとは思えなかった。だから直木にも、そう言って断った。いささかの未練もなかった。却って直木の方が、

「本当にいいの、断って。こんないい人そうざらにいないわよ。環さんだって、もうじき四十でしょう。一つの違いだけど、三十台というのと、四十というのでは、随分受けとり方が違うものなのよ。最後のチャンスだと思うけど」

諦めきれないといった顔をした。

直木の家まで電車とバスを乗り継いで一時間はかかる。その時間が惜しくなって、さとはバス停前の赤電話に飛びついた。

「あら、しばらくね。どうしてたの。ずっと音沙汰無しだったじゃないの。元気」

直木ののんびりした口調がもどかしく、さとは勢いこんで尋ねた。

「あの、いつかの人、あの人、どうした」

「いつかの人って」

「ほら、忘れちゃったの、いつかの人、環にどうかって言ってくれた人よ」

「ああ、泉さんのこと」

「どうした、あの人」

「どうしたって、この春に結婚したわよ」

「……」

「どうしたのよ、藪から棒に」

さとには答える言葉がなかった。期待が大きかっただけに、突き落された奈落の底は深かった。

（あたしのする事は、どうしてこういつも後手後手になってしまうんだろう）

「だから言わないこっちゃない。あの時あんなに断っていいのって、念押したじゃない。あんな条件のいい人、その気になればいくらだって相手はいるのよ……」

言われないでも、直木の言いそうな事は判っている。

「ありがとう。じゃ又ね」

さとは受話器を置いた。

惨めだった。どうしようもなく気持ちが沈んで、じっとしているとその場にしゃがみこみそうで、さとは全身の力を足にかけるようにして歩いた。やっとの思いで家の前まで辿りつき、改めて「本日休診」の札を見つめていると、前の花屋の小母さんがいつの間にか、さとの後ろに立っていた。

「先生どっかへおでかけ」

「ええ、まあ」

さとが曖昧に答えると、小母さんは太った手でさとの肩を小突いた。

「しっかりしなよ、あんた。先生いい人できたんじゃないのかい」

自信あり気な小母さんの表情が、さとの垂んでいた神経をきゅっと引締めた。頬の強ばるのが自分にも判った。

「隠さなくたっていいよ。よく来てるあの人、先生の旦那だろう」

「そんな」

「早く一緒にしてやんなよ。いくら偉くたって、先生も女だもの、男が欲しい年頃なんだよ」

笑い声の派手な人だった。さとは外の誰れかに聞かれたら困ると、そればかりが気になった。

まだ雑貨屋の店に坐っていた頃、店を空けられないさとのために「残り物だけど仏様に」と言って花の束をもって小母さんはよく話しに来た。体も声も大きいこの人は、気持ちも男のようにさっぱりしていて含む所がなかった。姑や夫の葬式の時など、田舎出で町内に馴染の薄いさとをかばって、細かく手伝ってくれた。三日とあけずに行き来して世話になったこの人に対してさえ、身を構えずにいられなくなったのは、さとが「雑貨屋の小母さん」から「先生のお母さん」に変った日からであった。

心を開いて話し合える味方を、自分から捨ててしまっていた事にさえ、さとは今まで気付かずにいた。小母さんに何もかもぶちまけて、どうしたらいいだろうと縋りつきたい気持ちが激しく動いた。

「結婚させたくたって、結婚出来る相手じゃないのよ。孫が欲しくたって、子供の産める立場じゃないのよ」

小母さんに、こう叫べたら、どんなに胸のつかえがすっきりするだろうかとさとは唇を噛んだ。

翌日は日曜であった。昼近く起きたさとは食事の支度を整えて待っていたが、環はとうとう下りて来なかった。さとも食欲のないまま夕方までぼんやりテレビを見ていた。お茶が欲しいと言って環が入って来たのは、夜になってからである。まるで十代の女学生が着るような赤と白の水玉模様のネグリジェ姿の環は、冷えた掌を温めるように両手で湯呑みを包み、立上る湯気に頬を埋めていた。

「どう、体の具合は」

一日で上瞼が窪み、はっきりした二重瞼になっている。

「何か食べないと、力がつかないわよ」

答える代りに環は口元だけで微笑んだ。

生まれてからずっと、ついこの間まで環はさとの縫う単衣だけを寝巻にして来た。夏は浴衣、冬はネル地の単衣が、いつの間にかネグリジェに変っていた。寒い間は、テレビに出てくる女優みたいなガウンさえ着ている。頭にナイトキャップを被り、袖口や胸元にピラピラのついたネグリジェを着た環は、浴衣の衿をきちっと重ねて、伊達巻をきゅっと締めていた環とは別の人間としかさとには思えない。男の手が、さとの植えつけた習慣を一つ一つ環の身からもぎとっていく。環の中味も又、それにつれてさとが親しみ信じて来た環とは遠く離れていく。

とうとう環は四十才になった。例年通りさとは環の好きな五目寿司を作った。生クリームがたっぷりかかったショートケーキも買った。看護婦は

「わあ、凄い御馳走ですね」

と寿司を食べ、すぐショートケーキにも手を伸したが、環は寿司を三分の一ほど食べただけだった。

「こんなに生クリームのかかったケーキなんて、見ただけで太りそう。わあーやだ」

下っ腹を両の掌で押上げるようにして環は言った。

「先生、中年ぶとりですよ」

「そうね。きっと。やあねえ」

看護婦と二人、笑いながら診察室へ消えた。

そういえば、環の特に腰の廻りが太くなった。くしゃみをしたら、とれちゃった、と言ってスカートの釦を、つけといて、とおいていく。入らなくなっちゃったからあげるわ、作って間もないスカートを看護婦にやったり

している。女を捨てた時のまま、中年太りもせずに来たさとは、環の体に男の息遣いを感じずにはいられない。此頃では環の下着に手を触れるのも疎しく、投げ込むように洗濯機に抛り込んでいた。

環は旅行をしなくなった。日曜毎に、朝からデパートへ行くと言って出掛けるが、夕方疲れた顔で帰って来る環の両手には、二、三の食料品が抱えられているだけであった。

「なに探してるの」

さとは目的の物がなくて買って来ないのだとばかり思っていた。

或る日曜の朝、環は、

「悪いけど、一寸手を借して」

とさとを二階へ呼んだ。

「どうしたの、一体」

通りに面した方の部屋は、一人で運べない洋服箪笥や整理箪笥、三面鏡などが残されているだけで、押入れまでがきれいに片付けられ、その分の荷物が物干し側の部屋に運び込まれていた。

「悪いけど、持ってくれない」

環に促されて、さとは訳も判らず環と二人で残された大きい荷を物干し側の部屋に運び込んだ。抜き出した抽斗には、衣類が半分も入っていない。

「どうも有難とう。後は一人で出来るからいいわ。有難とう」

さとが問いかけるのを避けるように環は空っぽになった方の部屋に、大きな音をさせて掃除機をかけ出した。

昼過ぎ、小型トラックが家の前に止ったと思うと、男の声がして裏のガラス戸が開いた。

男の後に、二十をいくつも出てないと思える娘が立っている。

「遅くなりました。紀川です」

環を呼ぼうとさとが階段を上りかけた所へ、環が下りて来た。

「お母さん、こちら紀川さん。ほら、患者さんの紀川さんの姪御さんよ」

とさとに言い、娘には

「さあ、どうぞ、きれいに片付けてありますからね」

と笑顔を向けた。運送屋の男と娘とは、階段を何度も往復して荷を運びこんでいた。環は自分を捨ててどこへ出ていく積りなのだ。

下唇が小刻みに振えて止らない。

一言の相談もなく、勝手に出ようとする事も許せなかったし、他人を家に入れる事も許せなかった。

階段の物音が変った。上る時に重く、下りる時に軽かった足音が、逆になった。一段ずつゆっくり下りてくる

のは、環の荷を運び出しているに違いない。
（意地でも出ていってやるものか）
さとは裏口の方へ背を向けて坐っていた。
「じゃ、お願いしますね」
という環の声と、
「御苦労様でした」
という娘の声が重なって聞えた。トラックの走り去る音がして、二人は茶の間に入って来た。
「紀川さんはね、昭和商事にお勤めしてるの。真面目でやさしい方だから、仲良くやってね。お母さん」
穏かな言い方だが、環の声には有無を言わさぬ強い響きがあった。
「宜敷くお願いします。できるだけ御迷惑かけないように気を付けます」
娘は丁寧に頭を下げた。顔も体も小造りな娘は、いかにもやさし気だった。
さとはもう諦めていた。環はいつも自分のしたいようにする。これまでもそうして来たし、これからもそうするだろう。いつだって、わたしには一言も相談しない。自分のする事は、何でも一番いいと思いこんでいる。わたしはいつも従うだけだ。
娘が二階へ上ってしまうと、環は声を低めて言った。
「部屋代はお母さんのお小遣いにあげるわ。よく気のつく親切な人だから、あたしなんかより、よっぽど頼りになるわよ」
「そう」
「診察時間までには必ず来るから、心配しないでいいのよ。何かあったら、電話、これ」
電話番号を書いた紙切れを茶袱台に置いた。
「じゃ、あたしは片付けなきゃならないから、今日はこれで帰るわ。戸締りに気をつけてね。じゃ、お休みなさい」
帰る、って、ここはもう今日から自分の家じゃないって言うの――四十年住み慣れた家を去るというのに、何とあっけない別れであろう。親と子なんて、こんなにあっさり別れられるものなのだろうか。
環には、一片の感傷すらないように見える。男との新しい生活が、そんなに嬉しいのだろうか。
薄情者――今のさとに、環に投げつける言葉はこれしかなかった。机の上の紙切れに記された電話番号は、ここと同じ局番だった。そう遠い所ではなさそうだ。小型トラックが運んで来た荷を、運転手と一緒に部屋に運び込んでいる男の姿が、一瞬想い浮んだが、さとはねじ伏せるようにその姿を消した。
もう考えまい。何も考えまい。
環はわたしより、男を選んだのだ。余り突然の裏切りに、さとは怒りより驚きの方が強かった。ひどく体中が疲れていた。ただ寝むりたかった。目を瞑りたかった。

夕飯も食べずに布団を敷いた。横になってから戸締りがまだだったと思った。
診察室で電話が鳴っている。
何故か環からのものに違いないと思った。
出たくない。出てなんかやるものか。
ベルのけたたましい音を背に、さとはわざとゆっくり鍵をかけていた。と、娘が階段を馳け下りて来て診察室へ入った。
「お母さん。先生のお母さん。電話ですよ」
よく通る娘の声が呼んだ。電話は矢張り環からであった。
「はい」
不気嫌をそのまま声にしたようにさとは答えた。
「御免ね」
出て行った時とは打って変った環の声の調子に、さとは受話器を握り直した。
「もしもし、環さん」
応答はなかった。得体の知れない悲しみが、さとの胸に拡がっていた。
何も言わなくてもいい。あんたのする事はみんな許してあげる。これまでだって、いつだって、わたしはあんたの味方よ。
環へのいとしさが、息苦しいほどにさとの胸を締めつけた。環の声が掘り起した胸の中の火種を、大事に抱え込むようにさとは両手を胸の前に合せた。小さな火種ではあっても、そのぬくもりで、十分さとの心は暖まっていた。

連載

ハイラル挽歌（三）

序章　前夜

金子正義

（三）

国境に集結中のソ連軍は日毎に増強され、何時アラジンの怪物となって忽然巨大な姿を出現させるか判らなかった。だがハイラルの街も東丘陵一帯を占める二十粁四方の広大な軍事施設も無気味に静まり返っていた。尤も広大な地域に散在する旧二十三師団在駐当時の砲兵隊、兵器廠、糧秣廠、病院等の軍事施設には人影も無く、夏草の中に大きな建物ばかり無気味に残っているに過ぎなかった。師団揮下の各連隊の屯営も何処もガラ空で、最少限度の留守隊、司令部要員、特殊勤務者、虚弱者がいるばかりであった。ハイラル防衛の直接部隊である混成第八十旅団は既にハイラルを囲む東西南北の山々の防衛陣地に入っていた。

菊の紋章も厳めしい堂々たる煉瓦造りの師団司令部には僅かの司令部要員と八十旅団要員が勤務していて、時折り開嶺の新陣地に移駐した師団本部より塩沢師団長が一柳参謀等幕僚と車を飛ばして連絡に来た。野村八十旅団長は未だ、ハイラル防衛河南台第二陣地の地下壕にある戦斗司令部には行かず師団司令部内に留まっていた。

ハイラル防衛の山々の陣地は半永久的ペトン陣地で、従前より構築され要塞化されてあったが、防衛部隊は堅固な永久陣地の前方に対戦車壕、蛸壺壕を主とする前進陣地を更に構築していた。ソ連進攻の際はハイラルは助攻遊撃作戦の拠点となる作戦の変更からであった。防衛部隊は陣地構築と併せて毎日対戦車肉迫攻撃の訓練を行なっていた。原始的な上龍作戦と中世的な肉弾突撃の訓練は滑稽であったが、現地召集の補充兵の教育は焦眉の急でその訓練は凄じく真剣であった。此の肉迫攻撃は曽ってのノモンハン事件当初は相当の戦果を得たが、ソ連軍は直ぐ投擲火焔ビンに対応して戦車の鉄甲板を厚くしたので効果が無く日本軍は破甲爆雷を考案した。重さ約十粁の爆雷を両手で抱え込み発火させて戦車に体当りして爆破するのである。文字通りの肉弾突撃で空の特攻隊に匹敵する悲壮な人命を無視した戦術であった。肉迫は一個分隊十二名が約百米四方に分散し、分隊長を中心として二十米間隔で蛸壺を掘り、上を枯草で凝装し、各自は爆雷を抱えて蛸壺に潜伏する。予備の蛸壺も一人一個所は掘って各壕は連絡壕で繋ぐ、敵戦車が此の潜伏陣内に進んで来ると、分隊長の命令で右より一番、続いて左二番、右より三番という具合に突進して、戦車砲、重機関銃の間断二秒の間に戦車に飛び掛かる、蛸壺より飛び出して未だ戦車と距離があれば、匍匐前進、尺取虫進行で戦車に近づいて一挙にパッと突入するのであった。

補充兵達は絶対に生還し得ないこの肉迫攻撃の訓練に絶望的な気持をいだいて、重作業の壕掘りと違って肉体の酷使より精神の緊張と不安で毎日が斃れんばかりの疲労であった。朝に夕に時には夜半にまで反覆する訓練で、もう生きていることが苦しく、早くソ連軍が進攻することを望む程であった。

七月に入って間もなく開嶺で陣地構築中の反田中尉が旅団司令部に連絡に来た。長時間二階の旅団長室で旅団参謀の原中佐、前原大尉等司令部将校と連絡協議していたが、午后元気よく階段を駈け降りて、階下の一隅で執務していた宮坂小尉の机に来ると、

「おい宮坂、俺と一緒に明後日開嶺へ戻るぞ、直ぐ準備しろ」

と言って隣席の椅子を引き寄せて腰を下して、

「愈々状況は切迫したぞ」

と笑い乍ら煙草に火をつけた。宮坂少尉は司令部勤務前は反田中尉と同じ第二大隊勤務であった。豪放磊落の反田中尉は宮坂の故郷沖縄に近い鹿児島出身の縁もあって宮坂とは気が合った。彼は五月に連隊と共に開嶺に行き、第二大隊第四中隊長となっていた。

（四）

昭和十六年当初関東軍はノモンハンの敗北を国民に隠蔽し続けて七十万の大軍団を擁す無敵関東軍と称していた。昭和十六年六月二十二日朝、ドイツ軍は独ソ不可侵条約を無視して東部国境を越え、一斉にソ連領内に進出した。日本は帝国最大の仮想敵国を討つ絶好の好機として対ソ武力発動の作戦をたてた。

参謀本部の作戦計画は、関東軍の第一方面軍を以って極東ウラジオ方面に強行進攻作戦を敢行し、沿海州を奪い北樺太、カムチャッカを含むルフロウ付近の極東ソ連領の重要地域を占領する。

第二方面軍はその側面作戦に当り、敵の補給中断を企図して黒龍江、牡丹江よりスクフン河を越え、極東に延びているソ連軍の中間を断つ。

第三方面軍は満州里、ノモンハン方面の防衛を主とするが、時に反撃に出て敵の補給の基幹を断つ。第一方面軍の進攻が容易でない場合にも、第二、第三軍の後方切

断作戦が功を奏すれば自ずとウラジオ方面のソ連軍を敗北に追い込む。

このような策定を基にして関東軍特別大演習の名の下に動員計画をたてた。然し参謀本部内で対ソ進攻強硬派と、慎重派との意見不統一の為に進攻兵力の満州集中計画が進行しない内に独ソ戦は予想外のソ連の頑強な抵抗反撃となり、ドイツ軍の進攻は阻止され、七月十一日以降、スモレンスク地区の攻防戦に入り、戦線は膠着状態となった。

遂に大本営はソ連側に於て日ソ中立条約を厳守して極東に於て脅威を我に与えざる限り、帝国は日ソ中立条約の義務を守るとの方針を出し。大本営、大東亜戦争遂行の基本方針として、1、在満十六個師団で対ソ警戒を厳重にする。2、中国に対して既定の作戦を続行する。3、南方に対して十一月末を目標とし対英米戦備を促進する。とし、ソ連に対しての乾坤一擲の決戦を夢みた大本営及び関東軍強硬策は水泡と消えた。

昭和十六年十二月八日太平洋戦争の開始以後、集中した関東軍の精鋭は次々と南方へ、中国へと転用され、更に昭和十七年六月ミッドウェー作戦の敗北以来の戦局の不利に従って、関東軍の転用は凄まじく二十個師団の精鋭と航空部隊の大半をフィリッピン、沖縄方面へと送った。その後米英の進攻苛烈の中で次々と大本営及び関東軍の作戦は変更されて行った。

大本営は昭和十九年九月十八日、大命を以って対ソ持久作戦方針に転換する旨を発令し、関東軍はこれに基づいて昭和二十年一月下旬「全面持久を構想とする関東軍作戦計画」を策定した。

『ソ連参戦の場合は進攻する敵を国境地帯に於て撃破するに努め、爾後、満鮮の広さと地形を利用して敵の進入を撃破阻害し、持久を策し、やむ得ない場合は、南満、北鮮の山岳地帯を堅固に確保して、あくまで抗戦し聖戦全般の戦争指導を有利にする。このために事前に兵力資材を全満、北鮮に配置し全作戦地区内に所要の施設をするが、戦力の重点は国境地帯におき、各軍は各々の作戦地域内で全能力を最大限に発揮して持久戦を堅持し、各軍配置の兵団はそこで玉砕に至るまで挺進、遊撃戦を展開する』とあった。

それは曽ってホロンバイル方面視察の関東軍参謀が、此の方面の戦法は、海洋作戦と同じ作戦が必要であると提案したというが、日清・日露以来の海軍の基本作戦である敵主力艦隊を水雷艇等によって夜間襲撃し、敵主力艦船を撃破して爾後の主力決戦を有利にする作戦計画がそのまま、広大な満蒙の草原に適用されるであろうか疑わしいものであった。

南満北鮮を堅固に死守し、此処に於て最後の決戦を挑むために、国境方面各軍各部隊は玉砕もやむなしという訳である。既に関東軍総司令部は新京より白頭山麓の通

化へ移っていた。此の白頭山決戦状勢を整えるために各方面軍の各部隊の配置転換、兵器資材の転用将校下士官の転属移動は混乱状態に近いものであった。

ソ連は既に昭和十九年十一月七日、革命記念日にスターリンは日本を侵略国と演説し、二十年二月十一日にはヤルタ協定に於て対日参戦を密約し、二月下旬よりヨーロッパ対独戦線より兵力の転用更送を開始していた。

遂に四月六日ソ連は日ソ中立条約の一方的な廃棄通告をして来た。沖縄戦は絶望的となり、太平洋戦争も最終段階に入ろうとしている折である。五月八日盟邦ドイツは遂に全面的降伏をした。ソ連極東軍は日を追って増強され対日参戦は最早や時間の問題となっていたのである。

然るに帝国政府はソ連の対日参戦密約すら知らず、戦争終結の交渉を広田、マリク会談にかけて幾度も交渉を繰返していた。駐ソ佐藤大使を通して対米英和平と日ソ関係の強化について商談せんと、近衛特使の派遣をモロトフ外相に申し入れていた。

関東軍は二十年夏が危険と判断していたが大本営はソ連の極東への完全集中は十二月と見ていた。その時期ソ満国境は氷結するので翌年の解氷期を待って進攻すると判断していた。

第三方面軍の主作戦は関東軍持久作戦要領に従って、満鮮国境に於ける最后の白頭山決戦を勝利に導くための助攻的遊撃作戦に過ぎないので、努めて主力の損失を防ぎ興安嶺陣地に籠ってゲリラ的攻撃を遂行し、進攻し来るソ連車輛部隊を少しでも多く傷つけることにあった。このため敵戦車を肉攻によって破壊し、戦力の均等後は果敢に攻撃に転ずる、戦力を保持しながら戦斗を行なうため、昼間は煙霧を利用して奇襲、夜間は潜入攻撃を敢行する、武器弾薬は補給充当不能を予想して、努めて戦利品を活用し更に手製の槍、棍棒、或いは手拭に包んだ石塊を武器とする。正に原始的な武器を以って最も近代的な機甲部隊に立ち向かわせようとするのであった。

既に二十年早春より各軍司令部の後退移動が実施され始めていた。東部満洲の第三軍司令部は掖河より延吉に、第五軍司令部は東河より掖河に、第一方面軍は日ソ開戦と同時に敦化に退る計画をたて、第三方面軍司令部はチチハルより奉天へ、第四軍司令部は孫呉よりチチハルへ下る。こうした軍司令部の総移動は隷下各部隊の移動となり、将校等の転属となって一般居留邦人に動揺を与え始めた。特に第三方面軍司令部のチチハルより奉天への後退は「夜逃げ」と在留邦人に非難された。斯うした弱体をソ連に知られたくないため外的虚勢を示そうと兵力の拡充を急ぎ、中国戦線より四個師団を転用し、二十年五月在留邦人の根こそぎ動員を行なって八個師団、七独立混成旅団を新設し、二十年七月には二十四個師団、九混成旅団、一機動旅団を数え、兵員だけは七十万に達した。然し装備は劣悪で新設兵団は竹槍装備の戦力なき張

り子の虎であった。
十六年当初第三方面軍の司令部のあったハイラルでも、第二十三師団、第八国境警備隊の主力は次々と抜き取られて行ったのである。

(五)

夕刻宮坂少尉は野村旅団長より正式に旅団司令部付きより二百五十五連隊復帰の命を受けた。連帯本部は司令部から丘陵を一つ越した所であった。坂を下って連帯本部に行くと丁度清水連隊長が開嶺の新陣地より来ていた。連帯長は直接八十旅団の指揮下にないので新南興の師団司令部や開嶺陣地とハイラル残留部隊との連絡と絶えず駈け廻って多忙であったが、幸い此の日は連帯本部にいたのである。
連帯長は宮坂少尉の申告を受けて
「俺も後から行くが、開嶺へ行ったら大野大尉の指示を受けろ、開嶺は国境から一寸と離れているが油断するな、碌々寝る所もないぞ」
と厳しい顔で注意を与えた。ハイラルでは将校宿舎も有り、食事も司令部で当番兵が作って呉れた。司令部勤務で第一線の苦労を忘れているだろうとの意味を含めての言葉であった。
その夜、宮坂少尉は曲りなりにも平穏に送った司令部勤務から、泥まみれの陣地構築作業の部隊へ復帰する気持の転換に、反田中尉の誘いに応じて反田中尉が連れて来た園田見習士官と共に銀鈴に行った。酒好きの反田中尉はハイラル在駐の頃から常連であった。
三人が入ったのは夜の盛り時であるのに昔と比較すると客も少なく寥れた感があった。だが、未だ戦雲急な外界とは別世界で女達の嬌声があがっていた。
反田中尉は老酒を何杯も仰っていた。数名の女達は満鉄社員や、他の物産社員の屯ろするソファーに嬌声と微笑を振り撒き、時折り反田中尉達の席にもやって来た。忙しげにカウンターから客席を行き来していたマダムが反田達の席に寄って反田中尉の肘掛に軽く腰を掛け、反田のグラスに老酒を注ぎ乍ら、宮坂少尉に
「まあ、少尉さん夜のお越しは珍らしいこと」
と皮肉って微笑んだ。
「此奴は堅物だからな、今の内に命の洗濯をしておけと連れて来たんだ」
と反田中尉は豪快に笑い乍らマダムを引き寄せて抱えた。
「ターさんだって此の間は素放かして悪い人」
と銜えた煙草の煙をフーと吹きかけると友田の身体を押し返して立ち上り然り気なくカウンターの方へ行って仕舞った。
宮坂はマダムの後姿に視線を追って満鉄社員の一団の席に坐ったマダムの姿態や、一座の者達に振り撒く笑顔を凝っと見詰めていた。宮坂には見せない崩れた表情が

そこに有った。腕を廻わして酔客の首を抱き、洋酒をグッと一気に呑み干す潤った唇や目尻の辺りにコケテッシュな情感が漂っていた。宮坂の知らぬ半生の旅路や、生活感情の深さがあるように思えた。酔客の中に精悍な如何にも大陸浪人と言った、目付きの鋭い口髭をピンと張った中年男が頻りと絡んでいた。マダムは寧ろそれを快げに受け流しつつ訊いているようであった。話の内味は聞き取れないが、緊迫した情況の中で強引にマダムを引攫って後方へ逃避しようと口説いているようであった。マダムは大勢の酔客の誰にも意味有り気な風情を見せて巧みにあしらい大陸浪人には特に気を魅きつける目を流していた。宮坂には銀鈴の客達が全てマダムの美貌に魅せられて来ているように思えた。特に反田中尉は前々より特別な関係があるように思えた。
彼は白濁の酒を仰る程に悲痛な思いが募ってくるのだった。今、祖国の敗北の時が迫って来るとも知らず、多くの男共に媚を示すマダムを哀れと思うのであった。国の大事に際して女に心を痛めるなど軍人に有るまじきことと思い乍ら、国の存亡も女の崩れ堕ちると共に彼には大きな悲しみと思えた。
園田見習士官相手に大声で意気捲いている反田中尉の言葉も上の空で聞いていたが、宮坂少尉は不意に立ち上ると黙って戸口に向った。
「おい宮坂、貴様もう帰るのか」
と反田中尉が怒鳴った、宮坂はマダムがいつものように後から寄り添って送って呉れることを期待して横目で奥のソファーの客と戯れている彼女を見た、然しマダムは宮坂の去るのも意に留めず酔客に嬌声をあげていた。
「これが永遠の別れか」
宮坂は切ない思いでドアを押した。
外に出ると月が出ていた。夜のハイラルの市街は湖底の村のように静まり返って紫紺の漂う中にあった。彼方此方で犬が吠えていた。放送局の建物を左に折れて東山軍宿舎に戻る坂道を歩く内に酔が醒めて、酒場での反田中尉の意気軒昂たる大言壮言が空しく思い出されて来た。酔覚めの心は何にか物悲しかった、遠く故郷を離れた哀愁と孤独の想いからでもあったが、銀鈴のマダムとの別離の悲しみを秘かに嚙みしめ堪える悲しみでもあった。
坂を登り詰めると北方に黒々と連なる国境の山々が見えた。暗く戦雲の蟠る空を見ると彼の背後にある祖国を強く意識した。
「故郷には父母が、兄弟が、幼な友達や恋人もいるのだ、俺は祖国を守る使命がある」
彼は昂揚した気持を取り戻して、拡がり来る戦雲を遮切るようにハイラルの夜の空に大きく両手を挙げた。

(六)

満洲里よりハイラルを経てチチハル南の昂昂溪に至る

全長六百粁の満鉄浜洲線は、免渡河辺りより大興安嶺に入り、緩やかに限り無く起伏する大山脈を南東へ登りつめ、大興安嶺の狭隘部に達す、此処が宮坂少尉の行く開嶺であった。浜洲線は更に興安東省へ向って緩やかな下り坂を行き、博克図、札蘭屯を経ると目下に満洲中央部の大平原を展望してチチハル、昂昂溪と進むのである。満洲里、ハイラルから南下して満洲中央平原に出る興安街道も、此の山狭に吸い寄せられたように開嶺に出て新南興で浜洲線に結ばれている。

交通の要地開嶺の街は東西に大興安嶺を断ち切ったように、直ぐ街の上に険しい聳り立つ岩壁が覆い被さっていた。此の自然の要害はソ連軍の進攻を喰い止め撃破する防衛の要地であり、更に内陸へ進出を許した場合は後方攪乱の拠点でもあった。ソ連軍進攻に対する第一の防衛はハイラル、更に浜洲線沿線の要所にも数段の防衛陣を構えて開嶺に達する迄にソ連軍は半減する作戦であった。此の基幹作戦と併せて大興安嶺の山狭部に入り込む森林鉄道を拠点として守備隊を派遣していた。然し網の目のように配置した守備隊は徒らに兵力を分散して何の役にも立たなかった。開嶺より北百五十粁の陣地構築隊などは、開戦後交信不通となり十八日に満軍よりの連絡で停戦を知り、博克図に徹退中ソ連軍戦車部隊と遭遇して武装解除を受けた有様であった。

満洲里よりハイラルを経て昂昂溪に至る延々六百粁の全浜洲線沿線の広大な地域の守備は、第四軍上村幹男中将の揮下にあり、開嶺付近の要地を防衛する主力は百十九師団で、師団指令部を博克図に、戦斗司令部は新南興に置いてあった。宮坂少尉の属す第二百五十五連隊は開嶺を取囲む興安嶺の山々を利用して陣地構築に明け暮れていたのである。

反田中尉と開嶺の駅に降り立った宮坂少尉は、南北に細長い山狭の街の東西に迫る険しい山岳を見上げ、此の厳しい自然の要害の地に鉄火が炸裂する日を思うと、冷気を浴びたような緊張を覚えるのであった。

暫くして来た軍用トラックに乗って興安街道を南下し、砂塵の舞い上る脇道を大きく揺れ乍ら山懐に在る連隊本部に着いたのは夕刻であった。先に軍用車で着いていた清水連隊長が待っていたが、反田中尉より改めてハイラルの状況報告を受けただけで、何の命令も無く大野大尉の指示を受けよと言って山狭の窪地にある木造宿舎に帰って行った。

大野大尉は連隊長を送ると直ぐに反田中尉、宮坂少尉の前に地図を拡げて、防衛陣の大要を冷静に説明し始めた。宮坂少尉は脳裏に具体的な映像として焼きつけて置かなければならなかった。

二百五十五連隊は開嶺駅、市街を包み込むようにして陣を構え、駅の東側の山岳に第二大隊、その南陵線を下った山腹に連隊本部が在り、更に後方新南興の西に師団

司令部がたった。駅の西側台地に第三大隊が置かれ、此処が直進して来るソ連軍の第一に突き当る要点なので、後方には野砲連隊の速射砲大隊が砲座を設けていた。南は第一大隊が後方の抑えとして固め、北方は十七迫撃砲大隊が鉄道を東に見下す山腹に砲撃陣地を構築中であった。

此れに依って西北より国境を越えたソ連軍は先ずハイラル方面で相当の打撃を受け、更にイレクテの東側に在る逸渡河連隊に依って致命傷を受ける筈である。尚もソ連軍が補給増強されて開嶺に進攻すれば、防衛陣の包囲網の中に入って集中砲火を浴びることとなる。

冷静に眉一つ動かさない大野大尉は、更に言った。

「布陣は作戦上では見事であり、主要の地下陣地の設計はハイラル防衛のペトン永久陣地を範にしたもので仲々堅固である。然しそれは全てデスクプランである。第一に資材兵力の不足で陣地構築が進行しない、更に防衛陣不可欠の野砲、重火機は既に内地や、南満に運び去されて皆無に近い。第三に兵隊は曽っての関東軍の精鋭でなく、装備は劣等、教育は不充分である。数少ない関東演以来の古兵以外は靴はズック靴、地下足袋、水筒は竹筒帯剣は分隊の半数だけ、小銃は一個分隊に二、三丁の九九式小銃である。加えて、六月になって半島出身兵や現地召集の未教育老兵が中隊の過半数となってしまった」

宮坂少尉は張り子の虎の関東軍の姿をまざまざと見る思いであった。そして進攻し来るソ連軍は鉄道や主要道路を南下し来るとは限らない、仮に日本軍が僅かな火力の十字砲火を浴びせたとしても、日本軍に攻撃をかけ膠着状態となる、犠牲を犯さずとも、機械化兵団である、起伏の緩やかな大興安嶺の、いずれの丘陵でも自由に選んで日本軍の抵抗に肩すかしを喰わせ、満洲内陸中央平原へ突入し、チチハル、奉天を攻略し破竹の勢で南下するであろうと思った。

宮坂少尉は連隊本部で徹夜した翌朝、第二大隊本部に行き、岡部大隊長に大隊復帰の報告をすると、所属の第二大隊付将校として午后から反田中隊長と共に陣地構築の視察を早速始めた。

主要陣地は丘陵の谷間や廻りくねった谷狭間の切れ目を利用して、西北より進攻するであろうソ連軍より死角になる個所を入口として横穴を掘り、内部を縦横に掘り進めて地下連絡網をつくり、地下砲座や弾薬庫、兵舎を作るのに忙しかった。然し陣地造りに満足の道具がある訳ではない、入口の固い岩盤はダイナマイトを入れて崩したが、横穴を掘るにはほとんど円匙と金挺、鶴嘴であった。金挺は鉄棒を叩いて伸ばした鑿であった。作業は三人一組となって掘り進め、一人が鑿を岩盤にあて一人がハンマーを振って打ち込む、飛び散り砕き落ちる砕石を一人が集めて外に運び出す。鉱内ランプの処々に置かれた闇の中での重労働であった。三人は交互に役割を交

替したり時々狭い坑道に連なって休んだ。死んだように横になって何にを考えているのであろうか、兵隊達の多くは敗戦後シベリヤに抑留され、捕虜収容所で数年間ザジョールナヤ炭坑で同じように炭坑ランプを頭につけて作業するとは夢にも思わなかったであろう。

砕石は昼間でも狼避けの篝火を焚いてある出入口に運び出すと、舟形の木箱に積み込み、トロッコ軌道を使って遠い谷間に捨てる。舟形の木箱は弾薬入れの木箱などを活用した、舟の外底に滑油を塗って軌道の上を滑らせて運ぶものであった。丁度木馬を曳いているような状態なので、兵隊達は木ン馬曳きと言っていた。トロッコ軌道は敷設したか肝腎の荷車が無いので兵隊達の苦心の作であった。だが、岩石や土塊は重く、木ン馬は滑らず、兵隊達は綱を肩に掛けて曳っ張って運んだ、逆に傾斜面の具合で滑り過ぎたり、曲り角で急停車して舟箱ごと引っ繰り返って、砕石と一緒に谷に転げ落ちて大怪我などをすることも多かった。それでも木ン馬に乗って丘陵を滑り下るのは暗い壕内作業からの解放感があって、兵隊達は叫び声をあげて滑り落ちて行くのであった。

日の目見ずの土龍作業を数日やると、黄砂を全身に浴びた襤褸布のような姿で山を出る。途中交替の上番隊が手にハンマー、背に丹匙を銃の代りに斜に背負って登って来るのと擦れ違う、上番隊は登り道を緩っくりと軍歌を唱ってやって来る、古い満洲行進曲や、討匪行などであったが時に「此処はお国の何百里」を切切と歌っ来ると、擦れ違う下番隊の疲労し切った姿が痛ましく、軍歌は一層物悲しく更に虚しく跡切れて、黙々と山を降る下番隊の後姿を見送るのであった。

(七)

大陸の夏は短かかった八月に入るともう白樺の葉が色褪せ、夜半は膚寒くなった。宮坂少尉が陣地構築の合間に延々と続く鉄路を見下すと、引揚邦人を満積した無蓋列車の通過が次第に頻繁となって来た。奥地の開拓団の婦女子や沿線市街の邦人商店や、鉱山鉄道関係の人々が、ソ連軍の進攻を予想して脱出して行くのである。宮坂少尉は銀鈴のマダムや女達の身を案じ、ハイラル最后の夜の月を想った。恐らくハイラルからの引揚列車は軍人家族が最優先で、軍関係者や顔の利く会社関係の者が先を争っているであろう、戦争開始の混乱に捲き込まれる彼女達の運命を思うと暗然として、悲痛な思いで汽笛を残して去る列車を見送るのであった。

慌しい緊迫した空気を敏感に察した満人、蒙古人の部落では、放牧の羊や豚、鶏等を追い集め馬車に穀物を積んで避難し始めた。

満蒙の大平原は古来より漢、満、蒙王朝の興亡盛衰が繰返された、近世強国の支配は清、露、日と激しく変った、その変動の度に大地の民の家は焼かれ、民は流浪し

た、争覇治まれば旱魃であった。そして匪賊や馬賊の跳躍する処であった。世の変動や天災を祖先以来幾度も経験した満蒙大地の民は、如何なる大変動にも「天知道没法子」と生き抜いて来たのである。その生きざまは悠々たるものであったが、動乱災害を察するのは明敏であった。その彼等が動き始めたことは最早やソ連の進攻は決定的であるとの警鐘であった。

だが、大地は未だ狂いなく悠久の営みを繰返していた。夕には天空を一面に赤く燃やして太陽は大興安嶺の陵線に没し、朝は平原の紫雲を破って日輪が生きもののように昇った。宮坂少尉は週番士官勤務となったので、早朝の動哨巡察も束の間の安らぎと、草原を歩くのを秘かに怡しんだ。

大興安嶺の朝は内地の早春のように膚寒かったが、東方遙か大海原のような草原に太陽が昇ると、緩やかに起伏する丘陵は緬羊の膚のように柔く浮び出て、疎らな白樺や松林にカッコーが鳴き始める。足元の荒地に縋りつくように生えた野草に僅かの朝露が光った。短かい大陸の夏を惜む白百合や蘭、石南花が草原に点々と見えて来る。彼は北満の地を故郷の沖縄の海と比較して、陸は海より広いと思った。沖縄の海はコバルト・ブルーであった、水平線をブルシャン・ブルーの空が隔てて海は限られて見える、海面は丸く膨らみ弾んで四方の水平線に拡がって、地球は球体であるとの実感は有ったが、決して広大という思いを抱かせなかった。彼の育った沖縄本島を始めとして大小無数の島々が緑濃く洋上に連なり海の広さを消している故かも知れなかった。彼は渡満以来その北満の摑みようのない漠々たる広野に気を遠くした。

そして夏草の茂みの続く地の果にあるシベリヤを想った。黄砂と雲霧の下に潜むソ連軍を思った。空と大地の得体の知れない広さの畏れと、ソ連軍への虞れとがオーバーラップして己れが卑小なものに思えた。

遙か遠い南海の島々での米軍の反撃は機械文明に依るカリスマ的東洋精神への挑戦と感じた。その軍隊は合理的な組織とメカニックな兵器で装備した機械集団と思えた。戦斗は鋭利なマシンで露わな肉体を切り刻むように感じた。島々の玉砕を聞く度に宮坂少尉は膚に切りつけられる痛みを覚えるのだった。だが、シベリヤの見えざる軍隊は何にか巨大な原始の爬虫類がむくむくと甦み返ってくる恐怖があった。動物の本能的な虞れが生じてくるのであった。沖縄の戦は人間に対する機械の暴逆であったが、北満の戦は人間に対する野獣の跳襲に思えた。沖縄の戦で彼の生家は戦禍に捲き込まれ、老父母兄弟の安否すら定かでないが、宮坂少尉には未だ実感として迫って来ない。何処かのジャングルに潜んでいると一縷の望を繋いでいたが、ソ連軍の徹底的な攻略を受ければ、戦場となる国土は焼き尽くされ人々は全て抹殺されるように思った。

彼は暗い思いを反芻し乍ら動哨巡察に丘に向った。起伏する丘陵の狭間に巧みに隠されて陣前監視陣地がある。白樺や根松等の繁みの下に半ば地下壕となっていて、時折の雨に備えて張った天幕が目印となっていた。宮坂少尉の靴音に哨兵が慌てて飛び出して陣前の蛸壺の縁に立って、

「異常ありません」

と捧げ銃をした。宮坂少尉は異状無しの報告が不快であった。此の兵隊は、ソ連機の国境付近の偵察飛行が日を追って多くなり、三河方面にソ連機械化軍団が大規模に集結中であるのを知っているのであろうか。構築中の興安嶺陣地の直ぐ下の丘には、

「兵隊さん、戦争をやめて直ぐ降伏しなさい」

と書いた板切れが何十本も打ち込まれている。近くに白系露人か満人スパイが潜行しているのを知らない筈はないと思った。

最後の監視哨を巡察して帰路につくと丘陵の窪地に在る各中隊の兵舎で起床ラッパが鳴っていた。兵舎と言っても、ハイラルの赤煉瓦の立派な兵営とは違って粗末なバラックである。陣地構築部隊が興安嶺に入った六月より急造したもので、壁は山の石を積み上げ、間隙は泥土を塗りこめ、屋根と床の骨組を白樺の樹皮で屋根を張りその上に湿地の葦を葺いた。机、椅子寝台に至る迄山の白樺を切り倒して作ったのである。

起床した兵隊はその兵舎よりパラパラと飛び出して、三粁程山坂を下った湿地や崖の湧水の僅かの溜り水で口を濯ぎ、顔を洗うとまた駈足で戻って来て点呼を受ける。

点呼後舎前に置かれた白樺の長机に向い合って朝食を摂った。麦飯か粟飯、時には大豆飯に昆布の味噌汁梅干の粗末な朝食であった。

中隊本部に戻った宮坂少尉は当番兵の運んで来た朝食を黙々と食べ乍ら、

「昨夜は幸い戦にならなかった。明日は分らない。明日とは言わず、今日、今、敵機の爆撃があるかも知れない。太平洋の戦はもう終末に臨んでいると言うのに、大陸の戦は今始まろうとしている。絶望的な戦争に俺は耐えられるであろうか」

と撫然と箸を置いて低い白樺天井を睨んだ。

序章　終

編集後記

○甲子園に高校の球児たちの熱戦がくりひろげられ、その大歓声が電波にのり、ブラウン管を通して列島をかけめぐる時、あたかもこの号の編集を終わる。こちらは「まんじ」の第三球を投じようとする。

○チアガールの声援が惜しみなく青春を謳うとき、A賞、N賞は惜しみないバーゲンセール。(酷い作品だ)という声がある。されどわれわれ同人雑誌派はこれを問題とせず。わが道をゆく。

○わが「まんじ」の夏の陣は好調続きの六割強のバッティング。しかも十割打者は六人を数え、まずは重畳のきわみ。同人雑誌とは書けば書くほどお金のかかるもの。その道理を承知の上で同行十二人に強化。

○書くほどにお金のかかる道理があるから、前号から執筆料制度が採用されている。歌誌や俳誌のお家安泰が羨しい。投稿者を満足させてお釣まで出るのだから芽出たい。こちらは身銭を切って、なおわが道をゆこうとする、志を屈しない芽出たさがある。

○発行部数を一貫して同人の頭数に十部を掛ける数に節約している。知己、知友の範囲ならこれで足りる。(活字世代)は昭和一ケタまでという説をまつまでもなく、文芸の理解者となるとさらに寥々たる数に過ぎないことを、われわれは知っている。

○作品を活字にしてしまわないと落着かないと言った同人がある。作品は活字になると、他人の装いをもって改めて作者に対面するものだ。だから、この言葉には一面の真理が認められる。己の作品に対面して含羞を覚えるようでなければ進歩はない。(禎)

「まんじ」第三号

昭和五十六年九月一日発行　(非売)

編集　大和禎人

印刷　㈲加藤清耕社
千代田区神田神保町三ー一
☎(261・5743)

発行　「作家群」(まんじ)編集部

〒一〇一東京・千代田区神田駿河台二ー九
☎〇三(二九三)〇〇九四　柴田方